
ダンジョン

はくゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョン

【Nコード】

N8497N

【作者名】

はくゆ

【あらすじ】

永遠に続くといわれ、世界各地に存在するダンジョン。その中の1つのダンジョンで育った青年の物語。

一話 ゼルスの日常

周囲を暗闇に包まれながらも、しっかりとした足取りで歩む一人の青年が居た。視覚で判断できないほどの暗闇の中、堅い岩肌を踏みしめ、部分的に隆起した地面につまずくこともない。まるで青年には辺りの様子が見えているようだ。いや、見えているのだろう。その証拠に、青年の瞳は注意深く辺りを見渡している。

青年の名はゼルス。

今は暗闇により姿が隠されているが、無造作に伸ばした茶髪に、やけに攻撃的なギラギラとした蒼い瞳が特徴の、年若い男である。

「今日は食事がなかなか出てこないな」

何かに気付いたのか、ゼルスは薄く笑い立ち止まると、わりかし大きく声を発した。

すると、その声を合図にしたかのように、複数の気配が隠れることを止めゼルスを包囲した。

ゼルスは複数の気配から発せられる殺気を浴びると、脅えるどころか、喜びを隠しきれずにニヤリと笑い、ダラリとさげた両腕に炎を灯す。炎の灯りで、ゼルスを囲んでいるモノ達の姿が明らかとなり、ゼルスはさらに喜びをあらわにした。

「ハッ……、ようやく来たかメシ！すぐに焼いて食ってやるから大人しくしとけよ」

ゼルスがそう言う相手は、常識的に考えて人間がメシとは絶対に言えない存在だった。寧ろ、人間がメシになってしまったらう。

口からは大きな牙がのぞき、眼はギョロリと剥き出しになり、今にもその鋭い爪と、銀の毛で包まれた鍛えられた肉体で飛びかかってきそうだ。

ゼルス曰くメシの正体は、二本足で立っている狼　人狼であった。その数、前方に二、後方に二、計四体。

四体のうち、ゼルスの後方にいた二体が動いた。二体とも消えたとは思えないスピードでゼルスに突進すると、その勢いに乗せ、ゼルスの背中を爪で引き裂こうと襲いかかる。

「甘えんだよ！」

しかしその爪は空を裂き、人狼の後方にいつの間にか移動していたゼルスは、両腕を襲ってきた人狼に向け、纏っていた炎を光線のように放出した。

凄まじい速さで進む炎を、空を裂いたことでバランスを崩した人狼に避けられるはずがなく、炎は四体の人狼の腹に穴を開け、絶命させた。

なんとゼルスは、当初自分の前方にいた二体の人狼にも炎が直撃

するよう、調整して放出していたのだ。

「よっしゃ、メシゲット！でも一体しか食えねーんだよね。……
三体は凍らせて保存食にでもしとくか」

ゼルスは人狼を倒したことに喜ばず、単に食糧を確保できたことに喜んでいた。他のものが人狼を倒したならば、その事に喜ぶだけで、まさか人狼を食糧にするなど考えもしないだろう。

ゼルスは好機嫌に、絶命した四体の内、三体の人狼を一か所に集めると、三体の人狼に向け手をかざす。すると、あっという間に三体の人狼が氷漬けになった。

ゼルスはこの行いが、あたかも当然のような顔をして、残った人狼の元へ向かっていると、地面に落ちている一つの球体に気がついた。滑らかな表面の、綺麗な赤い球体だ。ゼルスは手に取ると、

「小さいな。ま、敵も弱かったし、こんなもんか」

と、赤い球体を一瞥し、まるでゴミのように赤い球体を後ろにポイと投げ、再び人狼の元へ歩き出した。少し間をおいて、赤い球体が地面に落ちる音が空しく辺りに響いた。

この光景をこの世界に住んでいる者が見たら、あまりの非常識さに愕然とするだろう。

ゼルスがゴミのように捨てた赤い球体は、通称『珠^{たま}』と呼ばれるものである。珠とは、ある特定の場所でモンスターを殺すと出現す

るもので、魔力を内包している。モンスターが強ければ強いほど出現する珠は大きくなり、そして、大きければ大きいほど内包する魔力の量は多くなる。

ゼルスは知る由もないが、この珠を売ると、魔力の量によつては、かなりの金額を手に入れる事ができる。珠を入手するために危険を冒して特定の場所に侵入する、冒険者という職業もあるくらいだ。

故に、その珠をゴミのように捨てたゼルスは、この世界に生きるものから見てかなりの異端児である。

だが仕方あるまい。ゼルスはその事実を、知る術がないのだから。珠が出現するのは、特定の場所。つまり、ゼルスはその特定の場所に居ることになる。ゼルスが居る場所は周囲を暗闇に包まれた真っ黒な世界だが、ゼルスが炎を纏った時、周囲の状況が明らかに変わった。周囲は広がったが、上も下も、右も左も岩肌しかない、洞窟であつた。

だが、そこは普通の洞窟ではない。そして、珠が出現する特定の場所にはちゃんとした名前がある。その名は『ダンジョン』。この世界の各地に存在する、永遠に続くといわれる迷宮である。

さて、ゼルスが何故珠を捨てたのか。ゼルスは珠の大きさが殺した敵の強さを示している事を経験で知っている。だが、珠を売ればお金になる事は知らない。答えは単純だ。ゼルスはずっと、このダンジョンで育ってきたのだから。

二話 ゼルスの目覚め

十三年前。

ゼルスが初めてその瞳に捉えたものは、親ではなく、それどころか人ではなく、ただ目の前に広がる暗闇だった。自分が瞼を開けているのかさえ分らない暗闇の中、恐怖した。

何故自分がこんな漆黒の中にいるのか、此処はどこなのか、自分は何者なのか、何故何も覚えていないのか。

ゼルスは全てにおいて意味が分からなかった。

唯一記憶の中にあつたのが、会話の方法など、ある程度の一般常識。加えて、『ゼルス』という自分の名前だけで、自分が今まで何をしてきたかの記憶はなかった。

ある程度常識があつたお陰で、ゼルスは自分が記憶喪失だということとは理解できた。

ゼルスは泣いた。当たり前だ。この頃のゼルスは容姿から察するに五、六歳程度。そんな子どもが、こんな得体の知れない状況に陥って、混乱し、恐怖しない訳がない。大人であっても決して耐えきれないだろう。

しかしダンジョンは、ゼルスに泣く時間を与える事さえ許さなかった。

ゼルスの存在に気づいたキラーベアという巨大な熊のモンスターが、その3メートルはあろう巨体を動かし、のしとゼルスに近寄って来たのだ。

横幅も1メートル以上はあり、圧倒的な存在感を醸し出しているキラーベアは、ゼルスに気づかれずに遂にゼルスの目の前に来た。どうやらモンスター達にとって、暗闇など関係ないらしい。

（なんだろう、誰がいる……？）

暗闇で周囲の状況が分からないが、前方に妙な圧迫感を感じ不思議に思ったゼルスが、顔を上げると、

「ガオオオオオオオオオ！！」

鼓膜が割れるんじゃないかと思うほど、凄まじい雄叫びをあげるキラーベアがそこにいた。

空気まで震わすキラーベアの雄叫びに、子どもであるゼルスが動じないはずがない。キラーベアが存在に気づいたゼルスは、腰を抜かし、尻餅をついてしまう。

言葉を発するとこさえ出来ず、ゼルスはただただ震えるだけだ。

キラーベアはそんなゼルスにお構いなしに、木の幹のように太い

腕をゼルス目掛けて降り下ろした。

ゼルスはただキラベアを見ることしか出来なかった。声を出すことも、逃げ出すことも出来なかった。出来たことといえば、反射的にだが眼を瞑ったことと、（助けて！）と心に強く願うこと。ただそれだけだった。

願うだけで助かるはずかない。それが世の常だ。しかし、この時に限ってはそうではなかったようだ。

バチバチという物凄い放電音と同時に、物凄い光がダンジョン内を明るく照らした。

ゼルスは何事かと思い、反射的に閉じた瞼をおそるおそる開いた。先程まで自分を殺そうとしていたキラベアは居らず、その代わりに大分離れた所に、電気が纏わりつき、パチパチと音を鳴らしている物体があった。

ゼルスは立ち上がると、恐々それに近付き、正体を確かめた。闇に多少慣れたことと、電気が放つ微弱な光のお陰で、そこに行くまで苦労はなかった。

正体は案の定キラベア。ピクリとも動かない様子から、どうやら絶命しているようだ。

ホッとしたゼルスは、また腰を抜かして地面に座り込んでしまった。

しかし、ある事に気付き、すぐに立ち上がった。

「……だ、誰かいるの!？」

キラーベアを殺した誰かがどこかに居るはず。ゼルスはキヨロキヨロと周囲を見渡し、必死に声をあげて助けを求めるが、それに応えるモノはない。

キラーベアに纏わりつく電気のおかげで多少周りが見えるが、人の姿はない。

気配も全くなく、ゼルス以外誰もいないようだ。

ゼルスは急に寂しくなり、顔を悲しく歪める。そして、心の中でキラーベアを倒した見知らぬ誰かにお礼を言おうと、これからのことを考え始めた。

(此処は本当に危険だ……。さっきは何とか助かったけど、今度も助かるとは限らない。ベストなのは僕を助けてくれた人と一緒にいることなんだろうけど……。何処にも見当たらないし。……。助けてくれるなら、姿を見せてくれたっていいのに)

助けてくれた人に不満を漏らしていると、ゼルスのお腹がきゅー、と可愛らしい音をあげた。

(お腹すいたなあ)

その時、キラーベアに纏わりついている電気が収まり始めていた。

ゼルスは徐々に暗くなっていく様子を認識しながら、恐怖でパニックになりそうなのを必死に耐えていた。

そして、何を思ったのか、放電が終わってしまったキラーベアをチラッと見ると、すぐに首を横に降った。

（流石にアレは無理！でも、せめて火がとおってたらなあ……）

どうやら、キラーベアを食べようとしていたみたいだ。パニックにならなかったのも、空腹が恐怖を上回っていたことが一因しているだろう。

ゼルスが残念そうにキラーベアをチラチラ見ていると、突然、ボツ！という音と共に、キラーベアから炎が上がり、火だるまになった。

その光景を見たゼルスは啞然とする。まさか、また自分が願ったことが叶うとは信じられない、といった様子だ。ゼルスはしばらく安心していましたが、時間が経つと香ばしい香りが漂ってきて、自然と涎が出てきた

きっと、キラーベアを殺した人が何かしたのだろう。と、ゼルスは思ったが、その人を探すまでは至らなかった。

あまりの空腹のせいで、目の前で燃えている肉の塊から目が離せなかったのだ。

今後のためにも自分を助けてくれた人を探さなくてはいけないと分かってはいても、体が肉の塊から目を離す事を許さない。

膠着していたゼルスは、燃え続けていた炎が収まると、ゴクリ。と喉を鳴らし、すぐ駆け出してキラーベアにかぶりつく。

「ゲエ……、ゴホツゴホツ！」

が、キラーベアの毛が燃えきつておらず、残った毛を大量に口に含んで噎せてしまった。

「くっそ……、口の中気持ち悪い。毛皮剥がしたいけど……ゴバゴバツ……カハツ」

ゼルスが喋っていると、急にゼルスの口から水が溢れだしてきた。ゼルスは、なんで！？と一瞬思ったが、次に起きた出来事で、理由が分かってしまった。

唐突にゼルスの前方で風が発生し、キラーベアの毛皮だけを吹っ飛ばしていく。またもや啞然となるゼルスは、吹き飛んだ毛皮の所まで行き、その様子を確かめる。

毛皮は幾つかに分かれ、綺麗な切り口が出来ており、何か刃物で斬られたことが推測出来るが、この場に刃物はないし、あったとしても、いつ斬ったというのだろう。

そんな事をゼルスは考えていたが、うすうすゼルスは勘づいていた。

（やっぱり僕が願ったからか。僕が願ったら何でも出来るのかな）

そう。全てはゼルスが願ったからであり、キラーベアが電気で死んだことも、火だるまになったことも、口から水が溢れたしたこと、見知らぬ誰かがしたわけではなく、全てはゼルスが無意識に行ったのだ。キラーベアの毛皮は、恐らく風で切り裂いたのだろう。

このようにゼルスはちゃんと理解していたが、信じられなかった。まさか、自分にこんな力があるなんて思えなかったからだ。

だがゼルスが願ったこと全てが叶うわけではないようだ。もし願った事が叶うのなら、ゼルスはとくに自分が誰か思い出しているはずだし、此処からも脱出できているはずだ。

ゼルスは、どんな願いなら叶うのか考えようとしたが、その前に自分の腹ペコ具合が極限状態だったことに気付いた。

（……とりあえず、食べてからにしよう）

ゼルスはこんがり焼けたキラーベアにかぶりついた。

「ふう」。満腹満腹」

ゼルスは満足そうに眼を細め、片方の腕だけが骨となり、全身氷付けにされたキラーベアを眺める。全身凍り付けになっているのは、勿論ゼルスの仕業だ。

余ったものを放置しておくのはもったいない。そう考えたゼルスは、保存食として腐らせずに保管しておきたかったので、凍れ、と願うと見事に凍ったという経緯だ。保管する場所も、ゼルスが念じると、空間を割るように楕円形の黒い入口のようなものが出現したので、その中に凍ったキラーベアを入れておいた。

それからゼルスは寢床を探して辺りをさ迷ったが、何度もモンスターに遭遇した。キラーベアもいれば、変な爬虫類っぽい化け物、馬鹿でかい蜘蛛など、その他にも様々な種類がいた。

幸いゼルスの何でもアリな能力のおかげでなんとか死なずにすん

だが、ゼルスは疲労してしまった。体力的にもそうだが、精神的にも大きく疲弊している。これはモンスターと戦ったことや、訳の分からない環境に置かれた事のストレスだけではないようだ。

そして、モンスターと戦う内に、ゼルスの能力について幾つかわかったことがあった。

まず、ゼルスが使っていた能力は魔法であるということ。これは、ゼルスが覚えている記憶に残っていたから間違いない。今まで気付かなかったのは、気が動転していたからだろう。

そして、何回か魔法を使っているうちに気付いた事がある。どうやら魔法はゼルスが放っているわけではないようだ。

魔法を使うのに必要な魔力は使っているが、自分で魔力を消費し魔法を起こしているのではなく、自分の魔力を誰かにあげて、魔法を起こしてくれるようお願いしているようにゼルスは感じている。

その証拠になるか解らないが、ゼルスは魔法を使ってから当初のような寂しさを感じないのだ。まるで沢山の人がゼルスを見守ってくれているような、暖かさすら感じている。

ゼルスが考えたのは、その見えない誰かは妖精かなにかで、ゼルスはその妖精かなにかに魔力を提供して、魔法を起こしてもらっている　　というところだ。

事実かどうかは解らないが、ゼルスは感覚的にだが確信を持って

いた。

ゼルスはそこまで考えたが、疲れのせいか急に睡魔が襲ってきた。なれない環境で疲れたせいもあるが、おそらく魔法を使ったことも原因だろう。魔力を消費すると、疲弊する。このこともゼルスも記憶していた。だが、こんな危険地帯で何もせず眠るわけにはいかない。ゼルスは妖精に魔力をあげ、周囲に地面の壁を創ってくれるよう頼み、あつという間に眠りについた。

三話 外へ向けて

眠りから目覚めたゼルスは、起き上がると伸びをする。そしてゼルスを守るように聳え立つ、ゼルスを囲う隆起した地面の壁に異常がないか確認をした。

この地面の壁は、ゼルスがここダンジョンで生き残るために学んだ就寝時の防衛策のための魔法だ。この魔法がなければ、十三年間生き残ることは出来なかっただろう。

この防衛策は、ゼルスが居る内側から見ればただの地面の壁にしか見えないが、外側から見ると随分と違った様子になる。まず、大抵のものなら切り刻む風が地面の壁を覆い、その風を人間が触れれば簡単に感電死する程の電気が覆っている。

例え防衛策を突破しようとして襲いかかるモンスターの電気に耐えたとしても、二層目の風で、触れた部分が無残にも切り刻まれる。電気、風に耐えきれたとしても、敵の攻撃力は格段に落ちていくはず。普通の地面と比べ、格段に硬化させた隆起した地面を破壊するのはほぼ不可能だろう。

実を言うと、三層目の地面の壁はモンスターの攻撃を防ぐというよりは、他の理由で防衛策として取り組まれている。それは、ゼルス自身を守るためだ。風の魔法は、内側から触れるものも容赦なく切り刻んでしまう。そんな状況下で安眠できるわけがなく、地面の壁は、いわばベッドから転落防止のための柵の役割を担っていた。

ゼルスは当初、内側から風に触れても切り刻まられないようにしよう、と思い、そのようにイメージをして妖精に魔力を渡し頼んでみたが、なんと魔力がゼルスに返されてしまった。未だに境界線は分らないが、どうやら妖精にも、出来ることと出来ないことがあるようだ。

（しっかし懐かしい夢みたな……。あれからもう十三年か）

ゼルスは瞼を擦りながら欠伸をし、感慨深い思いにとらわれた。実は一番最初に遭ったキラーベアでさえ、あの当時いた階では最弱レベルだった。もっと強いモンスターがたくさんいた。常に毒霧を吐いているモンスター、身体中に電気を纏っているモンスターなど様々だ。よく十三年間も生き残ったものだ、としみじみ思う。

何度も命の危機を体験した。十三年前は一年間ずっと命の危機に晒されていたろう。勿論、十三年間通じて命の危機に晒されていたわけだが、月日が経つ度に慣れが生まれ、余裕ができたので、一年目ほど危険ではなかった。

ゼルスは十三年間ダンジョンにいて解ったことがある。どうやらダンジョンは下層に行けば行くほどモンスターが強くなり、その階の広さも広くなるということだ。

ゼルスは五年前に一度だけ、下層に降りたことがあった。本人は

上層に行く階段があるとは知らず、この地獄から脱出するには下層に行くしかないと思い込んでいたからだ。五十階だけ降りたが、待っていたのは更なる地獄だった。最初にいた階が天国だと思えるほどに。

まず、寝るときの防衛策が効かなかった。当時は、地面の壁の電気を覆っているだけで、電気と地面の間に風の魔法はなかった。

それだけでも、今まで居た階では防衛策として十分だったからだ。だが、五十階下に住んでいるモンスターにはあまり効果を成さなかった。電気でそれなりのダメージは受けているので、地面の壁を突破して襲って来るモンスター自体を倒すことは簡単だった。しかしその後の他のモンスターからの追撃のせいで寝られず、結果からいうと、三日三晩不眠不休、プラス何も食べずという過酷な状況に陥っていた。

これは死ぬ！ と思ったゼルスが思い付いたのが、今使っている防衛策だ。

流石のモンスター達もこの防衛策には手も足も出ず、ゼルスはなんとか眠ることができた。

起きてからすぐに元いた階に戻ろうとしたが、体力的な面で難しかったので、ゼルスは長い時間をかけて戻ることにし、結局半年もかかってしまった。

「さあて、外の世界目指して出発するか！」

鮮烈な過去を思い出して苦い顔になっていたゼルスは、気を取り直して上層目指して進み出す。そう、ゼルスは遂に上層への道を見付けたのだ。それはつい二ヶ月前、ゼルスがいつも通り寝る時の防衛策を施し、仰向けになって寝ようとした時のことだ。

ゼルスは十三年間ずっと暗闇の中にいたせいで暗視が発達しており、今ならどんな暗闇でも昼のような明るさで見ることができる。その暗視のおかげで、上層への道を発見できたのだ。

仰向けになったゼルスが見たのは、半径一メートルほどの円形の穴だった。奥は黒く、何処までも続いているように見える。そこからのゼルスの行動は早かった。すぐさま自らを風の魔法で浮かし、勢い良く円形の穴に飛び込んだ。

穴に飛び込んで二分ほど経つと、遂に出口が見えてきた。ゼルスは出口を飛び出すと、周りの風景をみた。下と変わらず、岩肌しかない殺風景なものだ。しかしゼルスは歓喜した。今まで行きたくとも行けなかった上層に行けたから。やっと外の世界に出られる！ゼルスの心の中は歓喜の感情で一杯だった。

それから今まで、ゼルスはどんどん上層に進んでいる。階にして四百階。

途方もない階数だが、ゼルスはどんどん弱くなる敵と、狭くなるフロアの広さに、もうすぐ外の世界に行けるといふ確信を持っていた。

四話 出会い

「炎月波！」

薄暗い空間の中、女性が5メートルほど先にいる灰色の毛の人狼に向けて、剣に纏わせていた炎を斬撃に乗せ、勢いよく三日月状に放つ。

その炎の斬撃は空を裂き、狙いどおり人狼に直撃した。ジュー、という肉の焼ける音と共に、人狼の左肩から右腰にかけて、深い傷を負わせた。

女性は人狼が怯んだ隙を見逃さず、人狼の喉を素早く剣で切り裂く。

辺りに人狼の血飛沫がかかり、一気に場が血生臭くなった

「このフロアでちょうど百階……、くそっ！騙されたか」

女性は顔にかかった血を拭おうともせず、歯を噛み締める。疲労でふらつき、壁に手をつく、拳を血が出るほど握りしめ、ダンジョンの壁に叩きつける。

黒と金を基調にした鎧を身に纏い、金髪で澄んだ蒼の瞳を持った、どこか気品溢れるこの女性の名は、レイヴェル・オネスト。

この世界に4つある大国のうちの1つである、グアロス王国の王国騎士団に所属している。

何故王国騎士団の彼女が、ダンジョンの、しかも地下百階という深さまで来ているか解らないが、何か理由があつてのことだろう。

レイヴェルが何かに憤慨している最中に、モンスターの雄叫びがフロア全体に響き渡った。

その雄叫びをきっかけとして、今はこんなことをしている場合じゃない、と此処に来る原因となつた重要なことを改めて思い出したレイヴェルは、急いで地上へ戻ろうと階段がある方向へと駆ける。しかし、その時レイヴェルの耳に男の声が聞こえてきた。

（しまった……！）

舌打ちをしながら、人がいると思われる雄叫びをあげたモンスター――の所まで全速力で移動を開始する。

レイヴェルは初めからモンスターが居る事に気づいていたが、まさか人が襲われているとは思ひもしなかった。

王国騎士団として、ということもあるが、何より彼女個人として、襲われている人を見殺しにする事は出来なかった。

例えそれが、彼女が忌み嫌う男であつても。

悪い事にレイヴェルの予想通りならば、あの雄叫びの主はモンスターランクAのヴァーゲン。

襲われている者が地下百階まで到達出来ていることから、それに強いということはわかるが、流石にヴァーゲン相手には勝てないだろう。

Aランクのモンスターがなぜ百階にいるかは不明だが、今はそのような事を考えている場合ではない。

更に悪いことに、襲われている男は1人。

レイヴェルが聞いた声と気配、そして、先ほどから連繋をとる声が聞こえてこないことを総じて考えると、間違いない。

Aランクのモンスターとなると、通常一人では倒せない。

一人で倒すとなると、最低でも王国騎士団の副隊長レベルの力量を要するのだ。

百人規模の盗賊団を一人で潰した実績があるレイヴェルでさえ、一人で倒せるのは、Bランクモンスター一体で限界だ。

遂にレイヴェルはヴァーグンの居場所に着いた。

ヴァーグンは簡単にいうと、小型のドラゴンのようなものだ。

今、レイヴェルの前にいるヴァーグンは、がっしりとした堅そうな青の皮膚をしており、背から生えている太い翼をゆらゆらと揺らしている。

赤い眼が、相対する男を睨み付けていた。

ヴァーグンがいる所はちょっとした広場みたいになっており、レイヴェルから見て、右がヴァーグン、左が男、といった風に両者は相対していた。

どうやら襲われているのは青年のようだ。

外見から察するに、十代後半から二十代前半位だろう。
ダンジョンに入るには軽装すぎる真つ黒なローブを着、茶髪にレイヴェルと同じ蒼い瞳をしている。

レイヴェルは急いで助太刀に入るため、その青年　　ゼルスの
元に駆け寄ろうとする。

が、その必要はなくなった。

ゼルスがヴァーグンに右手を向け、「凍れ、切り刻め」と言うと、
ヴァーグンは一瞬にして氷付けになり、また次の瞬間には風のヒュンという音と一緒に、氷と共に切り刻められてしまったからだ。

レイヴェルはその光景を目の当たりにして、声を失ってしまう。

(……なんなんだあれは。Aランクのヴァーグンをいとも簡単に殺すなんて……。しかも魔法言語なしで魔法を起こしたと……？
そんなふざけたことがあっていいのか？　そしてあれ程の魔法を私の炎月波と同程度の魔力量で起こした……。あいつは何者だ？)

レイヴェルは次々と溢れでる疑問に混乱しながらも、ゼルスが自分と同じような顔をして此方を見ているのに気が付く。

お前が混乱することなんて何もないだろう、と、心の中で呟くが、一応事情を聞こうと思い、レイヴェルは慎重にゼルスに話しかける。

「貴方はどうし」「……なのか?」「……はい?」

レイヴェルは、自分の言葉を遮ったゼルスを見る。

最初に何か言ったようだったが、声が小さすぎて聞き取れなかった。

次の言葉を待っても、なかなか話さないゼルスに対し、レイヴェルは相手が警戒しないように優しく微笑みながら尋ねる。

「……あの、今何とおっしゃいましたか?」

レイヴェルの言葉を聞き、何かを決心したゼルスは、先程言った言葉をもう一度、はっきりと言った。

「人間なのか?」

「……はい?」

数秒の沈黙の後、レイヴェルは再度ゼルスに聞き返してしまった。今度は聞き取れなかったのではなく、単純に意味が解らなかったからだ。

（私がモンスターにでも見えるのだろうか……、ちゃんと女性らしい顔をしているつもりなのだな）

レイヴェルが少し傷ついてネガティブになっていると、再度ゼルスが問う。

「人間じゃない、……のか？」

ゼルスは恐れていた。ようやく出会った自分と似た存在が人間ではなかったら、一体自分は何なのだろうか。恐怖や期待など、様々な感情がゼルスの心を埋め尽くしていく。

真剣なゼルスの表情に気づいたのだろう。

レイヴェルは潜めていた眉を元に戻し、真剣な表情でゼルスの問いに答えた。

「見ての通り私は人間だ。グアロス王国の騎士団に所属している。貴方は一体……何者ですか？」

「……人間……本当に、本当に人間なんだな!？」

「……いや、どう見たって人間のはずだが」

レイヴェルの問いに答えなければかりか、レイヴェルの、人間だ。という発言を疑うゼルス。

失礼なやつだな。と内心少しイライラしながらレイヴェルは思うが、反面、ここまで疑われると、私はそこまで人間に見えないのだろうか。と、自分が人間の女性らしい顔つきはしていると自負しているレイヴェルも、少し不安になり自信がなさそうに答えてしまった。

だが、ゼルスが疑うのかもしれないことだ。
ゼルスはダンジョンで目覚めて十三年間、モンスターとしか出遭ったことがない。

そんなゼルスが、このダンジョンの出口に続くかもしれない道を見つけて、たった二ヶ月程度で、十三年前からずっと持っていた『人に会う』という夢を叶えることが出来るかもしれない。

他にも『外に出る』夢があつたのだが、ゼルスは外に出てから人に会うものだと思つていたので（お金になる珠の存在を知らないゼルスは、こんなにモンスターがうじゃうじゃいる危険な場所に人が来るとは思っていなかった）、人であるレイヴェルとの突然の出会いに戸惑いまくっていたのだ。

「……じゃあ、俺は！？俺は人間か！？」

ゼルスは声を震わせながら、祈るようにレイヴェルに言う。

「私が人間なら、貴方も人間のはずだ」

ゼルスの勢いに圧され、戸惑いぎみのレイヴェル。レイヴェルの答えを聞いたゼルスは、立ったまま顔をうつ向かせ、身体をプルプルと震わせる。

（やった、やった！俺は人間なんだ！……もう、自分の存在を疑わなくていい。俺は　）

「人間なんだあー！ー！」

「ええっ！？」

我慢できずに拳を振り上げ身体中で喜びを表現するゼルスと、いきなり叫びだしたゼルスに驚くレイヴェル。

ゼルスは驚いているレイヴェルに駆け寄ると、満面の笑みでレイヴェルの手を握りしめた。

「ありがとう。あんたのお陰で……本当にありがとう！」

またもや戸惑うレイヴェルだが、ゼルスが涙を流しているのが付く。

男の涙など初めて見るレイヴェルは、焦ってどうすればいいか分からなくなり、気にするな。としか言えなかった。

感極まったゼルスは勢いで、レイヴェルに抱き着く。

レイヴェルはこの行動に顔を真つ赤にしてゼルス突き放そうとするが、ゼルスの泣き顔を見ると、突き放すのも憚られ、別にいいや。と思い、レイヴェルは赤子をあやすようにゼルスを抱き返した。

この光景をレイヴェルを知っている人が見たら、眼を疑うだろう。いや、疑うだけなら良いが、もしかしたら自分の眼を取り替えてしまうかもしれない。

そう思わせるまでに、レイヴェルは男に対する警戒心が強いのだ。

男に自分の身体に触れさせることは絶対にない。

王国騎士団と王国魔法団だけで行うダンスパーティーでも、絶対に同性としか踊らなかった（踊りは強制的）。勿論レイヴェルは何十人という男からダンスに誘われたが、その全てを断り続けた。

その断った中には、滅多にダンスに誘わない隊長の姿もあったほどだ。

その結果、鉄壁の戦乙女などという嬉しくもない異名をつけられてしまった。レイヴェルはその類い稀なる美貌のせいで、他にも

幾つかの異名を持っているがここでは割愛しておく。

鉄壁の戦乙女という異名を持つレイヴェルが、何故ゼルスが身体に触れるのを許したかというところ、ゼルスから全くと言っていいほど下心を感じなかったからだろう。

レイヴェルは幼い頃から人の感情に敏感だった。

他人の厭らしい視線も感じ取れたので、そのせいで精神的に参ったことがある位だ。

ダンスパーティーで誘いを断ったのも、誘った全員から下心を感じ取ったからだ。

「……その、もういいか？ こういうことは初めてで……恥ずかしいのだが」

レイヴェルがまだ赤い顔をしながら上目遣いでゼルスに言う。

場の雰囲気の流れに流されてつい抱き返してしまったが、冷静になつてみると、何て大胆なことをしてしまったのだろう。と羞恥してしまう。

だが不思議と嫌な気持ちはせず、寧ろ心地好いくらいで。そう思ったレイヴェルは更に顔を赤くしてしまった。

ゼルスはそんなレイヴェルを見て胸を高鳴らせるが、如何せんこの感情が何か解らないので戸惑うだけに終わった。

もしこれがゼルスでなく普通の男であれば、あまりの可愛さと普段とのギャップも合わさって、レイヴェルは押し倒されていたかもしれない。

それほどレイヴェルの上目遣いは、凄まじい破壊力を持っていた。

「ああ、ごめん。嬉しかったら人と抱き合うものだと思ってたから」

まだドキドキしているゼルスは、初めての感情に驚きながらもレイヴェルから離れる。

その時レイヴェルが少し哀しそうな顔をしていたのを、ゼルスはおろか、レイヴェル自身さえ気がつかなかった。

2人が離れた後、気まずい沈黙が辺りを包んだ。
気のせいかな、ゼルスに切り刻まれたヴァーグンの死骸がひどく悲しくみえる。

「あ、改めて、自己紹介しようか。私は」

「危ない！」

レイヴェルは気まずい沈黙を破って会話しようとしたが、ゼルスはレイヴェルの話を遮り、レイヴェルを抱き抱えて後方へ跳んだ。

（なっ！？また抱き締められた！？……嫌じゃないが心の準備というものが……）

レイヴェルはゼルスが後方に跳ぶまでの間にそんな事を考えていたが、直後に聞こえた地面を粉碎するような音に、それが勘違いだと理解させられた。

「こんな時にモンスターか」

ゼルスが舌打ちをしてポツリと呟く。
レイヴェルが、音がした場所　つまり自分が先程までいた場所を見ると、腕を地面にめり込ましているモンスターがいた。

（あれはAランクモンスターのザートルハ！なんでまたAランクがこの階に！？この階にはBかCしかないはずだ！）

ザートルハとは、体長二メートルはあり地面に着くほど長い腕が特徴の、顔が猿のようなモンスターだ。

その長い腕から繰り出される破壊力は、岩をも砕くほど凄まじい。動きも機敏な上、結構な魔力を持っていることから、一対一で勝利するなら王国騎士団の副隊長レベルの力量を要する。

ザートルハは地面から腕を抜き、ゼルスとレイヴェルを睨み付け
甲高い雄叫びをあげる。

その雄叫びは、王国騎士団員であるレイヴェルが立ち竦んでしま
う程の威圧感を含んでいた。

しかしゼルスはそんなのお構い無しに、ヴァーグンを倒した時と
同じように手をザートルハに向け、一言呟いた。

「焼き尽くせ」

するとゼルスの掌から、膨大だが収束された炎が放出され、あっ
という間にザートルハを呑み込む。

ザートルハは避けることも出来ずに、その命に幕を閉じた。

（えっ……助かった？　というか、こんな簡単にAランクモンス
ターを倒した？　そんなことが……、駄目だ………何だか急に眠気
が……）

度重なる疲労のせいだろう。

緊張の糸が切れたレイヴェルは、眠ってしまった。

レイヴェルが寝てしまった事に気が付いたゼルスは、レイヴェル
の寝顔を見て頬を緩ませる。

（ようやく人に会えた。まさかこの洞窟の中に人が居ると思わな

かったけど……、それにしても、人の女はこんなにも神々しくて綺麗なものなんだろうか）

ゼルスはレイヴェルの綺麗な髪を優しく撫でると、レイヴェルを、いわゆるお姫様抱っこしながら寝やすい平坦な場所を探す。

ちょうど良い場所を見つけたゼルスは、

「風、雷、土」

と言い、その言葉の通りに、触れたらその部分を切り刻む風、感電するとほとんどのモンスターをも殺してしまう電気、ザートルハの攻撃さえ通さない土の壁を、天井に届く程の高さにして出現させた。

就寝時の安全策を施したゼルスは、レイヴェルを横にさせる。

（今思えば平坦な場所なんか探さないで、いつも通り妖精に頼んで地面を平らにすれば良かったな。……まあ、過ぎたことだしいつか）

そんな事を考えながら、ゼルスもレイヴェルの隣で横になる。

初めて人と一緒に寝る新鮮さと、レイヴェルの美貌にドキドキしながらも、その感情の名に気付くことなく、ゼルスは明日を楽しみにしながら眠りについた。

五話 それぞれの事情

翌日、ゼルスが目覚めると真つ先にレイヴェルの姿を探した。ゼルスの隣に寝ているレイヴェルを見て、昨日の出来事が夢でなかった事を改めて実感し、頬を緩ませていた。ようやく、人に会う事が出来た。ゼルスは、レイヴェルの手入れされた金色の髪をそつと手にすると、逆さに手櫛を通すと、何の抵抗もなく手が通った。その触り心地に感激したゼルスは感嘆の声を上げると、暫くレイヴェルの髪に夢中になっていた。

その最中、ゼルスは寝る前に創った地面の壁を見た。

（外の風と雷はもういらなかな。ここらの階層にいるのは、強くて昨日遭った小さい青ドラゴンと手長猿みたいなもんだし）

モンスターランクAであるヴァーゲンとザートルハを、このように呼ぶ人間はゼルス以外にいないだろう。

レイヴェルが聞いていたら、まるでヴァーゲンらが弱い部類に入るような言い方をしたゼルスの神経を疑っていたに違いない。

数時間後、レイヴェルの髪を弄るのにも漸く飽きがきたゼルスは、自分の魔力で遊んでいた。

身体中に行き渡っている魔力をある一点に集中させたり、左手に込めた魔力を一瞬にして右手に移動させたりしている。

ゼルスはこれを身体強化魔法と呼んでいる。

妖精の力を借りる妖精魔法（ゼルス命名）とは違い、完全に自分の力で起こす魔法だ。

身体強化魔法とは、その名の通り、自らの身体を強化する。

例えば、十メートルジャンプしたり、素手で岩を砕いたり、百メートル先にあるものを鮮明に見る事だって出来る。

この身体強化魔法は、外の世界、つまり一般では、強化魔法と呼ばれている。

だが、強化魔法を使った皆が皆、先に述べたような事が出来るわけではない。強化魔法にもピンからキリまであるのだ。

強化魔法を起こすには、普段体中を行き渡っている魔力を意識的に体に込めなければならない。

普段、何もしていない場合の魔力は体中を巡っているだけで、身体能力にそこまで影響を与えない。

与えたとしても、全体的な身体能力がほんの少し向上する程度。その魔力を体に浸透させて初めて、強化魔法が発動するのだ。

込めた魔力量によって体の強化レベルは上がるが、一番大切なのは量ではなく、どれほど魔力を体に浸透させるかだ。

十の魔力で体を強化しても、それが五割しか体に浸透していなかったら、五の魔力で十割浸透している強化魔法と同じレベルになる。

ゼルスは込めた魔力をすべて体に浸透させることが出来るが、これは極めて難しい。

この世界で強化魔法を完璧に扱える者は、ゼルスも含めて五人もいないだろう。

誰しも扱える魔法だが、大抵の者が体に込めた魔力を六割も浸透することが出来ない。

王国騎士団であるレイヴェルも、体に浸透できる魔力は込めた魔力の五割程度だ。

其れほど、意外と身体強化魔法は難易度が高い。

ゼルスが強化魔法で遊びはじめてしばらく経つと、レイヴェルがのそのそと起き始めた。

「んう……、ここは……？」

「えーっと……、おはよう。で、いいんだよね？」

ゼルスが起き上がったレイヴェルに緊張しながら人生初の挨拶をすると、レイヴェルは数歩後ろへ跳び、剣を抜き身構えた。

「何者……！って、ああ……そうだったな」

初めは警戒心剥き出しのレイヴェルであったが、昨日の出来事を思い出し、フウと息を吐き剣を腰に戻した。

「すまなかった。少し気が動転していて……」

「別に良いよ。それよりっ、おはよう」

「ああ、おはよう」

レイヴェルはゼルスが挨拶にこだわっているのを不思議に思ったが、挨拶をただけですごく嬉しそうに笑うゼルスを見て、どうでも良いや。と思ってしまう。

しかし、レイヴェルは自分でも心底不思議に思っていた。何故自分が、あんなに忌み嫌っていた男に対して普通に会話ができているのか。

思えば、昨日初めて会った時でさえ、この男に何の嫌悪感も感じなかった。

そして、初対面の異性に、初めて抱きしめられた。レイヴェルも抱き返したのが、自分でも不思議でならなかった。

（不思議な男だ。私が嫌悪を持たないなんて。……そういえば、まだ名前を聞けてなかったな）

レイヴェルは頬をほんのり染めると、ゼルスの、自分と同じ蒼の瞳を見ながら話す。

「今度こそ本当に自己紹介しよう。私の名は、レイヴェル・オネスト。昨日言った通り、グアロス王国の騎士団に所属している。歳は十九。……因みに、ちゃんとした人間の女だ。貴方の名は？」

昨日と違い、ちゃんと自己紹介が出来たレイヴェル。人間の女だと、少し微笑んで言った辺りに、彼女の精一杯の茶目っ気が含まれている。

ゼルスは一瞬彼女の笑顔に見惚れてしまったが、すぐに立て直し、彼女の自己紹介の仕方の真似をして言った。

「……俺の名前はゼルス。何処にも所属はしていない。歳は多分十八。俺は人間の男だ」

人間と言うときに声を強調してしまったゼルスだが、今まで自分がどんな存在かすら分からなかったので、分かった今となってはつい嬉しくて強調してしまうのだろう。

「ゼルスさんか。昨日は助けってくれてありがとう。幾つも聞きたいことがあるのだが、良いですか？」

レイヴェルはゼルスに対して、騎士団員として話すか、一人の人間として話すか決めかねたせいで、少し敬語が混じったどこかちぐはぐした聞き方をしてしまった。

「俺に答えられることだったら何でも！」

対するゼルスは、人と会話すること自体が楽しいようで、彼女が挨拶を返してからずっと笑顔のままだ。レイヴェルは、ゼルスの人間の男だ。と言う台詞をスルーしてしまったのを、なにか突っ込むべきだったのか……。と、少し気にしていたが、ゼルスが気にしていない様だったので、ホッと安心した。

まあゼルスは笑いを狙って言った訳ではないから、当然スルーされても気にしないだろう。

「あつ、でも俺を呼ぶときは『さん』はどけて『ゼルス』って呼んでくれないか？俺もレイヴェルって呼ぶからさ！……駄目かな？」

他人と名前で呼び合う事に憧れがあったゼルスは、早速その憧れを現実にしようとするが、レイヴェルが無反応だったので、まさか失礼だったのか？と思い、悲しそうな顔になってしまう。

彼女は無反応だったのではなく、聞こえてはいたが、男と名で呼び合うなんて……恋人みたいではないか！とゼルスと名で呼び合うことを想像して緊張し、返事ができなかったのだ。

そんな時にゼルスから「……駄目かな？」と悲しくて泣きそうな顔をして言われたものだから、焦ってしまい、つい、母親からしか呼ばれた事のない『レイ』という愛称で呼んでくれと、勢い余って言ってしまった。

彼女の顔はもう爆発寸前だ。

「分かった。レイ」

「あ……ああ、ゼルス」

男から愛称で呼ばれ、男の名を呼び捨てで初めて言ったレイヴェルは、妙に高鳴る心臓に戸惑いを受けた。

同時にゼルスもそのような現象に陥り、胸が苦しくなっていた。

一般人がこのような現象に陥れば、すぐに恋だと気付き何らかのアピールをするものだが、今回の場合は一方が男嫌い、他方が記憶喪失の世間知らずという事もあり、どちらもこの感情に気付く事になかった。

緩やかに桃色の世界になっていく場に、そういう経験の浅いレイヴェルが耐えられる筈がなく、早くこのこそばゆさから脱出しようと、質問を開始する。

「ゼルスは冒険者なのか？ あと、何処の国出身なんだ？」

まだ顔を紅潮させたレイヴェルに対し、ゼルスは眉を八の字にしながら答える。

「冒険者がどんなのかは知らないけど、多分違うと思う。出身国は……分からないけど、俺はこの洞窟で育ったよ」

「この洞窟？ ……このグアロスダンジョンでか！？」

まさかの事実につきり顔の紅潮がとれたレイヴェルは驚愕し、大声をあげてしまう。とても信じられる内容ではない。しかし、ゼルスが嘘についている感じもしない。

「ゼルス……詳しい話を聞いても良いか？」

レイヴェルは全てを知るため、真剣な表情でゼルスに尋ねる。ゼルスはコクリと頷き、十三年前から今までを全て話し始めた。

レイヴェルが聞いた内容は信じがたい話だった。

話によると、ゼルスは今から十三年前にこのダンジョンで記憶喪失の状態が目覚め、今までサバイバル生活を続けていたという。ゼルスが言った『十八』という年齢も、目覚めた時の身長が五歳程度のそれであったことから計算しているので、本当の年齢は分か

らない。

当時ゼルスが持っていたのは、ある程度の常識と、最初から身に付けていた今も着ている黒のローブだけだったらしい。ある程度の常識というのは、会話に困らない位の言語能力と、日常生活に支障をきたさない位の常識だと思うとゼルスは言った。

レイヴェルが驚いたのは、その常識の中に、重要なものがなかったことだ。

お金の存在は知っていたが、どういう形なのかも知らず、銀貨と金貨がどれくらい価値が違うのかも知らない。

そして、今まで住んでいたこのダンジョンのことをおかしな洞窟だと思っており、ダンジョンの存在すら知らなかった。

レイヴェルは、もしかしたらと思いついてみたら、ゼルスは案の定この国の名すら知らなかった。

これはヤバイ、今後の日常生活に思いつきり支障をきたすぞ。と思った面倒見の良いレイヴェルは、世界の様々なことをゼルスに教えた。

全て理解出来たとは思えないが、多少は理解出来ただろう。というのが、レイヴェルの感触だ。

ゼルスが目覚めた時から身に付けていたローブだが、これについてはゼルス自身も全く分からないらしい。

十三年間で分かった事といえば、ゼルスの成長に応じてローブも一緒に大きくなる事と、物理的・魔法的防御が極めて高く、とても

優秀な防具ということだ。

そして、レイヴェルを一番驚かせたのは、やはりゼルスの魔法だった。

ゼルスが知っている魔法というのは、妖精に魔力をあげて起こす妖精魔法と、完全に自分だけの力で起こす身体強化魔法だけだ。

ゼルスが考えるその2つの魔法の理論を聞くと、身体強力魔法は一般でいう強化魔法の事らしく、特に気にすることはなかったが、妖精魔法に関しては、レイヴェルは今まで教わってきた魔法理論が崩れさるものだった。

レイヴェルが教わってきた魔法理論は、極端にいうと、魔法は全て自らの力のみで行う。ということなのだが、ゼルスが主張する魔法理論は妖精魔法に限るが、妖精の力で行い、人は現象をイメージし、魔力を提供するだけ。というものだ。

聞くとところによると、妖精魔法は、レイヴェルの教わった魔法でいう自然魔法と回復魔法を一括したものらしい。

自然魔法は、火、水、風などの自然の力を行使したり、創りだしたりする魔法であり、攻撃・防御共に実践でよくつかわれる魔法だ。回復魔法は、その名の通りで、誰かの傷をいやす魔法である。

（にわかに信じがたい話だが、……本当ならあの魔法の強力さにも納得がいく。私たちと違う魔法理論を思っ魔法を放ったんだ。威力は違うに決まっている。それにしても、十三年間もダンジョンに……か。ゼルスの話だと最初に居た所は五百階。五歳の子どもが、

魔法の才に恵まれていたとしても、生き残れるのか？一流の冒険者や、団長でさえ無理じゃないだろうか……本当に、人間なのか？)

レイヴェルが顎に手をあて考え込み、ゼルスを男としてではなく、個として警戒し始めていると、その張本人が話しかけてきた。

「あのさ、俺からも質問なんだけど……、何でレイはここにいるんだ？^{たま}珠っていうお金になるものを取りに来たわけでもなさそうだし……」

その質問に対し、レイヴェルは答えがつかまる。

言ってしまった方がいいのだろうか。これは一応国の機密事項にあたる。場合によれば、政治的問題にさえ発展してしまう。

ましてや言う相手は人間かすらない危険な存在。どうするかと悩んだレイヴェルであったが、ふと、ゼルスの顔を見るとそんな考えは吹き飛んでしまった。

(馬鹿だな……私は。あんな不安そうに表情をコロコロ変えるゼルスが、人間じゃないはずがないじゃないか。それにゼルスは私の恩人だ。恩人を疑うなんて、……最低だな)

レイヴェルは自分の滑稽さに呆れたため息をつくが、ゼルスがそんなことを知る筈がなく、いきなりため息をつきだしたレイヴェルを見て目線を泳がしてオロオロしだす。

その様子に気付いたレイヴェルは直ぐ様口を開く。

「いや、気にしないでくれ。私の滑稽さに呆れただけだ。……何故私がここにいるかだったな。少し話が長くなるが、それでも良いなら」

レイヴェルが怒ったのではないかと不安になっていたゼルスだったので、レイヴェルのこの発言には心底ホッとしたようだ。

「ああ。いいよ」

当然ゼルスが断るはずがなく二つ返事で了承すると、レイヴェルはここに来た経緯を話し出した。

「私がここに来た理由は、王女が誘拐されたからなの」

ゼルスは口調が柔らかくなったレイヴェルに少し驚きながら言う。

「王女って……、レイがいるグアロス王国の？」

レイヴェルは頷き、

「ええ。詳しく言うとグアロス王国の第三王女ね。私は騎士団本隊の一番隊第十八班という所に所属しているんだけど、王女が誘拐された日には城下町でお祭りがあってたから、その警備に私たち十八班があたっていたの」

五日前

グアロス城の城下町であるヴィゴリーレでは、半年に一度ある祭りに大勢の人が参加していた。その警備にあたっていた数あるうちの一つの班が、レイヴェルが所属していた十八班であった。

問題があったとしたら酔っ払いが少し暴れた程度で、特に何も起きずに祭りは終了したと思われた。

しかし祭りの翌日、ある事件が発覚した。

それこそが王女誘拐事件だ。

どうやら王女はこっそりと一人で祭りに行ったようで、そこで誘拐され、翌朝、身代金を要求する手紙が城に届いたそうだ。

詳しい話は末端であるレイヴェルには聞かされなかったが、誘拐した犯人は最近出沒し始めた盗賊団のようで、計画性は全くなく、王女とは知らずに偶然誘拐したらしい。盗賊団自体は全然強くない、あっさりと全員確保したが、王女の姿だけ見当たらない。

王女は盜賊団の頭が何処かに隠したそうだが、生憎その頭は確保する際に負った傷でポツクリ逝ってしまった。

仕方なく、六人の幹部から頭が隠しそうな場所を聞いてみたら、全員が違う場所を言い出した。どうやら頭は幹部が場所を漏らす事を恐れ、幹部全員に別々の場所を伝えていたらしい。

その中のどれもが信憑性に欠けるものだったが、万が一そこに王女がいてはいけないので、一応調べる事にした。

その中の一つが、このグアロスダンジョンの地下百階だ。

そして、グアロスダンジョンの探索を命じられたのが、レイヴェルが所属している十八班である。何故十八班に行かせたのかというと、王女が誘拐されたのは祭りの最中であり、その誘拐された場所が十八班の警備範囲であったため、祭りの警備不足の責任を取るためだ。

実際誘拐された場所は分かっていなかったが、誰かが責任を取るためダンジョンへ行かなければならなく、班長同士が責任の擦り付けをしているのに業を煮やした十八班の班長が、私の班の警備範囲内で誘拐された。と発言し、その結果、十八班が責任をとるためダンジョンに行くことになった。

本来、王女がいる可能性がある所を探索するならもつと人員を厚くするのだが、王女がダンジョンにいる可能性は限りなくゼロに近いので、そんな所に人員を裂くわけにもいかず、だからといって誰も行かせない訳にはいかない……。といった少し複雑な事情で、十

八班は無駄足だと解っていても行かなければならなかった。

何故レイヴェル一人でダンジョンに来てるかというところ、十八班はダンジョン前に集合予定だったのだが、いくら待ってもレイヴェル以外の五人は来ず、レイヴェルは待ちきれずに先にダンジョンに入ってしまったのだ。

原因として、彼女の正義感の強さもあるが、班長が班員のモチベーションを下げないため、ここに王女がいる可能性が強いと言っていた事も原因の一つだろう。

レイヴェルは知らないが、皮肉なことに王女はレイヴェルがダンジョンに入る前に見付かり、保護されていた。

他の班員が来なかったのも、王女の保護に動員されていたからだ。早く集合場所に来てしまったレイヴェルは、運が悪かったとしかいいようがない。

ダンジョンに入ったレイヴェルは、四日間ほとんど休まずに進み続け、地下百階に辿り着いた。

その時、王女の姿がなかったので、盗賊団の幹部に騙されたと言いがゆい思いをしたが、逆に王女がいなくて良かったと思った。

こんな危険な場所にいたら、無事な訳がない。

その後ゼルスを見つけ、疲労で寝てしまうことになるのだが、レイヴェルの実力だと、地下百階まで行くのに最低でも一週間はかか

る道程を、無理して四日間に縮めたのだから、疲労で寝てしまうのも当然だ。

此処に来た経緯を話し終えたレイヴェルは一息ついて、

「今思えば、王女がここにいる可能性は、ほぼなかったんじゃないかって気がするわ。常識的に考えて、明らかに時間が足りないもの」

そう言って笑うレイヴェルに、ゼルスは真実を知らない彼女にとって残酷な質問を投げ掛ける。

「良く分かんないけど、大変だったんだな。でも、何でレイの仲間は来なかったんだろうな」

その言葉に、彼女は一瞬酷く顔を歪ませた。

「……多分、王女がここにいないって思ったから、来なかったんだと思う」

「え？でも、それって凄く無責任じゃないか。ちゃんと予定場所に來てたレイを裏切ったってことだろ？」

ゼルスの純粹な疑問が、レイヴェルの心を傷付けていく。

彼女も薄々思っていたことだが、実際に言葉に出されると想像以上に辛い。

自然と顔が俯いてしまう。

現実には、王女が見つかり、その対処に彼女の班は駆りだされているのだが、その事を知らない彼女は、深く悲しんでいた。

「……うん。そういうことになるね」

酷く悲しくなったレイヴェルにようやく気づいたゼルスは、焦りながら彼女に話しかける。

「ごめんレイっ。仲間の事悪くいって。……でも、案外仲間が来なかったのも、王女がもう見つかったからかもしれないねーもんな！」

「……うん。そーだと良いね」

ゼルスが言ったことは、偶然にも事実だったが、そんなことを、この2人が分かるはずもない。

なかなか悲しみから抜け出せないレイヴェルに対し、原因を作ってしまったゼルスはどうにかしようと考えているが、良い案が思い付かない。

「ああー！レイツ！」

「はいっ！」

いきなり髪を両手でガシガシとかきながら叫ぶゼルスに、レイヴエルは肩をビクツとしながら返事をする。

「俺はレイの仲間みたいに裏切らないっ！……い、いや、レイの仲間は裏切ってないだろうけど……そ、その……、裏切ったかも。と、レイに思わせることすらさせない！……だから笑ってくれ！悲しい顔は……嫌だ」

しどろもどろになりながらも、感情をストレートに伝えるゼルスに、レイヴエルは初めこそキョトンとしていたが、ゼルスのあまりの必死さになぜか笑いが込み上げてきて、つい吹き出してしまった。

「なっ、何で笑うんだよ！」

何故笑われたか分からず、戸惑うゼルスは、つい怒っている風に聞いてしまう。

だがレイヴエルは、本当は怒っていないと分かっているので、まだ笑っている調子で答えてしまう。

「フフツ、ごめんなさい。貴方が変な人だなーって思って」

「変な人……、そう言うなら、レイが一番変！ いつの間にか口調変わってるし」

ホッとしたゼルスは、意地悪そうに笑いながらレイヴェルを見詰める。

「え？……あ、ウソ」

レイヴェルは口に手をあてて、ほんのりと頬を紅潮させる。
ゼルスは、どうやら本当に口調が変わったのに気づいてなかった様子のレイヴェルに驚いた。

「え？え？……いつからこの口調になったの？」

「んー、確か、王女が誘拐された話をし始めたくらいかな。でも、今の口調の方が好きだ。前の口調は何か無理してた感じがしてたし」

少し混乱しているレイヴェルにゼルスが満面の笑みでいうと、レイヴェルは、

「やっぱり、ゼルスは不思議な人だね。私、実は男性が苦手で、ゼ

ルス以外の男の人とはほとんど話したこともなかったんだ。さつきしてた堅苦しい口調は、女だからって嘗められないようにしてたの」

と言い、一息ついてまた話し始めた。

「ありがとう、ゼルス。何だか肩の荷が降りたみたい」

「いや、俺は何もしてないんだけど……。寧ろ俺の方がお礼を言うべきだよ。初めて会った人間がこんなに綺麗なレイだったんだから……。俺に会ってくれてありがとう、レイ」

初めて人から面と向かってお礼を言われたゼルスは、照れ臭くなつて手を首に廻し、ゼルスからお礼を言う。

「さて、そろそろ出発しようか。俺もレイもダンジョンから出」

ゼルスが安全策を解除して、出発しようとする、なんとレイヴェルが急にゼルスに抱き付いてきた。

「え？」

あまりの唐突さに、固まってしまうゼルス。

「抱き合つの……恥ずかしいんじゃないっけ？」

ゼルスはまた高鳴りだした胸に疑問を浮かべながらも、以前言われた事を聞いてみる。

「うん。恥ずかしいよ。……でも、体が勝手に動いちゃった」

ゼルスが、顔を真っ赤にしながら抱き付き、上目使いでこちら見てくるレイヴェルを見るとゼルスの体が勝手に反応し、いつの間にかゼルスもレイヴェルを抱き締めていた。

レイヴェルは、高まる感情を押さえきれなかったのだろう。人間、悲しい時に傍にいて、元氣付けてくれる人には弱いもの。その人が下心のない純粋な気持ちで元氣付けてくれたなら、尚更だ。

生憎レイヴェルは鎧を着ているので、2人とも互いの心音を感じ取れなかったが、もしレイヴェルが普通の服だったら、互いの心音を感じ、2人は更に顔を真っ赤にしていただろう。

「……やっぱり、こうしてると、安心する」

と、普通の男に言ったら襲われるであろうセリフを、レイヴェルは言う。

これを聞いて、ゼルスは更に胸が苦しくなるが、どうしてこんな現象に陥るか分からず、遂にレイヴェルに聞いてしまった。

「なあ、レイ。何でか分かんないけど、今レイを見たり、レイの言葉を聞いたりすると、胸が凄く苦しくなるんだ。……でも、不思議と嫌な感じはしないで……寧ろ、ずっと続いて欲しいと思う。これって、何なんだ？」

その言葉を聞いてレイヴェルは、体を少しだけ引き、自分の顔を隣にあったゼルスの顔と向き合わせる。

「……大丈夫。私も今、そんな感じだから」

レイヴェルはそう言うのと、自分でも、何でこんな大胆なんだろう。と思いつつ、眼を閉じて、真つ赤な顔をゼルスにゆっくり近付ける。それに応えるように、自然とゼルスも眼を閉じ、近づく。

二人の距離がゼロになろうとした。その時、

「やあーっ」と見付けたあ！レイヴェルちゃんはっけっくん！！っ

て……………私、タイミング……………悪すぎた？」

「……………なぜか分かんが、そうみたいだな」

レイヴェルと同じ鎧を着た、2人の男女が現れた。

六話 班長と副班長

一気に場が凍った。

最早ピンク色の名残さえ感じない。

レイヴェルは、いきなり登場した2人を呆然と見るばかりで、何の行動も起こさない。

ゼルスは、何かとんでもない損をしたように感じながらも、新たに登場した人間たちに嬉しさを感じ、不満なのか喜んでいるのか分からない複雑な表情になっていた。

最高潮に達していたといっても過言ではない場に突如登場した男女のうち、見た目十五歳位の小さな少女は、レイヴェルとゼルスに話しかける。

「よし！私達は何も見なかったよ！というか、ここにすら居なかった！……これでオーケー。さあ一時間……いや、二時間待ってもう一度来るよカルマ」

「いやもう無理だろ」

とんでもない事を言い出した少女に、カルマと呼ばれた男は冷静に突っ込む。少女は一応、「……これでOK」からのくだりは、男に向けてコソコソと話すように言っていたが、わざとか知らないがレイヴェルとゼルスには丸聞こえする位の音量だった。

ここで、現実に戻ってきたレイヴェルが叫んだ。

「な……なぜ班長と副班長がいるのですか!？」

それを聞いた少女は、プクーツと頬を膨らませると、怒ったように口を開いた。

「なぜって、レイヴェルを助けに来たからに決まってるじゃん。ホントに心配だったのに、レイヴェルラブってるし。どうやら私達はお邪魔だったみたいだね。しかし、あんな乙女なレイヴェル初めて見た! ねえ、カルマ?」

止まることなく口を開く少女。

この少女が、レイヴェルが所属する18班の班長　　アルリノ・ラディオーゾである。

髪は緑色のラウンドボブで、常にふわふわしており、緑色の瞳とあわさってどこか幻想的な雰囲気醸し出している。

初めて会う人は、その幻想的な雰囲気と実際のアルリノの正確のギャップに驚く確率が高い。

「……まあ、確かに初めて見たな。つか、あんな顔も出来んだな。オネスト」

そして、アルリノに話しかけられた男が18班の副班長である、カルマ・インソネイルである。

長身で、無造作に伸ばした青の短髪に漆黒の瞳をしている。

全く違う外見と性格から、18班は凸凹コンビの班として覚えられている。

「……私を助けに来てくれて、どうもありがとうございます。それより、王女は一体どうしたのですか？」

レイヴェルはカルマをスルーしたが、耳がほのかに紅潮しており、完璧にスルー出来ていなかった。

カルマはそんなレイヴェルを珍しそうに見ている。

「王女は無事保護されたわ。丁度私達が集合場所に行く直前にね。すぐレイヴェルに知らせたかったんだけど、色々と事後処理に駆り出されて今まで時間がかかったの。……ごめんなさいね、レイヴェル」

（その事後処理も実はまだまだ終わってなくて、部下にオネストを理由に押し付けてきた逃げて来た。つつーのが本当だな。まあこいつがオネストを探しに行きたかったのは嘘じゃないワケで、こいつにとっては一石二鳥だったんだろうな）

心の中で補足を述べたカルマは、決して声には出さない。

理由をつけるとしたら、面倒臭い。これだけだ。

カルマは極度の面倒臭がり屋で、時々ではあるが、会話自体も面倒臭くなって放棄する時がある。

「そうだったのですか……。班長。私の独断のせいでご迷惑をお掛けし、大変申し訳ありません」

深々と頭を下げるレイヴェル。

裏切られてなかったと、内心凄く安堵したレイヴェルだが決してそのような態度はとらない。

ゼルスと接する時と態度が大違いだが、これが彼女の普通で、あ

くまでもゼルスと接する時が、良い意味で異常なのだ。

「き……気にしなくて……………、アハハッ！もうだめっ！」

レイヴェルが大真面目に謝罪していると、アルリノが肩を震わせ「もう我慢出来ない！」と言って笑いまくる。「ど、どうされましたか？」と、戸惑うレイヴェルを脇目に、アルリノは更に笑い、

「だ……だつて、さっきからずつと……イケメン君と抱き合っている状態で……大真面目に謝罪されて、シリアスに対処できるわけないじゃない！」

笑いすぎてヒーヒー言いながら、レイヴェルとゼルスの2人を指差す。

実は今までずっと抱き合った状態で会話していたレイヴェル。ゼルスは抱き合っている状態が心地よかったので離れなかっただけだが、レイヴェルは班長と副班長が現れたことに驚き、抱き合っている事すら忘れてしまっていた。

レイヴェルは顔を真っ赤し、反射的にゼルスを突き離してしまう。

「こ……これは何でもありません！」

レイヴェルの言い分を聞いても、アルリノはニヤニヤとし、カルマはまた珍しそうに見るだけだ。

普通の人間なら、この言動は照れ隠しだとすぐに分かる。そう。普通の人間なら。

「……レイ。俺と抱き合うの、そんなに嫌だったんだな。嫌なら嫌と言ってくれれば……俺も抱きつかないよ」

どよんとした雰囲気を選びに撒き散らしながら、悲しみに染まった眼をレイヴェルに向けるゼルス。

生憎ゼルスは普通の人間ではなかったので、照れ隠しという事が全く分からなかった。

そればかりか、いきなりレイヴェルに突き飛ばされてかなりショックを受けている。

それに対しレイヴェルは「うっ」と喉をつまらせ、

「ち、違うの！べ、別にゼルスに抱かれるのは嫌じゃないの！というか、寧ろ抱き締めて欲しいっ。た、ただ、人前ではちよつと恥ずかしいから、……抱き合うなら2人きりの時がいいな」

ようやく出会えた、何故か分からないが信頼出来る人間

ゼルスが自分から離れてしまうのではないかという恐怖心で、レイヴェルはアルリノとカルマがいることも忘れ、聞いている方が恥ずかしくなるセリフを口走ってしまう。

「そっか。わかった」

ゼルスは嬉しそうに頷き、

「ところでさ、その二人も人間だよな。もしかしてさっき言ってた仲間？」

思い付いたようにレイヴェルに尋ねた。

「うん。この方たちはね」

「ちょっと！レ、レイヴェル！！……貴女いま何て言ったの？」

ゼルスの確認に答えようとしたレイヴェルを、焦ったようにアルリノが遮る。

「何って……………忘れてください」

始めは何の事を言われているかサッパリ分からなかったレイヴェルだが、自分の口調が普段絶対口に出さないもの、プラス、先程の小っ恥ずかしい台詞を、他人の前で言ってしまった事に気付き、物凄く恥ずかしくなってしまう。

アルリノは普段なら絶対見れないレイヴェルを見て、驚嘆する。

「はあ、ここに来てからお姉さん驚くしかしてないよ。……君は私達の事が知リたかつたんだよね。私はアルリノ・ラディオーゾ。騎士団本隊一番隊の十八班で班長をやっているわ。ちなみに歳は二十五だから」

やけに年齢を強調して言うアルリノ。
そのアルリノに続くように、カルマもゼルスの方に向いて話し出す。

「俺は同じく十八班で副班長をしている、カルマ・インソネイルだ。
んで、お前は一体誰だ？」

「俺か？俺はゼルスだ」

鋭い眼光で睨み付けてくるカルマに対し、ゼルスは警戒心ゼロで返事をする。

「ゼルスか。結局お前はなに」

「私から説明します！」

レイヴェルは放っておいたら尋問を始めそうなカルマの話を遮り、自分がゼルスの事を話そうとする。

ゼルスの事だ。きつと馬鹿正直に話すに違いない。

もしそんな事になったら、きつと騎士団に所属している彼たちは王に報告するに決まっている。

そして、人間離れた力を持つゼルスは戦争の道具に使われるかはたまた人体実験されるか、どう転んでもゼルスにとってマイナスにはなっても、プラスにはならない。

そうレイヴェルは考えた。

「ゼルスは記憶喪失なのです。どうやら頭に強い衝撃を受けたらしく、自分の事を何も覚えていないようです。強さは私と同じ位でBランク程度でした」

考えた結果が、ゼルスを記憶喪失だと言うこと。

一応ゼルスは記憶喪失なので、其処だけは嘘をついていない。

実際、ダンジョンで記憶喪失になる事は珍しいには違いないが、前例がないワケではない。

はつきりとした原因は不明だが、ダンジョンでは1年に10人は記憶喪失の者が出ている。

（記憶喪失も胡散臭いが、本当の事を言うよりマシだ！）

レイヴェルは信じてもらえるか分からないが、信じてもらえる事を祈りつつ、俺違っただけど……。と恐らく言おうとしてるゼルス
を眼で黙らせるしかなかった。

「……記憶喪失か。まあないワケではないが、珍しいな。Bランク
ということは……もついいや。面倒くせえ」

カルマは頭をボリボリかきながら、アルリノを見る。

「もう外行こう。四人なら二日あれば戻れるだろ」

「そうね。早く戻らないと隊長が心配するし、さっさと戻っちゃいましょ」

レイヴェルは追求されなかった事に安堵しながら、これ幸いと便乗する。

「ええ、早く脱出しましょうか」

レイヴェルがそう言うと同時に、アルリノのお腹から可愛い音がし、皆の注目を浴びる。

皆の視線に耐えきれなくなったアルリノは、ぶつくさと言いつつ、ましく呟く。

「だってしょうがないじゃん。……ここにきてからあのマズくて固い干し肉位しか食べてないんだよ。育ち盛りの私には足りないよ」

どこが育ち盛りだよ25歳。と、カルマは心で突っ込むが口には出さない。

突っかかってくると予想されるアルリノの対処が面倒臭いからだ。その証拠に、思っているだけなのに、何故かアルリノはカルマを、何か言いたいことあんの？と言わんばかりに睨みつけている。

「腹へってんの？じゃあこれでも焼いて食べよっか」

ゼルスは空間に闇を出現させ、なんとその中から体長三メートル程のキラーベアを取り出した。

この闇は、簡単にいうと容量無制限で、何処にいても取り出せる倉庫みたいなものだ。

昔ゼルスが、もしもの時の非常食入れのため、ゼルスが倒したモンスターを食べようとして寄ってきて、結局ゼルスがまた戦うことになるループを防ぐために、倒したモンスターの保管場所として、妖精に頼み造り出したものだ。

この闇の中に入れたものは、例え何十年後に取り出そうと、その入れた時の状態のまま出てくる仕組みになっており、使い勝手がよく、ゼルスは就寝時の防衛策と同じく重宝している。

しかし、そんな都合の良すぎる魔法は、一般の魔法常識には無く、アルリノとカルマはレイヴェルを連れて、ゼルスから一気に距離をとり、警戒体制に入る。

他の属性ならまだしも、闇という属性で、常識外れの魔法を披露したのがいけなかった。

闇が忌み嫌われている。という訳ではなく、闇は魔法に関して先天的な才があり、かつ、魔力量も常人の数倍なくては扱えない所謂よほどの天才でなければ扱えないのだ。

その闇を、得体の知れない男が扱い、しかも、その中から軽々しく”これ”と言いながら、モンスターランクAのクリアベアを取り出している。

アルリノとカルマが警戒心剥き出しにしてゼルスを睨むのも当たり前だろう。

「レイヴェル！彼は何者！？」

「か、彼は……」

「アルリノ、止めとけ。どうせオネストは何も喋らねえ。最悪操られてる可能性もあるから、何も出来ねえようオネストを閉じ込めておく」

一気に騒然とする場にゼルスは啞然とする。

アルリノはダガーを構え、カルマは剣を抜きさる。レイヴェルは、自分も操られてると疑われ、混乱してしまう。

「わ、私は何も操られてはいません！」

誤解を解くためカルマに歩み寄ろうとしたレイヴェルだったが、何か透明な壁に阻まれ進めなくなった。周囲を良く見てみると、レイヴェルを囲うように透明な壁が出来ている。

「結界魔法……！……いつの間に」

レイヴェルはバツ、とアルリノとカルマの方に振り向く。

「ごめんね、レイヴェル。貴女の事も信じたいけど、私達は王国騎士団。怪しい人を目の前に、何もしないって訳にはいかないのよ。し・か・も！国に危険を及ぼしそうな、こんな強者相手だったら尚更ね」

「そういう訳だ。しばらくそこでじっとしときな」

最早、操られてる可能性のあると思われてしまったレイヴェルの言葉に何の意味もなくなり、レイヴェルはある危機感を覚えた。ここで、やっと正気に戻ったゼルスが、アルリノとカルマに向かって叫ぶ。

「な、何でいきなり戦闘体制なつてんの！？それに、レイはお前らの仲間だろ。なに閉じ込めてんの？」

ゼルスから見れば、親切心から食料をあげようとしたのに、そのせいで戦闘体制に入られ、レイヴェルは閉じ込められた。

全く意味が分からない。

騒ぎの発端と思われたキラベアは闇に仕舞ったが、それでも騒ぎはおさならない。

「てめえが本当の事言ったら、全部解決なんだよ。……本当に記憶喪失なのか？」

勿論、ゼルスは本当に十四年前からの記憶がない記憶喪失者なので、「ああ」と言うしかなかった。

「……そうか。だったら、無理矢理にでも言わせるだけだ！」

全くゼルスの言い分を聞こうとしないカルマは、両腕を横に広げ、魔力を高める。

「すいぎよく水玉」

カルマの周りに、直径三十センチ程の水の玉が幾つも現れる。恐らく三十個以上はあるだろう。いくつもの水の玉が浮かぶ光景は、幻想的で美しいものだが、その一つ一つに込められている魔力は、えげつないほど強力だった。

「かかれえ！！」

その全てが、ゼルスに全方位から襲いかかり、ゼルスに直撃し、爆音を鳴らす！

「ゼルスー！」

このままじゃ危ない。レイヴェルはこの無意味な戦いを、被害が出る前に止めたかった。

「ええっ？あの子もろにくらっちゃったよ……。大丈夫かなあ」

まさか何の防御もしないとはね。と呟くアルリノ。レイヴェルは、武器を構えながらも事態を他人事のように見ているアルリノに懇願する。

「班長！早くこの無意味な闘いを止めさせてください！死人がです！」

「んー、流石に殺しはしないよ。まっ、捕縛が無理そうだったら殺すけど、今のでもう戦えないでしょ」

「そうじゃなく」

「レイー！俺は大丈夫だ」

意思の疎通が出来なくて歯痒くなっていたレイヴェルに、先程の

彼女の声が聞こえたゼルスは、声を返す。

無事だと予想はついていたレイヴェルはそこまで驚かなかったが、アルリノとカルマは違った。

先程と同じように、無傷で立っているゼルスを見て、眼を疑う。

「なっ……、無傷だと……！？面倒くせえな」

舌打ちするカルマに対し、アルリノは無言のまま、警戒の顯れとして強化魔法をかける。

「何で俺を攻撃するかわかんねーけど、そっちがくるなら、こっちからも行く！」

その言葉を聞いたレイヴェルは、頭を抱える。

（やっぱりそうなる……！Aランクを瞬殺するゼルスに、班長と副班長がかなうわけじゃない！下手すれば死んじゃうよ……）

レイヴェルが抱いていた危機感は、班長と副班長が死んでしまうのではないか？というものだった。

必死にアルリノに頼んでも、向こうはゼルスが死ぬ事を心配していると勘違いするし、最後に出来る事といえば、

「ゼルス！目一杯手加減して！」

と、強化魔法をかけ、今にもカルマに向かって走りだそうとしているゼルスに言うことだけだった。

恐らく伝わったのだろう。

ゼルスはニコリと笑うとその場から消え、一瞬でカルマの目の前に現れ、驚愕するカルマの腹に拳をぶちこむ！

常人なら、いくら強化魔法を使っているとはいえ、生身の拳で、普通の鎧より数倍出来が良い騎士団の鎧を殴って、鎧を着ている者にダメージを与える事は出来ないだろう。

しかし、ゼルスの拳はその常識を破るように、鎧が碎ける音を辺りに響かせる。

更に、ゼルスは鎧を砕くばかりか、カルマの十メートルは後方にある壁まで、カルマを勢い良く吹っ飛ばす！

ドガアーン！という音とともに、砂埃が舞い、壁に埋もれたカルマを隠す。

ゼルスの圧倒的な破壊力に、アルリノは、

「…………へ？」

と、間抜けな声しか出せず、レイヴェルは大きな溜め息をつきながら、「やっちゃった」と右手を額にあてる。

当の本人であるゼルスは、あまりの威力に、

「…………あれ？一応、手加減したんだけど…………」

と、苦笑いを浮かべるしかなかった。

六話 班長と副班長（後書き）

予想以上にダンジョンから出るのが遅くなってる……。

グダグダなりかけてるんで次回はなるべくスピードアップしたいです。

更新予定：次の日曜日

2010・10・3

七話 一蓮托生

「つまり、お前はこのグアロスダンジョンで記憶喪失の状態で目覚め、それから今までAランクモンスターの巣窟で過ごしてきたって訳か？」

「うん。そうだ！」

「……有り得るかぁ!!」

ダンジョン内にカルマの怒声が響き渡る。

今、ゼルス・レイヴェル・アルリノ・カルマの四人は、各々の座り方で地面に腰をおろしていた。

今でこそ、カルマは怒声をあげる程の元気を示せるが、つい一時間前までは瀕死状態に陥っていた。

原因は当然、ゼルスの一撃。

ゼルスは手加減して攻撃したが、それは、ゼルスがAランクモンスターを吹き飛ばすほどの威力を持つ攻撃を手加減したわけで、鎧を着けているとはいえ、人間の耐えきれぬ攻撃ではない。

カルマがとつさに強化魔法をしていなかったら、生死の境に行く事すらなく、お陀仏していただろう。

なぜ今ピンピンしているのかというと、これもまたゼルスのお陰だ。

壁にめり込んだカルマを見て流石にヤバイと感じたゼルスは、すぐさまカルマに妖精魔法、つまり、常識でいう回復魔法をかけた。

その際に、カルマがとどめをさされると勘違いしたアルリノがゼルスに攻撃しようとしたが、ゼルスが殺気をとばしただけでアルリノは動けなくなってしまった。

回復魔法をかけられたカルマは、瀕死状態から一気に無傷になり目覚めた。

目の前に自分を殺しかけた張本人がいたので反射的に距離をとって警戒しまくっていたが、一連の流れを見ていたアルリノから事情を知り、なぜ自分を殺そうとした奴が回復魔法を　しかも瀕死から回復させるほどの　使用したか理解出来なかったので、とりあえず話をしようと考えたカルマは、レイヴェルを結界から解放した。

（嘘をついてまたあんな事になってはいけないし、……真実を話すしかないわね）

そう考えたレイヴェルは、先程から疑われている自分が言うよりゼルス本人が言った方が信憑性があると思い、班長と副班長が国に報告しない事を祈りながら、ゼルスに真実を話すように促し現在に至る。

「有り得ねえって言われても、本当なんだからしょうがねーじゃん」

不満そうにカルマを見据えるゼルス。

話したことは全て事実。その内容が異常である事が信じてもらえない原因なのだが、今までダンジョンに居て外の常識を知らないゼルスにそれを理解しろというのは、些か難しい頼みだ。

「だが、困ったことにそれだと全部説明がつく」

カルマは先ほどと態度を変え、面倒くさそうに口を開くと、ゼルスを見据えた。

「お前が使う強化魔法は俺たちが使う強化魔法と違いはないが

強さのレベルは違うがな、自然魔法は全く違う。妖精に魔力を捧げるなんて話、聞いたことがない。……だが、オネストが言う事

が本当なら、お前が使う自然魔法は俺たちのそれとはレベルどころか、次元が違いすぎる。回復魔法も、また然りだ。アルリノ、どう思う？」

「私もカルマと同意見だよ。彼の話はあまりにも規格外すぎるけど、本当なら全部つながる。強化魔法も自然魔法も回復魔法も、今の規格外のレベルじゃなきゃ十三年間も生き残れなかっただろうからね。レイヴェルが言ったことも本当のことだと思う。レイヴェルの魔力には何の乱れもないし、操られてることはないよ」

アルリノがカルマに返答すると、そうだよなあ。と呟き、カルマは鎧の中から羊皮紙を取り出した。表は真っ白だが、裏には紋章が描かれている。それを見て、レイヴェルが声を荒げる。

「副班長！！何をなさるおつもりですか！」

レイヴェルは今にも斬りかからんばかりの剣幕でカルマに詰め寄った。

カルマが取りだした羊皮紙は騎士団員の誰もが持っている報告書だ。当人だけでは解決できない事案が発生した時に、指示を仰ぐために提出するもの。この報告書の裏に描かれている紋に魔力を込めると、そのそれぞれの紋に応じて報告する者のところに召喚されるといった仕組みになっている。

提出先は、下から副班長・班長・副隊長・隊長・副団長・団長・国王になっているが、カルマが取りだした報告書の紋章の行き先は国王。通常、副班長が報告する相手と言ったら、いつて隊長までだ。王に報告するということは、国になんらかの危険を及ぼす可能性が大であると十分に認められた時だけ。この場合であつたら、カルマがゼルスを、国の最重要危険人物だと考えたという、レイヴェルにとって最悪な結果になった。

「そうだよ、それはやりすぎだよ。……っというか、それするにしても私の仕事だよ！騎士団の規則にも書いてあんじゃん！上の階位の者が一緒にいた場合、その上の階位の者が報告することって」

アルリノがレイヴェルに同意し、カルマに騎士団の規則をもちかけても、カルマは揺るがないどころか、反撃してきた。

「やりすぎじゃねえよ。少なくともこいつにはそれだけの力がある。強化魔法だけでも、おそらく団長クラスとも渡り合えるような奴だ。それに自然魔法が加わつたら、まさに鬼に金棒。下手すりゃ小国ひとつ落としかねえ。騎士団の規則も、問題ねえ。上の階位の者が明らかに間違つた行為をしようとしている時は、下の階位の者は必要ならそれを正す義務がある。それに従うまでだ」

「しかし、ゼルスは危険人物ではありません！報告する必要はないのでは？」

「……例え、こいつに危険な思想がなくても周りはどうか。小国ひとつ落としかねない力だ。利用しようとする奴は五万といるだろ。危険にならないよう、国で保護するのが一番なんだよ。」

カルマの言葉に、アルリノとレイヴェルはグウの音も出なくなつた。

カルマの言う事は、すべて正論で言い返す言葉もない。ないのだが、レイヴェルは国の厄介事にゼルスを巻き込みたくなかった。グアロス国は絶対に、強大な力を持つゼルスを軍事的にも政治的にも活用するだろう。レイヴェルはただ、なぜか信頼できるゼルスを人間の醜さに溢れた政界に行かせたくないだけ。ゼルスには普通の生活を送ってほしかったのだ。

アルリノがカルマに対抗したのは、レイヴェルが明らかにゼルスに好意を持っていたからだ。レイヴェルの過去を知る彼女にとつて、レイヴェルが男を好きになるなんて事は信じられなかった。だから、言っても無駄だと分かっている、ようやく幸せを掴めるかもしれないレイヴェルの事を考えたら、言わずにはいられなかった

「どよーん、と落ち込む女性二人を見て、カルマはやるせない感じのため息をついた。

「……俺だって、本当は報告なんてしたくねーよ。仮にもこいつは命の恩人だ。だがな、万が一のことを考えると、国に報告したほうが絶対いいんだよ」

カルマの言葉でさらに場の雰囲気が暗くなると、今まで蚊帳の外であった話の中心人物がおずおずと三人に話しかけた。

「な、なあ。なんで皆して暗くなってるの？……もしかして、俺が

外に出ないほうが良かった？」

この言葉に、レイヴェルが物凄い速さで反応する。

「そんなことないわ！ゼルスが外に出ようとしたから、私たちは会えたんだから。だから、そんな悲しいことは言わないで」

レイヴェルは切ない思いで言うと、カルマに対して跪いた。

「副班長。無理な事とは分かっていますが、お願いです。このことは……言わないでください」

レイヴェルの言葉通り、無理なお願いだ。

強大な力の持つゼルスを国に報告しないということは、国を守る彼ら王国騎士団にとって、イコール、国に対する反逆となる。

誰が騎士団としての誇りを傷つけてまで、出会ったばかりの人のために国家反逆罪で処刑にされたいだろうか。

「オネストと……ゼルスには本当に悪いと思っている。だが」

「ちよい待ち！カルマ。あんたはそれで本当に良いのかなあ。ゼルス君は命の恩人でしょう？その彼を！命の恩人の彼を！最悪人体実験されるかもしれない場所に放りこんでいいのかなあ。そ・ん・な・恩を仇で返すような真似、していいのかな？」

最初より消極的になったカルマをみて、チャンスだ！と思ったアルリノは、一気にカルマの良心につけ込む。

ゼルスは目の前で繰り広げられる会話に全くついていけなかった。この十三年間会話をしたことがなかったのだから、聞くだけでも頭が痛くなり、すぐに疲れがたまってしまう。

先ほどからゼル一人を除け者にして、ずっとアルリノとレイヴェルがカルマに話し続けていた。

鬼！悪魔！などとアルリノが言い、レイヴェルはそれに便乗し、人道的に……。死んでたんですよ……。などとカルマに言い続けている。

言葉の暴力についに耐えきれなくなったカルマが、もうどうにでもなれ！と言わんばかりに投げやりに言った。

「めんどくせえーーーー！もういい！ゼルスの事は、何つにも言わねえ！国家反逆罪だがなんだろうが、俺はもうそんなことは知らん。もしばれた場合は、俺ら三人とも謹んで処罰を受ける！これでいいな？アルリノ、オネスト！」

2人は始めのうちこそ大声にキョトンとしていたが、カルマが報告しないと聞いたとたん、満面の笑みになり、互いを褒め称えた。

「ありがとうございます。班長。短いながらも的確なご指摘、見事でした」

「ふふん、そうでしょ。でもレイヴェルも凄かったわよ。あんな長
つたらしく人の良心につけ込む台詞、私とてもじゃないけど言えな
いわ」

2人が褒め称える(?)のを止めた後、ゼルスがようやく終わっ
た話にホッとしながら口を開いた。

「話が終わってすぐで悪いけどさ、結局、俺はフツ に外の世界に
行っているの？」

「うん。勿論良いわよ。でも、私たち以外の人がいる前で魔法とか
使うときは、絶対に本気……いえ、すつごく手加減して使ってね。
さっきの攻撃で分かったと思うけど、人間はすごく脆いの。強化魔
法してもゼルスみたいに強くならないし、自然魔法も回復魔法も、
あ、ゼルスという妖精魔法ね。それはゼルスほどの効果はでないの。
制御に苦労すると思うけど、お願いね」

「頼むぜ。お前の強さがばれたらお前も大変だろうけど、俺たちが
関わってたってばれたら俺たち処刑されちまうから。まっ、俺たち
は一蓮托生って事だ。」

レイヴェルがゼルスに答えると、カルマが口をはさんで重大な事
を軽々しく言う。

「え？処刑!？」

当然事情を知らないゼルスは仰天し、レイヴェル・アルリノ・カ
ルマの3人を見渡す。

「まあそういうことになったんだけど、ゼルス君は気にしないでいいわよ。さあ、早く外に戻りましょ。ゼルス君の今後は、戻りがてら詳しく話すってことで」

「そうだな。そろそろ戻らないと、事務処理任せっぱなしにしてるあいつらが可哀相だ。このメンバーなら二日もありゃ外に着くだろう」

レイヴェルはいきなりの急展開に戸惑うゼルスの背中を押し、アリノとカルマは戸惑うゼルスを見て、笑いながら元来た道に戻って行く。

一日後

「これが外かぁー！すっげー眩しいし、いろんな色があるぞ！」

ゼルスは初めて見る、緑の大地、純白の雲、青い空を見て言い表せないほどの感動を感じていた。

記憶にしかなかった鳥が空を羽ばたき、太陽が光を照らす。

これからの未知なる出会いを想像し、ゼルスのわくわくは最高潮に達していた。

「まさか、一日で外に着くとはな……」

茫然と呟くカルマに、うんうんと頷く女性二人。

モンスターはいつも通り出現したのだが、ほぼ全てがゼルスによって瞬殺された。

一瞬にして炎で炭と化し、凍りづけにされたり、風で切り刻まれたり、感電死させられたり、どのモンスターも十秒もかからずに殺される。

改めて、ゼルスが十三年間ダンジョンの地下五百階に住んでいたと信じさせる出来事だった。

後ろにいる三人が、自分に魔法を教えてもらおうかと真剣に考え始めていることを知らずに、ゼルスは感動の余韻に浸っていた。

今日という日が、仕組まれていたとは知らずに。

七話 一蓮托生（後書き）

初めてPCから投稿してみました。

携帯と比べたらこっちのほうがいややすいですね。

次回の更新はいつも通りで、次回の日曜日です。

2010・10・10

八話 ヴィゴリーレへようこそ

ゼルスたち一行はレイヴェルの無事を知らせるため、グアロスダンジョンの北西にあるグアロス城に向けて出発していた。

レイヴェル、アルリノ、カルマの三人は王女誘拐事件の詳しい話をしており、ゼルスは、辺りの景色に目を輝かせていた。

ゼルスの瞳に映るのは、見渡す限り一面の緑。
クレスキャン平原。ゼルスたちは今まさにそこを歩いている。

グアロス城は城下町であるヴィゴリーレに囲まれ、そのヴィゴリーレもまた、北西をバージリン森林に、それ以外の方角をクレスキャン平原に囲まれている。

グアロスダンジョンはクレスキャン平原の最南東に位置し、それ以降に広がる荒野の境界線としても知られている。

ゼルスは暫く景色を楽しんでいたが、騎士団の三人からこの世界の常識を早く覚えろと言われていたことを思い出し、ダンジョンから出る最中に教えてもらったことを思い出す。

この世界の名はルルカ。

ルルカには大陸は一つしかなく、あとは周りに島が何百かあるくらいだ。

主な国は四つある。

大陸の北端から船で、三時間程度かかる位置にある島国の魔法国家コントウーラ。

大陸の北を占める慈愛の国ベリア。

大陸の東から南を占める最も巨大な国、アウスティーノ帝国。
そして、大陸の南から西を占めるグアロス王国。

その他に特筆すべき国といえば、大陸の南東側の海にある多数の島国が集まってできたせいで、多くの種族で構成されている連合国エイルンと、大陸の北東側の海にある一切交流のない島国の、閉鎖国ハルレインくらいだろう。

十年前まで連合国エイルンとアウスティーノ帝国が戦争をしていたが、今は停戦協約が結ばれており、停戦協約が結ばれて以後、ルルカで戦争は起こっていない。

だが、アウスティーノ帝国は戦争再開のきっかけを虎視眈眈と待っており、何時戦争が起きるか分からない状況になっている。

ルルカの通貨だが、世界共通だ。
お金の単位はルカで、通貨は金貨・銀貨・銅貨・銭貨の四種類ある。

銭貨一枚で一ルカ、銅貨一枚で十ルカ、銀貨一枚で百ルカ、金貨一枚で千ルカとなっていて、価値としては、一食十ルカあれば普通の店の料理だったら食べれる程度だ。

（確かこんな感じだったよな……。まあいいや、あとでレイヴェルに確認すればいいし。えーと、そうそう。魔法もあったな）

自然魔法・強化魔法・召喚魔法・結界魔法・回復魔法・錬金魔法・
幻覚魔法・紋章魔法。

実際はまだ幾つか魔法の種類はあるが、この8つが主に知られている。

ゼルスが覚えているあたりで説明すると、自然魔法は風、水、火、
地、雷といった色々な属性があり、その場にある自然を操ったり、
自ら創りだしたりする魔法。

強化魔法は自分に魔力を浸透させ、自分の身体能力を強化したり、
武器に魔力を浸透させ、その武器の性能を強化したりと、とにかく
何かを強化させる魔法。

召喚魔法は、召喚陣を用いて何かを召喚する魔法だ。召喚する対象の制限はなく、使用する者の実力次第である。

結界魔法は、主に自分や味方を護るために使われ、防御に特化した透明な壁のようなものを出現させる。しかし、防御だけでなく、レイヴェルを閉じ込めた時のような使い方も出来る。

回復魔法は、自分や他人の傷を癒すことができ、達人ともなれば無くなった腕さえ生やす事が出来るという。

錬金魔法は、簡単にいうと2つの物を合成させ、新たに物を創る魔法で、とても難易度が高い。

幻覚魔法は、自分の魔力を相手の魔力にあてて相手の魔力を乱すことにより、相手に様々な幻覚を生じさせる魔法だ。この魔法を使うには先天的な才が重要で、どんなに努力しても習得出来ない人が多い。

紋章魔法は、何かに紋章を描き込み、それに魔力を込めると、そ

の紋章が意味する効果を発揮する魔法だ。

例えば、世界を破滅させる魔法があったとする。その魔法を紋章に置き換え、それに魔力を込めると、世界を破滅させる魔法が発動する。といった仕組みになっている。

といっても、そんな魔法を発動出来るほどの魔力を用意できるはずがないし、そもそも、その魔法の仕組みを完璧に理解しないと、その魔法を意味する紋章すら描けない。あくまで、理論上の話だ。

（魔法についてはこんな感じだったけ。あと俺が気をつけないといけないのは、自分の力を制御するくらいか。制御……できるか？）

ゼルスは、今まで自分が生きる上でまったく必要のなかった力の制御をすることに不安を覚えたが、もし制御を間違えたらレイヴェルたちが処刑されかねないので、しばらくは人前で魔法を使わないでおこうと決意した。

（……俺、生活できるかな。ダンジョンとは生活がおもいつき違うだろうし。珠だっけかな？あれ売ればお金になるそうだけど、そんなの知らなかったから取ってないし。もしかしたら非常食入れ、じゃなかった。闇の口に知らずに入ってるかもしれねー。それを祈るしかないか。）

ここにきてモンスターを殺した時になぜか出現していた珠が重要になってくるなんて……。と嘆くゼルス。

ダンジョンで暮らしていたゼルスにとって、腹を満たす食糧モンスターと違い、なんの意味も必要性も感じられない珠は全くの無価値だった。そんな珠が外の世界ではお金に換えられ、生きていく糧となる。もしゼルスが出現していた珠を全部取っていたら、ゼルスは億万長者になっていただろう。

闇の口というのは、カルマがゼルスを攻撃するきっかけとなった、ゼルスが殺したモンスターを闇の中に保存食として入れていた魔法の事である。

ゼルスは非常食入れと呼んでいたのだが、それを聞いたレイヴェルたちが「あんな高等すぎる魔法にそんな魔法名をつけるなんて駄目だ！」と口を揃えて言い、ゼルスが必死に考えて命名したものだ。

その他に新たな名前をつけた魔法は、ゼルスがダンジョンで寝る前に施していた防衛策と、普段使っている自然魔法と回復魔法。

防衛策は天地の守護に、自然魔法と回復魔法は統合され、神霊魔法に改名された。

なぜ自然魔法と回復魔法も改名されたかというと、外の世界

つまりレイヴェルたちが住んでいる通常の世界では、自然魔法も回復魔法も全て自分の力で起こす事が常識で、ゼルスが言うように、どちらもゼルスがいう妖精の力を借りて起こしているわけではないからだ。

魔法を起こす前提から違うということで、神霊魔法と名付けられた。

当初は妖精魔法の予定だったのだが、妖精族という種族が存在しており、別にその種族が関係する魔法でもないのに却下になった。

次に、ある御伽話で、姿の見えない自然を操る精霊というものが登場しており、それを採用したらどうかとレイヴェルの提案があり、ゼルスがそれに決めようと思った時、アルリノから「精霊魔法じゃ平凡だから、ここは神霊魔法でどうよ！」という訳のわからない猛プッシュがあり、結局、アルリノの神霊魔法が採用された。というのが神霊魔法の名の由来である。

あの時のアルリノのプッシュはすごかった……。とゼルスが思っている、

「ゼルス。ここが城下町ヴィゴリーレよ」

「えっ？」

レイヴェルから声がかかり、もう着いたのか。と思うより早く、目の前に広がる光景に目が奪われた。

いつの間にかゼルスの周りには、多くの人が忙しなく行き来している。

こんなにも人っているものなのだろうか。とゼルスが思うほど大勢の人で城下町は賑わっていた。

（すごい人がいる……。はは、俺の夢叶いすぎだ。こんなにいっぱいいるのに同じ顔の人がいない……。不思議だな。あそこの建物にいっぱい人が並んでる。あれが店ってやつか？ んで、向こうの通りにたくさんあるやつが屋台ってやつか。 んで、あれが ）

きよろきよろと落ち着きなく辺りを視まわすゼルスに、レイヴェルは穏やかに笑みを浮かべながら、アルリノはいたずらっぽく、カルマは少し口角上げながら言った。

「ようこそ。城下町ヴィゴリーレへ」

八話 ヴィゴリーレへようこそ（後書き）

仕事が休みでしたので今日投稿できました。
pcにしてから執筆が進む進むww

次回の更新は日曜にはしたいと思います。

2010・10・13（Wed）

九話 レイヴェルの母

レイヴェルら三人から歓迎を受けたゼルスは、レイヴェルと共にある場所へと向かっていた。

アルリノとカルマは騎士団の団舎に居る一番隊隊長に報告に向かっている。

もちろんゼルスの事は隠し通し、レイヴェルを無事連れて帰ってきたと報告するためだ。

通常、その報告の場に救出された当事者のレイヴェルも居なければならぬが、ゼルスの世話をしなくてはならなかったため、報告ではレイヴェルはダンジョン探索中の怪我で療養中という事にするつもりだ。

ゼルスは少し前を歩くレイヴェルについていきながらも、辺りを見回すことを忘れない。

初めての町は、初めての出会いに溢れていた。

「なあなあ、レイ。あの良い匂いがする店ってなんだ？」

ゼルスが煙突から白い煙と一緒に良い匂いを出している、白を基調にして扉と窓の枠だけを茶色に塗装している綺麗な店を指差す。それを聞いたレイヴェルはゼルスの隣の位置にくるよう歩調を緩めた。

「ああ、あれはパン屋よ。パンは分かるよね？」

「うん、分かる。これがパンの匂いかあ。……それにしても、なんでこちら辺は食べ物物の店ばかり置いてあんだ？」

さつきから食べ物ばかりが見るし。と心で思いながら、ゼルスはレイヴェルに問い掛けた。

「それはね、こちら一帯の地域に住宅が多いからなの。利便性を図って、そのせいでこちら辺には食べ物屋さんとか、日常消費する商品とかを扱うお店ばかりが並んでるの」

レイヴェルは「なるほど」と呟くゼルスを見て頷き、更に説明を続ける。

「今私たちがいる南地区にはそんなのしかないけど、北地区に行け

ば武器屋とか魔法具屋とか戦闘に使う道具がたくさん売ってあるわ。ゼルスは多分北地区のお店の方が使うかもね」

二人が楽しそうに会話しているのを、町の住民は眼を点にして凝視している。

「あ、あの娘オネストさんのとこのだよね……？」「……もう、儂にもお迎えが来たのか……」「お爺ちゃん！気をしっかり！！」などと、2人が通り過ぎた後の町の住民は混乱に陥っていた。

住民たちの間では、レイヴェルは極度の男嫌いで、視界に男が入ることすら嫌がる女性だと認識されている。

多少の誇張はあるが大体はその通りで、レイヴェルの美貌に惹かれた何人もの男共がレイヴェルに話し掛けても、その全員が何事も無かったようにスルーされるか、レイヴェルの心をえぐる言葉か物理的な力で完膚なきまでに心折らされる事になるかのどちらかだ。

そんな場面を何度も見ているヴィゴリーレの住民たちにとって、男がレイヴェルと親しげに話すことは有り得ず、実際にゼルスとレイヴェルとが親しげに話しているのを見て混乱するのも無理はない。

当の本人たちは自分たちが通り過ぎた後にそんな混沌とした状況になっているとは知らず、ゼルスが質問し、レイヴェルが答えるといった光景が目的の場所に着くまで続いていた。

「着いたよ」

レイヴェルがある家の前で立ち止まり、気付かず少し先まで行ったゼルスを呼びとめる。

周囲に立っている家と何の変哲もない茶色の木造建築の家が建っている。

ポストの上に”オネスト”と刻まれている。

「ここがレイの家か」

「他の家と何も変わらないけどね。さあ、入っていいよ」

目的地であつたレイヴェルの家に入るレイヴェルとゼルス。

ダンジョンから脱出したはいいが、その後の生活を何も考えていなかったゼルスを見かねたレイヴェルが、暫くの間生活の拠点として提供したのだ。

「ちょっと待っててね。母を連れてくるから」

そう言つてレイヴェルは奥の部屋に入つて行つた。

ゼルスはレイヴェルの家を物珍しく眺め始める。

初めて入った家。玄関から進むと少し広めのリビングがあり、テーブルとイスが二脚備えられている。客人用の椅子なのか、壁側にも二脚イスを置いてある。そして、リビングの端っこにある炊事場には洗ったばかりと思われる皿が重ねてあり、蛇口から水がポタポタと落ち皿に水たまりを作っていた。

光が差し込む開け放った窓の前には花を挿した花瓶があり、そこから発せられるほのかな良い香りがりビングに漂う。

玄関から見て右側に二階に上る階段があり、リビングの奥の廊下には突き当たりにつ、廊下の左に二つ部屋があるようだ。

窓からきた風が、花の良い香りをゼルスの所まで持ってくる。

「良い香りだ」

「ありがとう」

独り言のつもりで言った言葉にまさか返されるとは思っていなかったゼルスは、声の主の方に振り向く。

「客人に喜ばれるならわざわざ森まで言って取ってきたかいがあるってもんね。私の名前はクラニカ。よろしく」

声の主 クラニカの隣にはレイヴェルが立っており、状況からして考えるとクラニカはレイヴェルの母と考えるのが妥当だろう。

しかしゼルスはクラニカが母親には見えなかった。自分の中にある記憶では、母親という存在はもっと歳をとっているはずなのに……。と常識が欠けているゼルスが思うほどクラニカは若かった。

赤い髪は腰に届くほど伸ばしており、髪と同じ色の瞳は少しの濁りもなく、まるで輝いているようだ。体は引き締まっているが豊かな体つきをして、そのせいで妖艶さが漂っている。ホットパンツを

履いているから分かる、すらつと伸びる美脚にしても、どこからどう見てもクラニカは二十代前半にしか見えなかった。

「よ……よろしく。なあ、一つ聞いても」

ゼルスは、突如飛び、頭めがけて踵落としをしてきたクラニカに驚き、最後まで言いきれなかった。

だが、ダンジョンに住んでいたため奇襲に慣れているゼルスは難無くクラニカの足を掴んだ。

驚くクラニカを地面に叩きつけようとしたが、レイヴェルの母かもしれないことを思い出し、振り下ろしそうになったのを急いで自らの体に抱き寄せる。

結果、右腕でクラニカの膝下を抱え、左腕で脇下あたりを抱える状態のお姫様だっこになってしまった。ゼルスは「あー、大丈夫？」と気まずそうにクラニカに言うが、クラニカは何も答えずに、先ほどのクールな顔を似合わないキョトンとした顔に変化させゼルスを見つめるだけ。さらにレイヴェルから見ると、なぜか自分の母親がゼルスを瞳をトロンとさせて見つめているような気がして

「は、離れてー！ー！」

「年上の人にはちゃんと礼儀をもって接しなければいけないぞ。わかったか？キミ」

「はい。分かりました」

「分かったならよし！」

クラニカはカッカカと豪快に笑う。三人はいま、リビングのテーブルにイスに座り着いていた。

母親に危機感を覚えたレイヴェルが二人を無理やり引き離してから数分後、何事もなかったようにゼルスと話す母を見て、レイヴェルは心底ほっとしていた。

なぜほっとするのか、なんでゼルスと母が見つめあうのを見るだけでイライラしたのか、その原因となったゼルスに抱く感情に、男嫌いであるレイヴェルが気づくことはなかったが、気付くのもそう遠くないだろう。

さて、なぜクラニカがゼルスに襲いかかったかというところ、ゼルスがクラニカに敬語を使っていなかったからだ。

常識でいうと、初対面プラス年上であったクラニカに対し何の敬語も礼儀もなく接したゼルスが百パーセント悪い。

それに対するクラニカの処置も少々、いや、かなりやりすぎな気もするが、彼女はどちらかというと体を使って教育をするタイプだったので、彼女の性格上仕方がないだろう。

「それで、失礼だけどキミは一体何者？自慢じゃあないけど、うちのレイヴェルは大の男嫌いだね。本来なら家に男を招くなんて天変地異は起こりはいらないんだ」

それに、私の蹴りも簡単に防いだしね。と心で付け足したクラニカが、興味深そうにゼルスを見る。

しかしその質問には本人が答えず、娘であるレイヴェルが答えた。

「お母さん。ゼルス……、彼の名前ね。の事なんだけど、お願いだから、何も聞かないで」

「……レイ、どういう意味？」

ゼルスがいる前で、普段クラニカと二人きりでないと使わない口調を使うレイヴェルに驚きながらも、思いつめた顔をした彼女に問いかける。

「そのままの意味。別にゼルスが犯罪者ってわけでもないし、悪いことをしたわけでもない。だけど、ゼルスのことは聞かないで。近所の人に聞かれても……黙ってて。」

ゼルスは黙って成り行きを見守る。予めレイヴェルから「ゼルスの説明は私がする」と言われていたからだ。

レイヴェルは母親に事実を言えないことに心を痛めていた。

だが決して言うわけにはいけない。

ゼルスのすべてを話してしまい、もし国にゼルスの事がばれたら、その時はレイヴェル、アルリノ、カルマの三人だけでなくクラニカまでもが処罰の対象になってしまう。

レイヴェルはそれだけは避けたかった。

レイヴェルの表情を見て、クラニカは、ハア。と頭を垂れる。

（頑固モード入ったわね。ホントこの子は……。きつと知ったら私に不利になる事なんでしょうけど、こうきたらこの子挺子でも動かないから……）

クラニカは仕方ない。と思いながら口を開く。

「ゼルス君とは友達？」

「うん、友達よ」

なんでそんなこと聞くんだろうと戸惑ったが、肯定するレイヴェル。

その彼女を見てゼルスは密かに笑みを浮かべた。

彼は友達が欲しかったが、どうしたら友達になれるのか分かっておらず、レイヴェルに聞いて違うと言われるのが怖かったため、今まで聞けなかった。それがこんな形とはいえ、レイヴェルから友達と言ってもらえて嬉しかったのだ。

「そう、友達か。確かこれから一緒にここに住むのよね？……じゃあ、すぐに住民票とか作らないとね」

「え？」

レイヴェルが信じられないといった顔でクラニカを凝視する。

「なに？ゼルス君がレイヴェルの友達ってわかれば十分でしょ。まあ、私としては恋人の方が嬉しかったんだけどね。でもこれで私もゼルス君、いえ、ゼルスを狙えるし」

初めは嬉し泣きしそうになったレイヴェルは、次は顔を真っ赤に。その次は石化してしまった。

見事に石化してしまったレイヴェルを見て、クラニカは「あらあらどうしたの？」とニヤニヤしながら言う。

「どつ……どうしたの？じゃないよ！なっ、なんでゼルスを……ね、ね、狙うの！？」

レイヴェルは顔をリンゴのように真っ赤にさせながら、勢いよくクラニカに詰め寄る。

「なんでって言われても……。良い男を狙うのは女として当たり前じゃない」

「女って……お母さんもう四十四じゃない！」

「ええ！？」

飄々と答えるクラニカにレイヴェルは歳をとった女性にとっての禁句を言うが、それに一番驚いたのはゼルスだった。

（どう見ても二十代前半にしか見えないクラニカ……さんがそんなに歳をとってたなんて……俺の記憶が間違えてんのかな？）

自分の記憶にある二十代の容姿が実は四十代の容姿だったんじゃない……。と思ってしまうほど、クラニカの年齢はゼルスにとって衝撃が強かった。

「なーに言ってるのレイ。女は幾つになっても女なのよ。それともゼルスを狙われて困る理由でもあるの？」

「……そ、それは」

クラニカの挑戦的な笑みを前に、言い返すことの出来ないレイヴェル。

「俺を狙うってどういうことだ？」

何の意味もわからないゼルスが純粹にレイヴェルに聞く。

「ぜ、ゼルスは何も知らなくて良いの！」

顔を赤くしてゼルスに言う娘を見て、クラニカは初めて恋する乙女のような娘の一面を見た気がした。

そして、もう現れないであろう娘が好きになった男と、娘の結婚式場は何処にしようかと、実現してもえらく先の事を密かに脳裏に浮かべるのであった。

九話 レイヴェルの母（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回の更新は来週の日曜で。

2010・10・17（Sun）

十話 色々な準備

数十分後、レイヴェルいじりが終わったオネスト家は静寂を取り戻していた。

いじられた当人は顔を真っ赤にさせて息を乱しているが、いじられていた最中と比べると大したことはない。

唯一息を乱しているレイヴェルが、不本意そうに口を開く。

「……お母さん。悪いんだけど、ゼルスと一緒に住民票とか、ここで生活するのに必要そうなものを揃えてくれない？」

ゼルスとクラニカが一緒に行動することに不安があつたが、生憎レイヴェルは建前上療養中ということになっており、外出して騎士団の誰かに見られたら後々の対処が面倒なので、最低でも今日明日の二日は外出できないのだ。

「ん、了解。じゃあ早い方がいいし、もう行くわよ。ゼルス」

クラニカはイスから立ち上がり、玄関に向かいながらゼルスに声を投げかけた。

「え？あ、分かった」

物凄く行動の早いクラニカに驚きながらも、ついていこうと急い

でクラニカを追いかけるゼルスを、レイヴェルが引き止める。

「ゼルス。ないと思うけど、魔法とかの力はあるまい使わないでね」

ゼルスは了承の意味で、無言でレイヴェルに微笑みかける。

その意味をうまく汲み取ったレイヴェルは、ゼルスをまねて自分も微笑みかける。

このまま何もなければ、ダンジョンの時のような雰囲気になっただろうが、今回はクラニカが知らずに妨げてしまった。

「なにしてんのゼルスー！早く行くよー」

ゼルスはクラニカの声を聞くと「ごめん、すぐ行く」と言いながら、レイヴェルにアイコンタクトしてリビングから出て行った。

あっという間に一人残されてしまったレイヴェルは、

「お母さん、ゼルスに何もしないわよね……」

と、不安に思いながら、彼が出て行った方向を見つめている。

まるでその不安を助長するように、締めきれていない台所の蛇口から零れる水がポツンポツンと音をたて、リビングに寂しく響いて

いた。

オネスト家から出た二人が一番最初に向かった場所は町役場である。

今はゼルスの住民票を取る手続きをしているのだが、当人は特に何もせず、すべてクラニカが手続きをしていた。

「これで手続きは終了いたしました」

時間にして三十分。受付の女性の声がして、やっと終わったかと手続きの最中暇すぎて終始俯いていたゼルスが顔をあげ、意気揚々と外に出ようと体を出口に向けると、突然後頭部に衝撃が走った。

「いつてー!」

実際は無意識に行った強化魔法のおかげで全然痛くなかったのだが、痛がらないと不自然だと思ってわざと声を出すゼルス。

後ろを振り向くと、クラニカが拳を胸の前に構え立っていた。衝撃の正体は、クラニカのゲンコツだった。

「あ・り・が・と・う・は？」

クラニカはニコニコと、一般の男性が見たらつい見惚れそうな笑顔をしているが、背後に真っ黒なオーラを漂わせている。

ゼルスは住民票を取ってもらったお礼のことか。と思い、すぐさまクラニカに感謝するが、またもや殴られてしまう。

「な！？ちゃんと言ったぞ！」

瞳に涙を浮かべながらクラニカに訴えるゼルス。

今度は無意識に強化魔法を使ってしまわないように、意識して生身の体でゲンコツを受けた。

ゼルスは律儀にレイヴェルとの約束を守ろうとしていた。

「私じゃなくて、受付のお姉さんにお礼言いなさい」

クラニカは「手続きしてもらったでしょ」と付け足し、そういうことか。とやっと理解できたゼルスは「いえ、そんなのいいですよ」とオドオドしている受付の女性にお礼を言う。

「ありがとうございます」

きちんと丁寧語で述べるゼルス。

クラニカの教育的指導がちゃんと効いているようだ。

満面の笑みで言うゼルスを見て、受付の女性は何故か胸が高鳴り、頬を染めてしまう。

（え？なんで？だ、駄目よつ。私には恋人が……。あ、いないじゃん。恋人）

受付の女性は一人で突っ込み、じゃあこのゼルスさんと……。あり？と思っていると、妖しい雲行きにいち早く気が付いたクラニカが行動を起こした。

「じゃあ、ありがとうございます！失礼します！」

言うが早く、クラニカは急いでゼルスを引つ捕まえて役場の外に出ていった。

その時、女性の声でゼルスさん！と聞こえたのは決して空耳ではないだろう。

（……全く、惚れさせるためにお礼言わせたんじゃないぞ……！）

クラニカは、まさかあの奥手そうな受付の女性を惚れさせるなんて……。と思いつつ、ゼルスを睨む。

が、当の本人はなぜ睨まれるか分からず、きょとんこちらを見返すだけだ。

ゼルスの容姿は整っていて、人に好感を感じさせる事は分かる。

しかし、あんなに簡単に惚れさせることが出来るほど、絶世の美男子ではない。

なぜか人に容易く好意を持たせる、自分ですら惚れかけた男嫌いの娘が連れてきた新しい家族をただただ恨めしく見るクラニカであった。

次に、クラニカとゼルスは冒険者協会に足を進めていた。

冒険者協会とは、ルルカではそこかしこに見られる、所謂なんでも屋のようなものだ。

依頼主の依頼を、冒険者協会に所属している冒険者がやり遂げ、依頼主からその依頼の難易度に応じた金額をもらうというシステムになっている。

なお、お金の引き渡しは原則として冒険者協会を通してこれを行わなければならない、これを破った場合、何らかの処罰が待っている。

依頼の内容は、家の掃除・引越しの手伝い・護衛・研究材料の入手・モンスター討伐・ダンジョン探索等多種多様で、この世界の大半の人は冒険者協会に入り、依頼主や、冒険者といった形で冒険者協会に関わっている。

なぜ世界の大半という膨大な数の人が入会しているかというと、冒険者協会は、入会費・退会費が必要なく、依頼を頼んだり達成して報酬を貰う時にしか費用がかからないので、入会していてメリットはあってもデメリットは存在しないからだ。

ゆえに、クラニカもゼルスを冒険者協会に入れるつもりである。単純に、ここしかゼルスが働ける場所がないという訳もあるのだが、クラニカは四階建ての一際大きな建物の前に立つと、ゼルスに忠告した。

「ここがヴィゴリーレ冒険者協会よ。職業上荒っぽい奴が多いけど、問題は起こさないように」

「ああ……はい」

ゼルスはクラニカがこちらを咎めるように睨みつけてきたので、とりあえず敬語でもう一度返事をしておいた。

どうやらその対応が正解だったようで、それでよし。といった感じでクラニカが微笑みながら頷き、「入るわよ」とすでに開き放たれていた入口に進んでいく。

冒険者協会の中は人で溢れていた。

入口の真正面に受付が置いてあり、その両サイドには地下一階、四階の案内板が置かれている。

冒険者協会の左右の壁に沿って階段があり、それが四階まで続いている。

一階からは二階は天井しか見えないが、大勢の足音が響いていてかなりの人数が二階に居ることが予想される。

クラニカが受付に近づき、

「こんにちは。入会したいんですけど、総務課に行けばいいのよね」

確認の意味で受付に立っていた男性に尋ねると、男性はにこやかに返す。

「はい。クラニカ様からみて右手の奥にあります総務課に行ってください結構です。……それにしても、お久しぶりですね。今日

はそちらの方のご入会に来られたのですか？」

「ん、その通りよ。じゃ、今日はちょっと急いであるからまたあとでね」

クラニカは軽く礼をして、受付の男性が手で示した方向に進んでいった。

ゼルスもクラニカに倣って礼をし、クラニカの後ろを金魚のフンのようについていく。

「あの男性と知り合いなんですか？」

「まあそうね。ゼルスもここに通うようになればあの人も知り合いになるわよ。あと、敬語はもういいわ。今日から一緒に暮らす家族なんだから。……でも、目上の人とか初対面の人とは敬語で話さないよ。礼儀は大切なんだから」

そう言った後、クラニカは総務課の女性に「入会したいんですけど」と話しかけ、手続きについて聞いていたが、その会話はゼルスの耳には何も入っていなかった。

というより、あることを考えるあまり、耳に何も入らなくなっていた。

”家族”

この言葉がゼルスの頭の中を埋め尽くす。

それは、ゼルスが十三年間欲し続けた、どうしても手に入らなかった絆。

ゼルスは感激のあまり、涙腺が決壊しかけていた。

「ゼルス！ーなーにずっとボーっとしてんの？早くこれに署名しなさい」

クラニカは俯いたまま動かないゼルスに向け、書類をピラピラさせながらゼルスの頭に当てる。

「あ、ごめん。……これでいい？」

泣き声にならないよう気をつけながら、ゼルスは書類に名前を書き、クラニカに手渡す。

「はい。これでゼルス様の入会手続きは終了いたしました。ゼルス様はただ今から冒険者となります。おめでとうございます。では、こちらの本を差し上げます」

クラニカから書類を受け取った総務課の女性は、一冊の本をゼルスに手渡した。

七センチメートルほどの厚さで、表紙には”冒険者の手引き”と

記されてある。

「こちらの本は読んでもらいますと分かりますが、冒険者協会の規則や、冒険者としての心構えなど、冒険者として活動するには欠かせない事が書いておりますので、必読願います」

総務課の女性は一息つくと、「そして」と言いながらゼルスに小さなカードを示した。

「これは、冒険者証明カードといいます。冒険者の方ならば1枚必ず持つており、これに記載されている情報を示さないと依頼を受けることができません。記載されているのは、氏名・年齢・冒険者ランク・所属チーム・依頼の成功率等です。もちろん、ゼルス様は今所属チームと依頼の成功率は何の記載もされていません。冒険者ランクも、最低のEランクとなっています」

「でも、そのカードって何も書かれていませんが……」

ゼルスの言うとおり、カードには何も書かれていない。ただ黒で塗りつぶされているだけのカードだ。

ゼルスは首をかしげながら総務課の女性を見る。

「いえ。そう見えるだけで、実は記載してあるんです。このカードは、魔力を流したら文字が浮かび上がる仕組みになっています。そ

して、一番最初に流した魔力しか以後受け付けません。このシステムで、人が他人に成り済ますのを防いでいます。ですから、今からゼルス様の魔力をこのカードに流し込んでもらいます。微量で構いませんので」

総務課の女性はカードをゼルスに渡し、渡されたゼルスは極度の緊張に陥っていた。

レイヴェル・アルリノ・カルマから口うるさく言われた事を思い出す。

もしこれで魔力の調整を間違えて、大量の魔力を流してしまったら、下手すれば三人が処刑されてしまう。

慎重にやらねば。と、微量の魔力という定義が全く分からないゼルスは、蛇口を一ミリずつ捻るような超微調節をしながら魔力を流し込む。

すると、すぐに白い文字が浮かんできて、氏名：ゼルス 年齢：十八 冒険者ランク：E 所属チーム：なし 成功率：なし という文字を形取った。

すぐ出てきたので、魔力を流しすぎたかと思い焦ったゼルスだったが、クラニカと総務課の女性の反応を窺っても特におかしなものはなかったので、成功したか。とほっと一息ついた。

「おめでとうございます。今から依頼を受けていただいても構いませんが、冒険者の手引きを一読してから受ける事をお勧めします。……では、またのご利用をお待ちしております」

総務課の女性は綺麗なお辞儀をする。

クラニカとゼルスは女性にお礼を言々と出口へ歩いて行った。

冒険者協会から出ると、空は綺麗な夕日色に染まっていた。

「……綺麗だ」

ゼルスは初めて見る夕日に心奪われ、呆然と立つ。

そんなゼルスを見て、悪戯心が湧いて出たクラニカはぴょん。と
ゼルスの前に出てきて、穏やかに微笑む。

「私とどっちが綺麗？」

ゼルスがクラニカを見ると、夕日を浴びている真っ赤な髪と瞳をした女神がそこにいた。

まるで先ほどの感動が前座になってしまっほど、クラニカは一種の芸術のように美しかった。

ゼルスは先ほどと同じ言葉しか呟けなかった。

「……綺麗だ」

「ちよつと、無視すんの？まあいいわ。早く残りの買い物して帰りましょ」

あまりの美しさに言葉がそれしか出なかったゼルスに勘違いして、適当に流されたと思ったクラニカはプイとゼルスに背を向け先に進む。

ゼルスは誤解を解くため手を伸ばそうとしたが、それよりもレイヴェルにも感じた胸の高鳴りが気になり、胸を押さえ今のゼルスでは分かるはずのない感情を理解しようとしていた。

ゼルスも一つ勘違いをしていた。

確かにクラニカはゼルスに適当に流されたと思ひ違ひはしたが、ゼルスに背を向けたのは別の理由だ。

クラニカは、夕日が自分に射っていて良かったとこれほどまでに思つたことはなかつた。

(……あんな言葉だけで、こんなになるなんて……)

ゼルスをドキドキとさせるはずが、まさか自分をこんなにドキドキとさせてくるなんて夢にも思ひなかつたクラニカは、夕日に何度も何度も感謝しながらも、顔の赤さを誰かに言われたら、夕日のせいにしよう。と考えながら次の店へと歩いて行つた。

夕日も見えなくなり、辺りが暗くなり始めた時間帯にクラニカとゼルスは家に帰り着いた。

「クラニカ買いすぎ……」

「何言ってるの。全部ゼルスのためのものですよ。少し重いくらい我慢なさい」

ゼルスは両手に持った大量の袋を玄関に置き肩をほぐす。

「じゃ、リビングまで持ってきてなさいよ」

「はいはい」

二人がリビングに入ると、レイヴェル以外に人がテーブルに着いていた。

ゼルスが知る数少ない友人であるアルリノが、そこにいた。

（なぜここに？）

騎士団の団舎に報告に行っているはずの彼女を見たあと、困惑す

るゼルスはレイヴェルを見るが、レイヴェルは気まずそうに口を真一文字にキュツと引き締め、ゼルスが見ているのにも気づいていないようだ。

「おかえりー。お邪魔してまーす」

そんな困惑しているゼルスの気も知らず、アルリノはのほほんと笑いながら、ひらひらとゼルスとクラニカに手を振っている。

「あら、いらっしやい。……どちら様？」

「あ、これは失礼しました。私、レイヴェルさんのとこの班長をやってますアルリノ・ラディオオーゾと申します」

アルリノは芝居がかったように大げさにクラニカに礼をする。

「初めまして。私はレイヴェルの母のクラニカです。いつも娘がお世話になってます。……ところで、レイヴェルはどうしたんですよ
うか？」

社交辞令もほどほどに、クラニカは軽く俯き加減になっている娘の話に入る。

「……母上、申し訳ありませんが、二人と一緒に部屋に行ってください。班長、ゼルス、着いてきてください」

アルリノが口を開くより早くレイヴェルが口を開き、ゼルスとアルリノを二階へと促す。

クラニカは納得いかないようだったが、レイヴェルの頑固の時の表情を知っているので、特に何も言わず3人を見送った。

三人は無言で階段を上り、部屋に入った。

ベッドと箆笥と本棚だけが置いてある、質素な部屋だ。

本棚には魔法関連の本や武器・防具・モンスター図鑑などしかなく、それらを娯楽とするなら別だが、普通の人が好む娯楽物は一切置いていない。

「……レイヴェル。もうちょっと楽しみなよ」

部屋を一通り見渡したアルリノの第一声がこれだ。

「なんなら私のいくつかあげようか？」と真面目な顔でレイヴェルに提案するが、「結構です」ときっぱり断られていた。

「レイ、どうかしたのか？」

ずっと口を真一文字にしているレイヴェルを心配そうに見ながらゼルスが尋ねる。

「謹慎1週間」

アルリノがそう言うと、レイヴェルが肩をびくつとさせ顔を俯かせる。

急に何を？とゼルスが不思議そうにアルリノを見つめると、アルリノがやれやれと肩をすくめて馬鹿らしそうに話す。

「それがレイヴェルが落ち込んでる理由。今回の騒ぎの結果の私たち十八班に対する処分よ」

「えーっと、それって一週間仕事するなってこと？」

「そ。上はレイヴェルがダンジョンに入る前に私に確認を取らなかったのが駄目って言って、明日から一週間、連帯責任ってことで、十八班を自宅謹慎処分にしたのよ。レイヴェルはそんなくならないことに責任を感じてるわけ」

アルリノは「困ったちゃんねー」と呆れ顔でレイヴェルを見上げる。

「くだらないことはありません！この謹慎処分は班員全員の将来に響きます！！」

「私はそんなの興味ないからいいの。カルマも勿論興味ないし、バレーとアンヌも出世とかどうでもいいわよ。第一、こんな謹慎処分なんか将来にほとんど響かないし」

「……しかし」

どうしても自分のせいで班員全員が謹慎処分になった事が悔やみきれないレイヴェル。

そんな責任感が強すぎるレイヴェルを横目で見ながら、

「私がここに来て処分のこと言っただけでこんな感じなの」

と、アルリノはゼルスに耳打ちする。

「それでか。ところで、俺のことは？」

「ゼルスのことは何も心配なし。後はゼルスが凄く目立つ行動しなければ大丈夫よ」

「よかった……。なるべく制御するよ」

ゼルスはひとまずほっとすると、目の前に居るレイヴェルをどうするか考える。

（アルリノの話だと、班員はみんな謹慎処分にはどうも思っていないみたいだから、レイヴェルの気持ちをどうにかするだけか）

必死に考えるゼルスだが、コミュニケーション初心者には少々荷が重い問題だったようで、見事に石になったまま動かない。

石になったままうなり続けるゼルスと、「私のせいで……」とネガティブになっているレイヴェルを見て、アルリノが大声をあげた。

「あー！何ゼルスまで悩んでんのよ！レイヴェル！あんたは何も気にしないでいい。というか、気にしたらダメ。それがあんたの罰よ」

「罰？」

レイヴェルがようやくまともに顔をあげる。

アルリノは窓際に行き、星を眺めながら言う。

「そう。レイヴェルは私たちに迷惑かけたのが嫌だったんでしょ？だ・か・ら、私たちに迷惑かけた罰として、」 私たちに今回のことで気にかけない” ってのがレイヴェルの罰！ってことで、私はもう帰るわ。さらばー！」

言いきるより早く、アルリノは窓を開け、そこから飛び降りた。
驚いたレイヴェルが急いで窓から身を乗り出すが、おそらく強化魔法を使ったのだろう、アルリノの姿はどこにもなかった。

「アルリノ……帰ったの？」

目をまん丸にさせながら、ゼルスがレイヴェルに問う。

「そう、みたいね」

「じゃあ、レイはもう罰受けるしかないね」

「いえ、それとこれとは」

「あれ？班長命令でしょ？これ破ったら謹慎とかにならないの？それに、俺はこれが一番レイに効く処分だと思う。だって、レイは実際にこの罰受けるのが一番嫌だろうし」

そう。レイヴェルにとってある意味一番嫌な処分である。

責任を人一倍感じるレイヴェルにとって、罰を受けない方が罰になるのだ。

手を額に当てながらため息をつくレイヴェル。

「はあ、分かったわ。受けるわよ」

それからゼルスとレイヴェルが下に降りると、クラニカが待っていた。

なんて言い訳しよう。と思っていたレイヴェルだったが、予想外にクラニカは何も聞いてこず、「何も聞かないの?」とついレイヴェルが言ってしまったが、「聞いてほしいの?」と逆に言われてしまった。

謹慎処分だと言ってしまうと、クラニカにダンジョンに行ったことがばれ、ゼルスの秘密がばれる事に繋がり、クラニカまで、ゼルスの秘密が国にばれた時に処刑される対象となってしまうので、レイヴェルは何も聞かない母の好意にありがたく甘えることにした。

「アルリノさんはどうしたの?」

「窓から帰ったよ」

「あらそう」

(え? なにも突っ込まないの?)

少しおかしい親子の会話にゼルスは疑問を感じたが、何分色々と経験不足な彼にとって、この会話が普通かどうかの判断は出来なかった。

今ゼルスの前には、初めてモンスター以外の食事が並んでいた。
ローストビーフに野菜のグリルと温かいスープとパン。

ルルカでは一般的な家庭料理だが、ゼルスにとっては全く一般的ではなく、未知の料理だ。

ゼルスは、確か記憶ではナイフ・フォーク・スプーンを使って食べるはずだけど。と思いながら恐る恐るナイフとフォークを手にする。

ゼルスの視界の端には、心配そうに自分を見守るレイヴェルが映っている。

ローストビーフを口に入れ、咀嚼する。

香辛料は、料理の味付けには欠かせない。

ただの素材の味だけというのも良いが、大抵の肉や魚などの食べ物には香辛料を加えるだけで、何倍ものおいしさになると言っても過言ではない。

よって、今まで香辛料を使った食べ物を食べたことがないゼルスが、そのおいしさに喜び狂うことも仕方のないことだろう。

「すい……」

「どんどん食べなさいっ」

ゼルスの食べっぷりにただただ目を見張るレイヴェルに、自分が作った料理を頬一杯にして食べるゼルスを見て、ニコニコとご機嫌なクラニカ。

母が作った料理を本当においしそうに次々と食べるゼルスを見て、レイヴェルは母に料理を習おうと決心し、自分が作った料理をおいしそうに食べるゼルスを想像して頬を緩めるのだった。

ベッドに寝て天井を眺めるゼルス。

今ゼルスは、レイヴェルの部屋からみて向かいの部屋に居た。

元々使わずに放置していた部屋だったので、なんの問題もなく寝床を確保できた。

（本当に外に出れた）

ゼルスはニヤケ顔を隠すことができず、今日見た、聞いた、触れた、感じた色々なものを思い出そうとする。

今日一日だけでたくさんの事を知ったゼルスは、明日もあるであろう初めての出会いに、胸を膨らませていた。

（でも、お金とかあげないといけないよな。住まさせてもらうんだし。後で珠が闇の口にあるか確認しなきゃな）

ゼルスはそう思いながら、心地よいベッドと満腹感に負け、眠りに就いた。

十話 色々な準備（後書き）

予定より1週間も遅れてすみません。
言い訳は活動報告で。

次回の更新は、出来れば明日。無理だったら祝日の水曜にします。

2010・10・30（Sat）

十一話 クラウロンの依頼 ？

ゼルスとレイヴェルは闇の中に居た。

周囲は漆黒に包まれ、光がなく何も見えないはずだが、不思議なことに物体はしっかり細部まで見ることが出来る。

この空間はとてつもなく広く、限界が見えない。

そこらじゅうに、凍っているモンスターや、体の一部がなくなつて絶命しているモンスターが転がっている。

その全てが最低でもAランクモンスターなので、レイヴェルはいちいち驚くことに疲れ、例えSランクモンスターを発見しても無反応でいることにしていた。

ここは闇の口の中だ。

闇の口とは、ゼルスがダンジョンで暮らしていた時に、倒して食べきれなかったモンスターを入れ込んでいた四次元の倉庫みたいなものだ。

何もない空間に楕円形の闇を出現させその中にモンスターを詰め込んでいたのだが、今回は珠があるかを調べるために、レイヴェルを連れて自ら入っていた。

闇の口に入ることに対し凄じい嫌悪感を抱いていたレイヴェルだったが、ゼルスの根気に負け恐る恐る入ってから驚きの連続だった。こんな魔法があるのか。と、改めてゼルスの異常さを感じずにはられない。

「なあ、レイ！珠ってこの丸い奴かあ？」

「そうよー。……あれ？ゼルス。そういえば前キラベア出した時どうやって出したの？」

少し離れた所から、紫色の丸い玉を掲げながら聞いてくるゼルスに応えるレイヴェルは、もしかして。と、思った事を確認するためゼルスに聞いてみる。

「んー。あれはキラベアを出すように念じて出ただけだけど」

「じゃあさ、いちいち中に入らないで珠、出せたんじゃない？」

「あ」

レイヴェルの思ったとおり、凶星だったようだ。

苦笑いを浮かべるレイヴェルを見て、ゼルスは申し訳なさそうに頭を下げる。

「……ごめん。レイ」

「いいわよ。そうとわかったら外に出ましょ。ここにずっといたら気が狂いそう」

笑顔で許すレイヴェルを見て、ゼルスは幾分気持ちが軽くなった。

ゼルスの部屋に戻ると、ゼルスは早速手を入れ、珠を出すよう念じ始める。

するとどうしたのだろうか、ゼルスがひきつった笑いをしながらレイヴェルを見る。

「どうしたの？」

「それがさ……」

「うん」

「Aランクモンスターの珠なら、最低でも五百ルカだったよな」

「そうだけどうしたの？」

なかなか本題を言わないゼルスをおかしく思うレイヴェル。

「なら、本当に最低でも、五万ル力はある。念じてみたら珠が百個以上あるのが分かった。多分本当は、五百個は余裕であると思う」

「え？なにそれ」

あまりにも膨大な数に、レイヴェルは軽く目眩がする。

十個あったらいい方だと思っていた二人の予想を遥かに超えた数の珠が発見された。

金額にすると、余裕で二十五万ル力を超える。

安い一軒家なら買えるほど金額になる珠を所有していた事が判明し、呆然とする二人。

しかし、ここで一つ問題が発生する。

「換金したら、絶対問題になるわね」

そう。珠を換金する場所は冒険者協会にしかなく、冒険者証明カードには記載されないが、冒険者協会側のゼルスの帳簿に、換金された珠の予想モンスターランクが記載されるのだ。

そうになると、ゼルスの強さが冒険者協会に知り渡ってしまう。冒険者協会は国の機関なので、それは非常にまずい。

結局、最初から珠を換金するという選択肢は無理だったのだ。

「なんか、ごめんなさいね……。最初から換金は無理だったみたい」

レイヴェルから珠の換金についての説明を受けてから明らかに落ち込んで座り込んだゼルスに、レイヴェルは良い励ましの言葉を探すが何も思い浮かばない。

レイヴェルがどうしようかと腕を組んで悩んでいると、ゼルスがいきなり立ち上がり、

「よし！！今から依頼受けに行こう！」

と、レイヴェルに向かって言った。

しかし、レイヴェルは今日から一週間謹慎処分だ。行きたくても行けない。

レイヴェルがその旨をゼルスに伝えたと、ゼルスは「クラニカと行ってくる」と言っ、一階に降りて行った。

レイヴェルがゼルスを追って一階に降りると、朝食の片付けをしているクラニカと、彼女と話しているゼルスがいた。

「まだご飯いるの？」

「そうじゃなくて、クラニカ。俺と一緒に依頼受けて！」

クラニカは指を顎に当て、

「そうねー。初め一週間位は一緒にした方がいいわね」

と言い、洗っていた食器を食器かごに立てかける。

「じゃあ!」

急くゼルスを落ち着かせるように、クラニカはゼルスの目の前で指を一本立てる。

「そんなに急かせると、女の子に嫌われちゃうわよ。二、三十分待ってて」

妖艶な笑みでそう言うと、クラニカは奥の部屋へと去って行った。

「……ゼルス。昨日、お母さんと何かなかった?」

レイヴェルから見ると、ゼルスと接するときのクラニカの瞳が、女のそれになっているときがある気がするがしてならない。女の勘だが、どうも気になる。

「いや、別に何もないけど」

「そう、だったら良いんだけど……」

なぜ疑わしい目でレイヴェルがこちらを見てくるのか、ゼルスには分からなかった。

「どんな依頼が良い？」

クラニカが隣を歩くゼルスに向かって問いかける。
二人は家を出て、冒険者協会に繋がる大通りを歩いていた。
朝早いというのに、大勢の人が行き来している。

「それが、どんな依頼があるかわかんなくて……」

「あ、冒険者の手引き読んでないでしょ。あれに全部書いてあるわよ。ま、私も最初のころは読んでなかったけどね」

クラニカは一息つくと、「モンスターと戦ったことある？」と尋ねた。

ゼルスはその質問にドキリとし、「何回か」と冷や汗をかきながら答える。

幸い、動揺するゼルスに気づくことなくクラニカは会話を続ける。

「ランクとか分かる？」

「えーと、確かに位だったと思う」

「C！？……ま、でも私の蹴りを初見で完璧に防いだんだからC位だったら戦えるか」

その言葉でゼルスは、クラニカとの衝撃的な初対面を思い出す。
あの少しの手加減も感じられなかった、生身のまま直撃したら頭蓋骨が陥没していたんじゃないかと思わせるほど凄まじかった踵落とし。

当時は思わなかったが、あの時のクラニカの眼光を思い出すと身震いする。

それにしても、クラニカが驚いているあたり、Cランクは強いのだろうか。ゼルスは、帰ったらレイヴェルに聞いてみることにした。

その時クラニカは考えるように顔を俯かせ、ぶつぶつと独り言を言っていた。

ゼルスがクラニカを見ると、ちょうど考え事を終えたのだろう。クラニカは満面の笑みで言い放った。

「よし、決めた！薬草採取の依頼にしましょ！！」

「あれ？モンスター退治とか、そういうのじゃねーの？」

モンスターと戦った事があるか聞かれたので、てっきりモンスターと戦う依頼を受けると思っていたゼルスは、クラニカに聞く。

「実はね、モンスター退治とかの依頼って他の依頼に比べたら、条件付きじゃない限り一番単純なの。他の依頼は色々気を付けなきゃいけないことがあるんだから。それに、採取の依頼もどうせ探してる途中にモンスターと戦うことになるから、ゼルスの力見るにして

も、わざわざモンスター退治の依頼選ばなくてもいいわよ。」

ゼルスが「なるほどー」と納得していると、横から声が聞こえた。

「クラニカさん！ちょっといいかい？」

「あーら、ローベンさん。おはようございます」

ふつくらとした顔付きのおばさんが、ゼルスをじろじろと見ながらクラニカと話す。

「おはよう。いやね、今あんたの横にいるお兄さん。なんと昨日お宅の娘さんと楽しそうに歩いてたんだよ！あたしゃびつくり仰天さ！あーんなに男嫌いの娘さんが今まで見たことない位笑ってたんだから。それでさ、そこのお兄さんって、娘さんのこれかい？」

おばさんが好奇心溢れる表情で、ニヤニヤしながら小指を立てる。いつの間にか、周囲に居る人々も耳を傾けて聞いている。噂好きそうなおばさんたちだけでなく、若い男衆もだ。

そんな周りの反応にクラニカは呆れながら、

「さあね。……案外、私のこれかもよ?」

と、小指を立てウィンクし、その場を通り過ぎていく。

去っていく2人の姿を見ながら、おばさんは「あらまあ」とグフフと笑う。

野次馬と化していた男衆の中には、安心したような顔の男もいれば、非常にショックを受けたような若者もいたそうだ。

ヴィゴリーレ冒険者協会は地下一階、地上四階の構成となっている。

地下一階には料理屋兼酒場があり、冒険者たちの交流の場としてよく使われている。

地上一階には、総合案内の受付や、冒険者協会を支える総務課を始めとした事務関係の部屋等があり、ここでは、家の引っ越しといった、所謂雑務の依頼を受けることができる。

二階では、ダンジョンに行くときの手続きや、珠の換金等を行う。一般人はダンジョンに行くことが出来ず、行けるのは冒険者のみだ。

レイヴェルが言っていたように、ここでは冒険者一人一人に帳簿が作られ、換金した珠の持ち主であったモンスターの予想モンスターランク等が記される。

三階では雑務以外の依頼が受けられ、四階も同様である。しかし、Aランク以上の冒険者しか入れない。

四階はAランク以上の依頼しか扱ってなく、危険度も高いからだ。

そのヴィゴリーレ冒険者協会の三階に、周囲の注目を浴びている者たちが居た。

「さあ、今日こそ、私のチームに入りませんか？」

自信満々にそう言う彼の名は、ロデオ・パピルニッカー。

最近名を上げてきた、チームランクAの”ニンファール”のリーダーだ。

ロデオの後ろには、3人のチームメイトがいた。

長身で銀の長髪の、背に矢筒をからい、腰に弓を携えている寡黙
そうな雰囲気のある男。

名をドリラス・インフィアという。

ドリラスの両横には、分厚い本を大事そうに抱えている学者風の
男性 ウェンディルス・ルーカーと、白いローブを着、フー
ドで顔を隠しているミステリアスな女性 シア・ゴルヴェッ
クスが、ドリラスを同じく事の成り行きを見守っていた。

この四人は全員Aランクであり、ヴィゴリーレ期待の新人だ。

この四人と相対して立っているのは、二人の男女。

長く綺麗な赤い髪と瞳を持ち、世の男の大半を虜にしてしまいそ
うな美貌の女と、どちらかというと長めの茶髪に、優しい蒼の瞳を
した端正な顔の男。

クラニカとゼルスだ。

周囲の人々の反応は、「あの誘われている女・・・何者だ?」と、
クラニカを訝しげに見るか、「またやってんのか。いい加減諦めれ
ばいいのに」と、呆れた顔でロデオを見るかの二つに分かれていた。
どうやら、この勧誘は初めてではないようだ。

「またか。何度も言うが、私はお前のチームには入らない」

クラニカにしては珍しく、とげがあるように言い放つ。

「一体なぜ? あなたほどの冒険者が、何故高みを目指さないのです

か」

「別に私は高みなんかに興味はない」

「……横の彼は誰です？」

「お前には関係ない。私たちは今からこの依頼の依頼主に会いに行くんだ。どいてくれないか？」

自信に満ち溢れていたロデオの顔が徐々に苛立っていき、憤慨した様子でクラニカが手にしている依頼書を指差す。

「なぜ！Aランクの貴女がDランクという下級の依頼を受けるのですか！？そんなくだらない依頼を受けるのなら、私のチームに入り、名誉ある依頼を受けましょう！！」

その言葉を聞いたクラニカは、心底呆れた表情になり、

「……もういい、話にならない」

と、ゼルスの手首を掴むと、ニンファールの面々の横を通り過ぎ、階段を早足で降りて行った。

残された野次馬は自然と解散し、ロデオ以外のニンファールの面々は、呆れ顔でロデオに近づく。

「……もういい、これで六回目か」

ドリラスがクラニカをまねて皮肉っぽく言い、ロデオの肩にポンと手を置く。

「もう諦めたら？ロデオ」

と、ウェンディルス。

シアは何も言わず、クラニカとゼルスが降りて行った階段を見つめている。

ロデオは、手を強く握りしめ、歯をむき出しにして噛み締める。

「私は、絶対に諦めない」

諦めるつもりが全くないリーダーに、ドリラスとウェンディルスはため息をつくのだった。

クラニカとゼルスは依頼主の所へ向かっていた。
ゼルスは恐々と口を開く。

「さっきの人って、知り合い？」

冒険者協会でクラニカから依頼の受け方を実演してもらい、今から依頼主に会いに行こう！と意気込んだ時に突然現れた四人組。

一番前に居た金髪の男は必死にクラニカを勧誘していたようだが、勧誘に対するクラニカの対応がクラニカらしくないような気がした。

「あいつね……。ずっと私の事チームに誘ってくるウザい馬鹿よ」

「入らねーの？」

「あんな奴のチームなんか入らないわよ。あいつは何っにも分かってないわ。ゼルス、これだけは覚えておいて。AランクでもEランクでも、どれも大切な依頼よ。全力を尽くしてやりなさい。あいつが言っていたようなくだらない依頼なんてないの。あいつは天狗になってるだけ。今のままじゃあ、今より高みなんて、一生無理ね」

クラニカは鼻息荒く言い放つと、依頼書をゼルスに渡した。

「よく見ときなさい」

イライラが収まらない様子のクラニカは、黙々とゼルスの前を歩く。

ゼルスは初依頼の依頼書を見る。

”Dランク：薬草採取”と上部に大きく書かれ、それより下部には依頼の詳細内容と依頼主が書かれている。

今回の依頼は、バージリン森林に生息している、ある三種類の植

物を探ってくるらしい。

依頼主はクラウロンという薬屋の店主だ。

「ゼルス！クラウロンはこっちょ」

クラニカは大通りに沿って歩いていたゼルスを呼びとめる。

クラニカは言われなければおそらく気付かないだろう路地の前に居た。

路地は、陽の光が遮られているせいで薄暗く、どう考えても店舗を出すような立地ではない。

「路地裏なんか店あんの？」

当然の疑問をクラニカにぶつけるが、

「あるから行くのよ。依頼書の裏に地図書いてんでしょ」

と言われ、依頼書をめくってみると、本当に地図が書いてある。

どうやら、路地の突き当たりに店を構えているようだ。

体を横にしてやっと二人が通れるくらいの幅しかない路地の裏に、果たして店なんかあるのだろうか。と、ゼルスは半信半疑のまま路地を行くクラニカについていく。

すると、少ししたら何かが見えてきた。

（ほんとにあったよ……）

ゼルスの瞳には、無骨な鉄製の扉と、その上にある”クラウロン”と書かれたアーチ状の看板が映っていた。

「さ、入るわよ」

驚くゼルスを脇目に、ノーリアクションで無骨な鉄製の扉を開けて入っていくクラニカ。

クラニカの無反応さに疑問を感じながらも、ゼルスも続く。

室内は綺麗に整頓されていた。

路地の突き当たりに構えている店がこんなに綺麗だとは誰も思わないだろう。

床は埃もなくピカピカに磨かれ、電灯の明るい光のおかげで、床が輝いているような錯覚を起こす。

壁は全て棚で覆われ、その棚には様々な色の液体が入った小瓶・大瓶、塗り薬のようなぬるつとしたモノが入られた箱、その他にも危険な香りのする植物や果物などがたくさん置かれていた。

そして、なぜか最近嗅いだ花の匂いがする。

「あれ？この匂いって……」

ゼルスは確認するようクラニカを見る。

すると、クラニカは頷いた。

「そうよ。ここには家と同じ花が置いてあるの」

「正確には、お主の家に農の家と同じ花が置いてある……じゃろ？」

突然の声に、ゼルスとクラニカは驚いた素振りも見せず、カウン

タ―の奥から登場した声の主である老人の方を向く。
穏やかな顔をし、緑のローブを着ている老人はがっかりしたような声色で。

「なんじゃ。二人とも気付いておったのか。つまらんのう」

並みの冒険者だったら気付かなかっただろうが、生憎クラニカはAランクの一流冒険者で、ゼルスは言わずもがな、つい最近までダンジョンでサバイバル生活を送っていた強者だ。
そんな二人が気付かないわけがない。

「残念だったわね」

クラニカはニシシと親しげに笑う。

ゼルスは、あれ？と思いながらクラニカと老人の会話を聞く。

「ところで、そちらの青年は？」

「ゼルスよ。一緒にクラウロンさんの依頼を受けにきたの」

「ほお。僕の依頼を受けてくれたのか。お主なら安心じゃ。よろしく頼むぞ。クラニカとゼルス」

クラウロンはにっこりと笑い、「ちょっと待っててくれ。渡すものがある」と言って、再びカウンターの奥に引っ込んだ。

ゼルスとクラニカの二人きりになると、ゼルスが小声で尋ねる。

「クラニカ、あの人と知り合い？」

「そ。顔見知り。今回の依頼主よ」

「あの人……じゃあ家に置いてあった花ってここから貰ったのか？」

「いや、ちゃんと採りに行ったわよ。譲ってって言ったんだけど譲ってくれなかったから、花がある場所とか聞き出して採りに行ったの。……っていうか、顔見知りって言わなかった？」

クラニカは首を傾げてゼルスを見る。

ゼルスは苦笑いで答える。

「うん」

「あー、ごめん。イライラしてて言うの忘れてたわ」

ハハハと手を後頭部に触れながらクラニカが笑っていると、クラウロンがカウンターに戻ってきた。

「待たせたのう。ほれ」

少し息切れているクラウロンは、三枚の紙をゼルスとクラニカのそれぞれに手渡した。

十一話 クラウロンの依頼 ? (後書き)

二度続けて更新日時に嘘ついてしまいました。
ごめんなさい。

言い訳はまた活動報告で。

2010・11・6 (Sat)

十二話 クラウロンの依頼 ？

クラニカとゼルスはクラウロンから三枚の紙を受け取った。紙にはそれぞれ植物の絵や名前、特徴等が記されている。

「これは……」

「そう。お主の思っておるとおりじゃ」

ゼルスが呟くと、クラウロンは顔をクシャツとさせて笑う。クラニカは紙を眺めながら口笛を吹き、

「親切にどうも。私たちの手間も省けるわ」

と、礼を述べる。

「葉だけでいい。十枚ずつ頼む」

クラウロンの頼みに、クラニカは受け取った三枚の紙をヒラヒラとさせながら、

「了解。こんな良いガイドがあるんだからすぐ採ってくるわ。行くわよ、ゼルス」

意気揚々とクラウロンの店の出口である無骨な鉄製の扉へ向かう。ゼルスはクラウロンにお礼を言おうと思い、クラニカについて行きながらクラウロンをチラチラと見てチャンスを窺うが、なかなかお礼の言葉が発せない。

クラウロンはそんなゼルスに気づき、ニコリと微笑みながら頷く。

すると、

「ありがとうございます」

クラウロンが優しく頷いてくれた瞬間、ゼルスは自分でも驚くほどすんなりと言葉が口からついて出た。

思わず手で口を覆ってしまったゼルスは、クラウロンに軽く礼をし、外へ出て行った。

ゼルスが出て行ったのを見届けたクラウロンの瞳には、哀しみの色が見えた。

クラウロンはため息をつく。

「そうか……あの子が……助けになればいいが……」

意味深に呟いたクラウロンの言葉は、やけに響いた。

大通りで待っていたクラニカにゼルスが追いつくと、クラニカはくるっとゼルス方を振り向くと、

「さあ、問題です。今から何をしなくちゃいけないでしょうか」

人差し指をたてながら、ニコニコと問う。

開口一番にそんなことを言いだしたクラニカにゼルスは、内心、なにいつてんの？と思いつながら、

「いや……依頼じゃねーの？」

これしかないだろうとクラニカに言うが、クラニカは狙いどおりと言わんばかりにニヤツと笑い、次に芝居がかった呆れ顔を作る。

「甘いわね、私たちは何の依頼に行くの？」

「薬草採取………だろ？」

あまりに自信満々に言うクラニカに圧され、自信がなくなっていくゼルス。

「そう！採取！！それで、採取した薬草はどうするの？」

「手で持つて

」

「合計で三十枚になるのよ？それ持ってモンスターと戦える？傷つけたりしたらダメなのよ？」

クラニカは言う間にゼルスに迫り、指でゼルスの胸をつんつんと

突く。

ゼルスは突かれるたびに度に残るに行き、トン、という音に気付けば、いつの間にか壁まで追いやられていた。

「そ、それは……」と詰まり弱気になっているゼルスを見て、クラニカは獲物を狙う豹のように目を爛々と光らせる。

しかし、クラニカは次の瞬間目を柔らかくさせ、優しく囁く。

「だから、採取の依頼は、絶対箱か、何か入れるものが必要なの。まずはその準備ね」

「あ……はい」

結局、最後までクラニカに圧されっぱなしのゼルスであった。

ゼルスとクラニカはバージリン森林の入口に居た。
緩やかな風が木々や草花を優しく揺らし、ざわざわと音をたてている。

二人の他にも、チラホラと冒険者らしい人の姿が見える。
恐らくこの人たちも何かの依頼でバージリン森林を訪れているの
だろう。

二人は先刻と違い、三十センチ程の太めの筒を身に付けていた。
この筒は薬草採取等によく使用され、”グレーニヒ”と呼ばれる。
クラニカは元々持っていた魔法で付加されている、いわゆる上級の
魔法具のグレーニヒを、ゼルスは何の魔法の付加もないが、下級の
それよりはそこそ丈夫なグレーニヒを所持していた。

本来、闇の口という反則的な魔法が使えるゼルスには無用なもの
だが、事情を知らない人（今回でいえばクラニカ）が居る時は、闇
の口は使いくとも使えない。

「これで百ルカあ。……後でまとめて返すよ」

昨日買ってもらったものを足したら幾らになるんだろう。と、ゼ
ルスはクラニカに頭が上がない

（そつえば家賃も食費も払わないとな）

「気にしないでいいわ」

「えっ、でも」

クラニカは言い返そうとするゼルスを手で押さえる。

「ゼルス。私たちはもう家族よ。それに、感謝してるのは私の方な
んだから、そのお礼ってことで」

「俺、クラニカに何もしてないんだけど。ってか、してもらってば
かりっていうか」

釈然としないゼルスは、不思議そうに言うが、対するクラニカは
優しく笑む。

「レイヴェルのことよ」

「レイヴェル？」

クラニカは「ええ」と頷くと、

「あの娘が私以外の人とあんな風に笑うの、初めて見たわ。しかも、
その相手が女じゃなくて、トラウマ持つてる男。私本当にびっくり
したのよ。家に一緒に住ませたい人がいるって真っ赤な顔で言われ
て、リビングに行ったら男の貴方がいるんだもの。 本当、ゼ
ルスには感謝しても仕切れないわ」

ゼルスは照れ隠しにはにかむ。

「いや、俺は何もしてないよ。寧ろ俺の方が感謝しても仕切れない。こんなに怪しい俺を無条件で家族って呼んでくれたんだから。だから、貸し借りなんてなし。お金はちゃんと返すよ」

実際、ゼルスは最初からレイヴェルと普通に話せていたわけだし、クラニカが感謝しているその点については、ゼルスにとって何故感謝されるか分からない。

クラニカは口角を上げると森の方を向き、

「じゃあお言葉に甘えて、貰うことにするわ。……さあ、そろそろ森に入るわよ」

バージリン森林に入ってから数十分。

二人は道なき道を歩いていた。

至るところに根がはり巡っており、ボコリと地面から顔を出している。

ゼルスは初めて見る巨木や植物に興味津々で、数十分経った今でも目を輝かせている。

しかし、いきなり輝いていた目を鋭く細ませ、森の奥を見据える。

（……奥に何体かいるな。三、かな）

ゼルスは隣を歩くクラニカをチラリと覗き見る。

「ん？」

「なんでもない」

目をクリッとさせてゼルスを窺うクラニカを見て、ゼルスは首を

横に振る。

（クラニカは気づいてないみたいだし、奥にいるやつも雑魚っぽいから……ほっとくか）

無視することにしたゼルスは依頼の薬草を探そうとしたが、クラニカがそれを妨げた。

「ゼルス。どうやらお客さんのようよ」

ニヤリと口角をあげるクラニカに、ゼルスは気付いたか。と思いつつも、何も知らないよう返事をする。

「え？何が？」

クラニカはクスツと意味深に笑う。

「モンスターよ。ここはお手本というか、力量見せるために私が相手するわ」

クラニカが少し開けた場所に移動すると、同時に小柄な猿が現れた。

ゼルスの予想どおり、その数は三体。
ゲッ、ゲッ、と声を出し、クラニカを威嚇している。

「エテラテ。Eランクの雑魚中の雑魚よ。普通の猿より凶暴なだけで、Cランクと戦ったことあるゼルスなら、こんなの楽勝ね」

クラニカが「強化・雷」と呟くと、クラニカの体から少しだけ魔力が放出され、電気がパチパチと体に纏う。

明らかに戦闘態勢に入ったクラニカ。

クラニカの纏う雰囲気の変化に気付いたのだろうか、二体のエテラテがほぼ同時に飛び上がり、鋭い爪でクラニカの顔を引き裂こうとする。

が、爪が顔を引き裂く前に、クラニカは行動を起こした。

一瞬で両の拳を二体のエテラテの腹に叩きこみ、二体のエテラテを吹き飛ばす。

メリッ。と普通のパンチでは出ない音と共に吹っ飛んだ二体のエテラテは、少し離れたところにある木に激突し、動かなくなった。

残った最後のエテラテは、今吹っ飛ばされた仲間の事を露にも気に掛けず、怯まずに先ほどの仲間と同じように飛び上がって攻撃を仕掛けてきた。

クラニカは冷静に対応し、先ほどと同じく、今度は右の拳で吹き飛ばす。

「ほらね。すつこい弱いでしょ。知能も皆無で、攻撃パターンも飛び上がって顔狙うくらい。こいつを楽々倒せないと冒険者は務まらないわ。……私の力量もエテラテ程度じゃあ分らないけど、まあ今のが冒険者でいうとCランク位ね。そういえば、ゼルスってどんな戦い方するの？」

エテラテを軽く捻ったクラニカは、どこか不満そうな顔をしている。

「俺は体術で強化魔法と自然魔法を使って戦うよ」

ゼルスはクラニカの疑問に、ついにきたか。と身を引き締まり、話にぼろが出ないよう注意する。

自分が特異だと思わせてはいけない。ゼルスは肝に命じた。

「へえ、体術か。珍しいわね。……本当はもっと聞きたいけど、後は実践でのお楽しみってことにしておくわ。次のモンスターはお願いね」

（今のがCランク。ということは、あれ程度の強化魔法ならいってことか。……手加減、出来るか？）

ゼルスは追及してこなかったクラニカに安心しながらも、予想以上にCランクが弱かったことに、改めて手加減の難しさを痛感した。いま、おそらくクラニカはゼルスの事をCランクだと思っているだろう。

ゼルスはそのクラニカが思っていると通りのレベルに力を加減しなければならない。

彼女はゼルスの秘密を知っても、絶対に国には報告せず、むしろ、

国にばれないよう協力してくれるだろう。

しかし、それではゼルス秘密がばれた時、彼女までもが国から処罰の対象になってしまう。

すでにレイヴェル、アルリノ、カルマが処罰の対象となり、ゼルスは心を痛めている。

それに追加してクラニカまでが処刑の対象になるのが、ゼルスには我慢ならないのだ。

「ああ、次のモンスターは任せてくれ。それにしても、薬草が全然見つからないな」

「まあそんな簡単には見つからないわよ。それに今回の三つの薬草は、一か所に固まってることが多いから」

二人はクラウロンから貰った紙を見ながら歩き始める。

「一か所？あ、ホントだ。書いてある。でも、なんで一か所にあんの？」

「私も詳しい事はわかんないんだけど、確かこの植物たちは同じ所で育つ方がいいらしいの。バラバラに育つよりも、何倍も早く成長するし、長生きするんだって」

へー。と感心するゼルスだが、急に違和感を感じる。

（なんだ？何かおかしい感じが……。あっちの方向か？）

ゼルスが立ち止まり、違和感を感じる方向を向いてみるが、何の変哲もない、普段どおりの森があるだけ。

「ゼルス、どうしたの？」

「いや、なんかこっちの方になにかある気がして……。行ってみていい？」

ゼルスはクラニカに窺う。

「いいわよ。そんな勘って、結構重要よ。私も昔」

ゼルスはクラニカの了承をもらうと、クラニカがまだ話しているのにも関わらず、強化魔法を使って違和感を感じる方向に走って行った。

「ちよっ……。強化魔法まで使って、どんだけよ！」

クラニカも強化魔法を使い、急いでゼルスを追いかける。

実はゼルス自身も何故自分がこんなに急いでいるか分からなかった。

クラニカがいる前なのに魔法言語も唱えず、強化魔法も使い、さらにいつもの強化魔法より手加減しているとはいえ、Aランクのモンスターと渡り合えるくらいの強化魔法を使っている。

頭ではしてはいけないと分かっているのだが、なぜか体が勝手に動く。

（なんだよ。訳わかんねえ……！）

ゼルスの感じる違和感がどんどん強くなってくる。

おそらく何かに近づいているんだろう。

ゼルスの前方にそそり立つ岩壁が見えてきた。

ゼルスは行き止まりかと思い止ろうとするが、頭に反して体は岩壁に向かって直進している。

ぶつかる！と思い、神霊魔法で岩壁を破壊しようかと思ったが、なんの衝撃もなく岩壁をすり抜けた。

蔓で隠れて見えなかっただけで、隠された道があったようだ。

岩壁の中を通りすぎると、その先には綺麗な花畑と湖があった。この場所は四方を岩壁に囲まれており、花と湖だけでなく、様々な植物が生息していた。

「ちょっと、速すぎよゼルス。……って、なにここ！？」

ゼルスより少し遅れてクラニカが現れた。

辺りに生えている花や植物を注意深く観察している。

「多分ここに違和感感じたんだと思うんだけど、着いたら何も感じなくなっただ。ここに探してる植物あるかな？」

クラニカは植物を観察しながら、ゼルスの問いに答える。

「あるって……ゼルス、あんた凄いトコ発見したわね」

クラニカの言葉にゼルスは首をかしげる。

「……多分ここ、バージリン森林に生息してる全ての植物が揃ってるわ。こんなトコがバージリン森林に合ったなんて……」

クラニカは顔を驚愕の色に染め、周辺を歩き出す。ゼルスはクラニカに近寄る。

「これ、一月に一度しか花が咲かない”ラベリーヒュン”じゃない！何で全部咲いてるの！？あっちにあるのは芽すら滅多に生えない”モースリイ”？あんなに生えてるの初めて見た……」

クラニカが周りの植物を見て興奮している時、ゼルスは依頼の薬草らしきものを見付けた。

確かに三つとも同じ所に生えている。

「クラニカ。依頼の薬草取っていい？」

ゼルスがクラニカに聞くと、クラニカは恥ずかしそうにゴホンと咳をつく。

「あー、ごめん。興奮し過ぎてたわ。葉の部分は欠けないようにお願いね」

二人で薬草の採取を開始すると、五分足らずで終わった。

薬草をグレーニヒに入れ終わると、二人は依頼の薬草で合っているか確認しながら、湖の淵に座っていた。

「それにしても、こんな場所があったなんてね……」

「……この場所って、そんなに凄い？」

クラニカは大袈裟な振る舞いで、

「すごすぎるわ。例えば、あそこにある長い植物と、その横にある黄色い花だけど。アレ、片方は湿気を多く含むトコでしか育たないし、もう片方は乾燥してるトコにしか育たないの。そんな正反対の環境で育つ植物が、同じ場所で育つなんて、普通だったらあり得ないわ」

ゼルスは足で湖の水面をツンとつつく。波紋がゆらゆらと揺らいだ。

「そんなに凄い場所だったら、なんで皆がここに来ないのかな」

「みんな、この場所自体知らないと思うわ。私もゼルスが見つけるまで知らなかったし。もしこの場所が知れ渡ったら、ここ一面が

「一気に寂しくなるでしょうね」

クラニカは満開の花畑と、様々な種の植物を見渡す。
ゼルスは怖々クラニカを見る。

「クラニカ……言うのか？」

クラニカは微少しながら首を横に振る。

「安心して、言わないわ。私だって、こんな綺麗な場所が無くなるのは嫌なもの。この場所は、私とゼルスだけの秘密の場所ね」

クラニカは立ち上がると、

「さあてと、薬草手に入れたことだし、クラウロンさんの所に戻るわよ」

ゼルスは名残惜しそうに、

「……まだ居ちゃ駄目？」

「ダメ。依頼最優先よ。今度依頼じゃない時に来なさい」

諦めがついたゼルスは、クラニカとともに元来た道を進んでいる。

（また今度、来てみるか。……結局、あの違和感って何だったんだ？ 何かに呼ばれたような気が……）

地面から飛び出た樹の根っこを跨いでいると、ゼルスはあることを思い出した。

（あつ！ あそこに行くとき、俺あんまり手加減出来てなかった……。あの強化魔法だったら、モンスターランクでいうとA位と戦えるから……冒険者ランクもAってことになるの？ やっべえ〜）

そこに、見計らったようにクラニカが口を開いた。

「そういえば、結局モンスター出なかったわね」

「そつ、そつだな！」

「……ゼルスって、強化魔法が主体？」

「あ、ああ」

しどろもどろに答えるゼルスは、心臓が爆発寸前だ。冷や汗の量がすごい。

クラニカは少しの間ゼルスをじっと見詰めて

「そうなの」

と、やけにあっさりした様子で会話を終わらせた。ゼルスはホッと一息ついたが、どこか不安な気持ちでクラニカの横を歩いていた。

「おお！二人共早かったの！」

クラニカとゼルスがクラウロンの店に入ると、店主であるクラウロンが出迎えてくれた。

クラニカは調子良く、

「あつたりまえでしょ！何たって私たちなんだから。て言っても、今回はゼルスのお蔭なんだけどね」

と、依頼の薬草を渡す。クラウロンは「ほう」と感心した様子でゼルスを見る。

少し気恥ずかしくなったゼルスは、「いや……」と照れ笑いする。

「うむ。確かに依頼した薬草じゃ。しかし……」

「え？何か問題あった？」

唸るクラウロンに、心配になったクラニカが声をあげる。声をあげてはいないが、ゼルスも不安そうにクラウロンを見る。

「いやいや。何の問題もない。寧ろ逆じゃ。お主らが取ってきた薬草がやけに良い状態　いや、良すぎるんだな。一体何処で採ったのか不思議に思ってたの」

「ああ、もうびっくりさせないでよ。採った場所は、秘密って事で」

クラニカはウィンクした。

「ハッハッハ。まあ良いがの。お蔭で良い仕事が出来そうじゃ」

クラウロンは豪快に笑うと、カウンターに置いていたコインをゼルスに渡した。

「これは……？」

「依頼が達成したっていう証。後はこれを協会に持っていけば依頼は終了よ」

クラウロンの代わりにクラニカが答えた。

「その通りじゃ。さて、今回はありがとう。儂は今から調合に入るから、またな」

クラウロンはカウンターの奥に消えていった。

不思議なお爺さんだなー。ゼルスがそう思っていると、

「協会に行くわよ。……それと、この後ちょっと付き合って」

クラニカが出口に向かって歩いていく。

ゼルスはいつもと違い顔を合わせないクラニカを不思議に思いながら、後を追った。

冒険者協会に無事依頼達成を報告出来たゼルスは、バージリン森林に入って数分の所にある、広場のような場所に立っていた。

クラニカはここには居らず、居るのはゼルスただ一人だ。

「待たせたわね」

ガサガサという音とともに現れたのは、クラニカだった。先ほどと違うのは、二つの刀を腰に差していることだ。

「いや、良いんだけど……何すんの？」

実はゼルス、冒険者協会に報告が終えてから直ぐ、クラニカにバ

「ジリン森林のこの場所で待っているよう言われたただけなのだ。
クラニカは真剣な表情で、

「闘いよ」

と言い、鋭い音と共に双刀を抜く。
キィイン。と、残響がする。

「え？ いや、いきなり何で？」

「何でって、ゼルスモンスターと戦えなかったでしょ。力量が分からないじゃない
行くわよ」

突然、クラニカが迫り、右の刀でゼルスに斬りかかる！
難なく後ろに下がり回避したゼルスだが、クラニカは次々と追撃してくる。

クラニカの舞のように美しい攻撃をかわすゼルスは、必死に脳をフル回転させていた。

（どうする！ 避けるのは簡単だけど、俺が特別強いと思わせちゃいけない。っていうか、いきなりすぎるだろ！ 絶対怪しまれてるな……
…こっとなったら）

クラニカの左の刀の突きを大袈裟にかわしたゼルスは、わざとバ

ランスを崩し、尻餅をつく。

当然クラニカはその隙を見逃さず、クラニカはゆっくりと、左の刀をゼルスの首筋に添えた。

ゼルスは、わざと負けることを選んだ。今負ければ、クラニカも自分の事を強いと思うこともないだろうと考えたのだ。

しかし、そのゼルスのひどく浅い策をとることは間違いだったと、ゼルスはこの後思い知ることになる。

「いやゝ、クラニカ強いなあ。もう俺無理」

ゼルスが言い切る前に、ビュツ。という風を裂くような音がした。クラニカがゼルスの頭目掛け、右の刀で凄まじい突きを放つ。ゼルスは反射的に、それを左に避けた。

「……クラニカ、洒落になんねーよ」

ゼルスがポツリと漏らすと、

「ゼルスが本気出さないから」

と、クラニカ。

「いや、これが俺の本気……」

「嘘、ね。Aランク並みの強化魔法使えて、その身のこなし。

しかも、強化魔法はまだ手加減してたっぽい。それに、その眼。はつきり言うけど、Cランクと戦った程度じゃあ、そんな眼は出来ないわ。ゼルス、貴方って何者？」

（強化魔法で怪しまれた。っていうより、クラニカには最初から隠しきれてなかったのか……。どうするか）

何も言わないゼルスを見ると、クラニカは続けて言う。

「ゼルスが訳ありってことは、分かってるわ。どうせ、ゼルスの訳ありが私にバレると、私に迷惑かけると思って貴方とレイヴェルは黙ってるんでしょ？」

ゼルスは驚いて顔をあげる。

「そんな驚いた顔しなくても、自分の娘の考え位分かるわよ。それに、あの娘が好いてるんだから 例え貴方が犯罪者でも、悪い人ではないってのも分かるわ。だから、私に全て話してちょうだい。私はゼルスの口から聞きたいの。……それに、真実聞かないと、私

余計なこと言っちゃうかもしれないわよ?」

やけに輝かしい表情で言うクラニカに、ゼルスはもう降参といった感じで

「……分かった。全部話すよ」

ゼルスから全てを聞いたクラニカは、その内容に驚きはしたものの、ゼルスの味方でいてくれた。

「そんな内容だったなんてね……」

流石にクラニカも想定外の答えだったようだ。

「ま、これで私もゼルスをどう扱えばいいか分かったし、我が家からゼルスの秘密が漏れる事はなくなったわね」

「……ごめん。クラニカ」

ゼルスは申し訳なさそうに俯く。ゼルスの秘密がバレたとき、クラニカも処罰の対象になってしまったからだ。

「謝ることないわよ。私たち、家族でしょ！」

その言葉で元気が出たゼルスは、疑問に思っていた事を口にする。

「ありがとう。……ちょっと思ってたんだけど、別に俺と闘う必要なかったんじゃない？」

「ああ。それとこれとは別。私が単にゼルスの力量知りたかっただけよ。まあ、本気出さないって分かってたけど、もしかしたら。っと思ってね。闘うのはもういいわ。話聞く限り、私じゃ相手にならないし、大体の闘い方も分かったし」

ゼルスは「そっか」と言うと、空を見上げる。いつの間にか、陽が傾いていた。

「あつ、早く帰らないと。レイヴェルが心配してるわ」

（……私がゼルスに手を出してないか、ね）

クラニカは心で付け足した。

「そうだな。早く帰ろう。……レイヴェルに俺の事話したって言わないとな。……怒られるかな」

「その時は、私も一緒に怒られてあげるわ」

クラニカは面白そうに笑い、ゼルスを勇気づけるよう手を握った。ゼルスは驚きながらも握り返した。

帰路につく二人の間の距離は、今日の朝より、心も体も、随分近付いたようだ。

十二話 クラウロンの依頼 ? (後書き)

一週間遅れごめんなさい。

もう次回の更新日時は書かないことにしました。
ちょっと予定通りに出来なくなりそうなので。

2010・11・21 (sun)

十三話 秘密の場所

ゼルスの初依頼から一週間が経過した。そして、レイヴェル達の謹慎処分も今日で最後だ。

今日のレイヴェルはご機嫌だった。いつもはクラニカとゼルスと一緒に依頼を受けに行くと、必ず不機嫌になっていたのだ。

しかも、クラニカはそんなレイヴェルの反応が楽しいようで、帰宅するときは絶対にゼルスと手やら腕やらを掴み、わざとレイヴェルを不機嫌にしていた。

クラニカとしては、嫉妬するレイヴェルを見るのが嬉しくてしているのだが、そんなことを知らないレイヴェルは誰にも言えないまま、真剣に悩んでいた。

しかし、今日限りでそんな悩みとはおさらばだ。

ゼルスが今日から一人で依頼を受けるからだ。ゼルスは少し緊張していたが、自分一人でどれ位依頼がこなせるか、楽しみでいた。

掲示板に貼ってある依頼書を眺める。

ゼルスは今、冒険者協会に居る。眺めている依頼書は初依頼と同じく、薬草採取の依頼だった。ゼルスはこの薬草採取の依頼を受けるつもりだ。

実はゼルス、初依頼の時に発見したあの場所にまだ行ってなかったのだ。結局あの時感じた違和感がなかったか、分からないままだ。だが、今回の依頼で再びあのゼルスとクラニカの秘密の場所に行けば、違和感が何か分かるような気がした。

ゼルスはこの一週間、クラニカと共に依頼を受けるのに明け暮れた。モンスター退治・捕縛、商人の護衛、武器屋の店番、薬草の調合の手伝いなど、様々だ。

依頼の内容が似たようなのは一つも受けなかった。だがゼルスはそのおかげで大抵の依頼の基本はすべておさえた。後は自分で考え、工夫するだけだ。

ゼルスは掲示板から依頼書をはがし、依頼専門の受付へと向かう。

「こんにちわ。お名前は？」

「ゼルスです。……って、知ってますよね？ クリスさん」

ゼルスははぎ取った依頼書を渡しながら苦笑いを浮かべる。

というのも、彼女とは毎日このように言葉を交わしているからだ。

「規則ですから」

クリスはニツコリと笑う。

艶やかな黒髪を持つ彼女は、なぜかゼルスの面倒をよく見てくれる。

この一週間、ゼルスはクラニカ、レイヴェルに加えて、このクリスから良く助けてもらった。

「今回は薬草採取の依頼をお一人で受けますか？」

女性は”一人”という部分を強調して聞く。

彼女から見ればゼルスは可愛い弟みたいなもの。彼女の目つきが厳しいのも、ゼルスを心配しているからだ。

「はい」

「依頼主の確認をとってから依頼を遂行してください。では、健闘を祈ります」

ゼルスは頭を深々と下げるクリスに返事をして背を向けると、冒険者協会を出ていった。

ゼルスは依頼主に会いに行く。大通りではなく路地裏に構えている不思議な店の店主、クラウロンだ。

ジメジメとした路地を通り、店の入り口である無骨な鉄製の扉を開く。

初めて来たときと変わらず、路地裏にある店とは思えないくらい随分と綺麗な内装だ。オレンジの光が店内を明るくしている。

「クラウロンさん！依頼を受けに来ました！」

カウンターの奥に向かって言う。返事はすぐに返ってきた。

「おお！ゼルスか！ちょっと待っとなれ！」

三十秒ほど経つと、クラウロンがカウンターの奥から現れた。くたびれた茶色のローブを着ているが、みすばらしく見えないのが不思議だ。

「クラウロンさん。Dランクの薬草採取の依頼を受けます」

とゼルスが依頼書と冒険者カードを示しながら言う。

「そうかそうか。お主ならまた上質の薬草を採ってきてくれるじゃろう。これが依頼の薬草じゃ。頼むぞ」

ゼルスはドキツとしながら、薬草に関して詳しく書かれた紙を受け取る。クラウロンが、ゼルスが秘密の場所を発見した事を知っているような気がしたからだ。

ゼルスはクラウロンの店を出ると、街を出て、クレスキャン平原を横断し、北西にあるバーズリン森林に向かう。森の入り口に立つと、ゼルスは変化を感じ取った。

再び違和感が生じたのだ。

(……っ。またか。……今度こそ突き止めてやる)

周りに人がいない事を確認すると、手加減なしの強化魔法で秘密の場所に向かう。もう自分でも抑えることは出来ず、ゼルスはまるで台風のように草木を揺らし、木の枝だけでなく弱い木を次々と地面に落としていた。

秘密の場所に近づく度に違和感が大きくなる。

岩壁の亀裂の間を通り、秘密の場所に立つ。一週間前と変わらずに美しい場所だ。

綺麗な色とりどりの花が集まった花畑に蝶蝶が舞い、草木はゼルスを迎えるように穏やかに揺れている。その花畑や草木に囲まれるように存在している、綺麗な澄んだ湖は、心なしかキラキラ輝いているように見える。

ゼルスが違和感の正体を探しに湖の前に立つと、おかしい事に気がついた。比喻ではなく、本当に湖が輝いている。湖から発する青い光は、ゼルスが驚いて呆けている間も輝きを増す。まるでゼルスを呼んでいるようだ。

ゴクリと喉を鳴らし、導かれるように湖に飛び込む。初めて入る湖の中でおそろおそろ眼を開くと、湖底までしっかり見えた。五メートル下の湖底に、輝きを放つ丸い物体がある。眩しく思わない事に疑問を感じたが、物体に向かう。だが、上手く泳げず、なかなか下に潜れない。魔法を使うことにしたゼルスは、神霊魔法でゼルスから物体まで水の流れを作り、一気に進む。

（これが……）

目の前にある青く輝く丸い物体を掴み顔に近づけると、物体の輝きが増し、光がゼルスを包み込む。ゼルスが浮遊感を感じ、思わず閉じてしまった瞼を開くと

「……へ？」

ゼルスの眼前に、古風で荘厳な屋敷がどっしりと構えていた。

間拔けな声を出したゼルスは、周囲の様子をうかがう。前方には屋敷、後方にはこの屋敷の敷地の入り口と思われる大きな門がある。ゼルスの右と左には、同じような小さな塔がそれぞれある。

さっきまでいた湖の中ではない。屋敷を囲う堀の上からのぞく木々にバージリン森林特有のものがあつたから、おそらくバージリン森林の中ではあると思われる。

ゼルスは手に持つ丸い水晶を呆然と見る。おそらく、湖底にあつた光輝く物体の正体だろう。これが、ゼルスの感じた違和感の正体で、状況から判断するに、ゼルスをこの屋敷に移動させた原因だ。

ゼルスは濡れていた服と髪を魔法で熱風をおこし乾かすと、荘厳な屋敷を見上げる。

（多分、この水晶に召喚魔法がかけられてたんだろ。それにしても、ここおかしいだろ）

ゼルスの思うとおり、この場所は色々とおかしい。魔法の気配が強すぎるのだ。至るところ所から強力な魔法の気配を感じる。

これ程の量、しかも上級の魔法を施した人は誰なのか。ゼルスは屋敷の主に興味がわいた。

屋敷に入ろうと足を進めると、門扉の両横に置いてある長身の二体の石像に眼がいく。

屈強な体つきをした悪魔のようだ。悪趣味だな。とっていると、その悪魔の石像の眼が紅く妖しく光り、ゼルスは反射的に悪魔の石像と距離をとる。

強化魔法をかけ、身構えるゼルス。二体の悪魔の石像は、命が宿ったようにおもむろに動き出す。

「はっ。なんだよここ」

ゼルスは手に持った水晶を横にポイツと投げると、先手必勝と言わんばかり。ゼルスは地をけり瞬時に悪魔の後ろに回り、その勢いのまま頭部に蹴りを叩き込む。悪魔は凄く速さで堀にぶつかるが、直ぐに起き上がって魔力をこめだした。ゼルスはダメージをくらった様子がない悪魔にショックを受ける暇もなく、もう一体の悪魔の対応をしていた。

悪魔が繰り出す拳をいなしながらゼルスも拳を悪魔の腹部や喉に繰り出すが、元が石像のせい、全く堪えない。ゼルスが悪魔と距離をとると同時に、最初に吹き飛ばした悪魔の魔法が発動した。

悪魔の口から膨大な炎の光線が放出される。

「氷よ！」

ゼルスも特大の氷を出現させて攻撃する。お互い拮抗して一步も譲らずにいたが、ここでもう一体の悪魔が行動に出た。勢いよくゼルスに殴りかかる！

ゼルスはもろに顔面にくらい地面に倒れる。そこに容赦ない灼熱の炎が、ゼルスに襲い掛かる。

（やべえっ！）

ゼルスが眼を見張る間にも、炎は迫り、あっという間に地を焦土と化した。地には炎が通った跡がくつきりと残り、ゼルスがいた場所は、小さいが、ポツポツとマグマが出来ていた。

もうそこにはゼルスはいない。

二体の悪魔はゼルスがいない事が分かると、満足げに咆哮をあげた。

それに応えるように、投げ捨てられた水晶が、寂しげに、キラリと光った。

十三話 秘密の場所（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

更新日時 2010・12・5（sun）

十四話 屋敷の守護者

場面は変わり、ある宿屋の一室。

ベッドの上で、自慢であろう綺麗な金髪をかきむしりながら、男が呻いていた。

「うるさい」

そう言うのは、ベッドの横に立つ長身の男だ。銀色の長髪が目立つ。

金髪の男は銀髪の男を鋭く睨み付けるが、銀髪の男は涼しい顔でスルーしている。

そこに、自分の顔とサイズが合っていないブカブカな眼鏡をかけた、学者風の男が仲介にはいる。

「もう止めなよ。今回はしょうがない。あんなのがいたんだから……。寧ろ、今生きてること自体奇跡だよ」

「ルーカーの言うとおり。パピルニッカーはもう少し頭を冷ますべき。今回は私たちが敵う相手じゃなかった」

緑のローブを着て、顔をフードですっぽり覆ったミステリアスな女性が学者風の男に同意した。

金髪の男は苛立ったように舌打ちをし、やるせなく息を吐く。

ヴィゴリーレから南に、馬車で揺られて五日かかる距離にある街、

ルカンモリスの宿屋の一室に、ニンファールの一面が集まっていた。

クラニカから勧誘を断れたロデオ・パピルニツカーは、Aランクのモンスター退治の依頼を受けにルカンモリスに来ていた。勿論、ニンファールとして受けていたので、チームのメンバーと共にだ。

ルカンモリスの遺跡に突如出現した、正体不明のモンスターを殺す事が依頼であった。

「辞退するしかないな」

ドリラス・インフィアの言葉に、チームリーダーであるロデオ・パピルニツカーが噛みつく。

「辞退！？ニンファールに傷がつくじゃないか！」

「仕方ないよ。今の僕たちじゃ、あのガーディアンには敵わないよ。あれは多分、マロノスガーディアンだ」

憤慨するロデオを抑えるように、チームメンバーであり、元学者であるウェンデイルス・ルーカーは言う。

ロデオが仏頂面で「マロノスガーディアン？」と呟くと、ウェンデイルスは説明する。

「マロノスガーディアンっていうのは、古代に生きていた大錬金術師であるマロノスが造ったガーディアンのこと。今より遥かに魔法技術が進んでいた古代でも、マロノスの実力はずば抜けてすごかつたらしいよ。なんでも、マロノスガーディアンが十体いたら、一つの大国を滅ぼせるって言われてた位だからね」

「たとえば！それ位強くてモ！たかがその内の一体じゃないか！」

それを聞いても納得のいかないロデオは、ベッドから立ち上がり、荒々しくウエンデイルスに詰め寄る。

「ひいっ」と怯えるウエンデイルスを、チームメンバーで唯一の女性であるシア・ゴルヴェックスが無言でかばうと、ロデオは三人を見渡す。

「……俺は今からでもそのマロノスガーディアンとやらを倒しに行く。着いてこい」

その問いに、チームメンバーはみな、沈黙で返す。
無言の拒否。それは当たり前だ。いや、最善だと言ってもいい。

今回の依頼は、あるモンスターを退治する予定だったBランク冒険者が今回ニンファールが敗れたガーディアンに偶然遭遇し、大怪我を負わされ、後に死亡したことで冒険者協会から出された依頼だ。故に、冒険者協会は、遭遇した本人が死亡したということで、ガーディアンを詳細まで把握出来なかった。

しかし、今回ニンファールが生きて敗れたおかげで、分からなかったガーディアンの戦法など、多くの情報が分かった。

ここは、冒険者協会に依頼を放棄することを申し立て、ガーディアンの危険性を知らせる事が先決だ。
達成できない依頼を放棄することも、冒険者の大事な仕事の一つだ。

ロデオはその事を全て分かっているはずなのに、拒否されたと分かると、ロデオは部屋の出口に向かう。
だが、外に出ることはできなかった。

「退け」

冷淡なロデオの目の前には、ドアの前に陣取り、こちらを見下ろすドリラス・インフィアの姿があった。

「それは無理だ。お前を死なすわけにはいかん」

「いいからさっさとそこを」

「今のお前、ニーファが見たらなんて言うかな」

声を荒げていたロデオは、目を見開き、ドリラスの胸倉を掴む。

「てめえッ！」

「あいつの言葉を、忘れたのか？」

ドリラスは言い放つと、胸倉からロデオの手を離し、部屋を出ていった。

茫然とするロデオは、声を荒げた時とは対極に、弱弱しくふらつきながらベッドに座り込んだ。

ウェンディルスとシアは、別人のように大人しくなったロデオを怪訝に思う。

二人が顔を見合わせていると（シアの顔はフードで見えないが）、

「一人にしてくれないか」

ロデオが一言、今にも消え入りそうな声で呟いた。
言うとおりに二人が部屋から出て行くと、ロデオはベッドに倒れ

込む。

「ニンファール……！」

部屋の中に、ロデオの声が哀しく響く。ロデオは流れる涙を隠すように、瞳を手で覆った。

最初に部屋を出たドリラスは、隣の部屋で弓の手入れを始める。そこに、ウエンディルスとシアがやってきた。

「今さっきの、なに？」

シアが聞くが、ドリラスは沈黙で答える。

「秘密……ということ？」

「そうだ。すまないが、こればかりはな」

「いいわ。誰にでも秘密はあるもの」

ウエンディルスは学者の性分なのか、知りたくてうずうずしているようだ。シアは本当に気にしていないようだ。

「……すまない」

ドリラスが顔を辛そうに歪めて謝ると、部屋に気まずい沈黙が流れる。その気まずい沈黙を破るため、ウエンディルスが口を開いた。「……でもさ！ほんつとうにロデオがマロノスガーディアンの所行かなくて良かったよ。だって、十体で国一つ滅ぼせるんだよ！？そんなのにロデオが勝てるわけないよ」

ウエンディルスが「よかったよかった」と言っていると、シアが淡々と言う。

「その話なんだけど、あれ、マロノスガーディアンじゃない」

新事実に仰天し、「へっ？」と間抜けな声しか出ないウエンディルスを尻目に、シアは続ける。

「私は以前、一度だけマロノスガーディアンと戦ったことがある。今日のあれよりも強かった。何より、あの左胸の紋章が違う」

「シア……お前、戦ったことあるのか？しかも、アレより強い奴と？」

ドリラスは、弓の手入れを止め息をのむ。

シアはいつも通りの声色で肯定した。

「ええ」

「ちよっ、ちよっと待って。でもあの左胸の紋章はマロノスの家紋で間違いないよ。前に見たのと全く一緒だった」

ウェンディルスが大きすぎる眼鏡をかけ直す。
彼が焦っている時や、知りたくてうずうずしている時の癖だ。

「ええ。確かにあの紋章はマロノスの家紋。でも、その事がマロノスガーディアンではない事を証明している」

シアの話を聞いて、疑問を浮かべるドリラスとウェンディルス。
その様子を見て、シアは続きを話す。

「マロノスは自分の作品に、決して家紋をつけなかった。理由は定かではないけど、これは真実。私が以前戦った奴には、”？”の番号が肩につけられてただけ」

「とすると、俺らが戦ったのは、マロノスガーディアンとは全くの別物ってことか？」

「いえ、全く、ではない」

シアは否定の言葉を発した。

「どういう事？マロノスの家紋がマロノスの作品につけられてないって　あ。そうか。そういうことか……」

「ウェン、シア。どういう事なんだ？」

ウェンディルスは理解出来たようだが、ドリラスにはどういう事なのかさっぱり分からない。

「僕が答えるよ。まだ僕自身疑問はあるけど、多分、ドリラスの疑

問には答えられると思う。　僕達が戦ったあいつは、マロノスの一族が創ったガーディアンなんだよ。だから、あれは全くマロノスガーディアンと関係ないわけじゃない！マロノスの家の紋章だから、マロノスの一族も使ってもおかしくないんだよ」

ウエンが「どう？シア！」と、キラキラ瞳を光らせながら、シアを見る。

「ウエンの言うとおり。あのガーディアンは、マロノスの一族が創ったもので、左胸の紋章も、マロノスの一族であるイノーセクト家の家紋よ」

始めは自分の考えが当たっていたことに満面の笑みを浮かべていたウエンデイルだったが、シアの最後の言葉に耳をピクリと動かし

「……イノーセクト家？」

「ええ。マロノスの家名はイノーセクト。……知らなかった？」

「は、初耳だよ！ていうか、マロノスの研究をしてる学者でも家名は知らないよ！今まさに調べてる最中なんだから」

シアは無関心に「へえ」と言うただなか、これは大発見だ。この事を学会で発表すれば、凄い騒ぎになるだろう。

今、マロノスの作品の見分け方は、全てマロノスの家紋があるかないかで判断している。しかし、シアの言っている事が真実であれば、今まさに国宝として大事に保管している数々のマロノスの作品

が、全てマロノスの作品ではなく、イノーセクト家の誰かが創った作品という事になる。

(……これは一大事だ)

イノーセクト家の作品も名品に違いないが、マロノス作品ではない。

とんでもないことを知ってしまった。ウエンディルスだけでなく、ドリラスも事態の深刻さに冷や汗をかく。

「シア。これもまた、師匠から教えてもらったのか？」

「ええ」

ドリラスは違う事を願って聞いてみるが、シアはあっさり頷いてしまった。

(ということは、今までマロノスの作品にだけついていっていると思っていたあの紋章は、マロノスの作品には絶対ついてなくて、全部イノーセクト家の誰かが創った作品ってことかあ……。あれ？そうだとしたら、マロノスの作品ってどう見分けるんだろ。……はは)

ウエンディルスはあまりの衝撃に、頭をフラフラさせる。

実は、ニンファールのメンバーは、シアの事は何も知らない。素性はおるか、素顔さえもだ。

無知だと言っても過言ではない。

それなのに、二人がシアの言うことを疑わないのには、ちゃんと理由がある。

今までシアが言ったことに、一つも嘘がないからだ。

誰も知らないシアの師匠仕込みの知恵で、何度もピンチを乗りきった事がある。

そのことが、シアへの信頼に繋がっているのだ。

「今日のガーディアンが、マロノスガーディアンじゃなくて良かった」

突然、シアが呟いた。

「……そうだな。イノーセクト家のガーディアンであの強さなら、マロノスガーディアンだったらどれだけ強いんだって話だ」

ドリラスが同意する。

「Sランクの私の師匠でさえ、マロノスガーディアンとは闘いたくないって言ってた」

「え？シ、シアの師匠って、Sランクなの！？」

「ええ。言ってなかった？」

「……言っていないよ」

深くため息をつくウェンディルス。もう声を出すのにも疲れたようだ。

（マロノスガーディアンを倒すには、最低でもSランクはいるつか。にしても、今日のガーディアンよりも遥かに強い？……どんなバケモンだよ。マロノスガーディアン）

「……なあ」

ドリラスがシアに話しかける。

「マロノスガーディアンに勝てる奴って、いるか？」

シアは少し考え込むと、珍しく笑いながら、はっきりと言った。

「そうね。その人が九人居て、国一つ落とせるなら勝てるわ」

バージリン森林に入り、数分歩いたら着く距離に、ある屋敷がある。その屋敷は、屋敷を囲む不可視の結界の効果で、もう千年以上人の目に触れることなく、また、侵入も許さなかった。

しかし今日、最低でも千年振りに、人の侵入を許した。
だが、その侵入した青年の姿はもうない。

屋敷は静寂を取り戻し、屋敷を守護する二体の石像の悪魔は、定

位置である屋敷の入口である扉のサイドに収まっている。

先程まで青年が居た場所は、悪魔の攻撃のせいで焦土となっていたのだが、屋敷を囲う結界のお陰か、あっという間に修復され、小綺麗な芝生に戻っていた。

屋敷はこのまま誰の眼に触れることもなく、また何百年と静かに佇むだけだと思われたが、突然、空間が裂けた。

先程まで青年が居た場所だ。裂け目はどんどん広がり、中から誰かが出てきた。あまりにもすんなりと自然に出てきたせいで、まさか違う空間から出てきたとは誰も思わないだろう。

膝上まである黒のローブが足を進める度に靡く。シャツもパンツも黒のせいで、全身黒づくめだ。蒼い瞳が、屋敷の入口にいる二体の悪魔を見据える。凜と立つ青年は、屋敷の静寂を壊した侵入者である、ゼルスだった。

ゼルスは悪魔から炎の攻撃を受けたとき、ゼルスだけが使える神精魔法で別空間に逃げていたのだ。別空間、もとい闇の口に一時的に避難していたゼルスは、自分を”逃げ”に走らせた悪魔が動き出すのを待つ。

（大体こいつらのスタイルは分かった。片方が肉弾戦で、もう片方が魔法戦。でもどちらも半端なく強い。……ダンジョンにいたモンスター以上かも）

二体の悪魔が眼を紅に灯すと動き出した。
排除したはずのゼルスが、空間を裂いて現れても驚くことなく、
ただ目の前にいる侵入者を排除するために。

一体の悪魔が、姿を消した。と同時に、ゼルスは横に吹っ飛んだ。
塀に突撃したゼルスは、少し咳き込みながら、自分が居た場所にいる
悪魔を鋭い眼で見る。咄嗟に防いだ腕がじんじん痛む。ゼルスに
蹴りをいれて吹き飛ばした悪魔は、平然とした風に立っている。

ゼルスが急激な魔力の高まりを感じれば、屋敷の入口付近に立っ
ている悪魔が膨大な魔力をその手に集めていた。

（ヤバイッ）

逃げる原因となった自分を襲った灼熱の炎が頭をよぎる。ゼルス
は自分が出来た最高の強化魔法を施し、掌をこちらに向ける悪魔に
向かう！

一瞬にして悪魔の眼前に着いたゼルスは、魔法を放とうとしてい
る悪魔の腕を、右足で蹴り上げる。

腕が勢いよく側頭部まで上がり、バランスを崩して後ろに仰け反
った悪魔は、止めきれなかったのだらう。その体勢のまま魔法を放
つ。

悪魔の掌から雷が放たれ、轟音を轟かせながら空へ進む。桁違い
の魔力を内包するその雷は、ある所まで進むと、何かにぶつかり、
爆音と共に霧散した。

おそらく、屋敷を取り囲む結界にぶち当たったのだろう。

その一連の出来事が起きている最中、ゼルスの攻撃はすでに始まっていた。

後ろに仰け反った悪魔の腹に渾身の一撃をたたきこみ吹き飛ばすと、すごいスピードで、その悪魔が吹き飛んでいる所まで行き、頭上に来た悪魔を回し蹴りで空に吹き飛ばす！

まだゼルスの攻撃は終わらず、空を突き進む悪魔を追いかけて飛ぶ。

悪魔の吹き飛ぶ勢いが収まり、落下しようとする瞬間を狙って、ちょうど悪魔のいる高さまで来たゼルスは悪魔にむかって勢いよく足を振り下ろした。いわゆる踵落とした。

悪魔は重力も加算されて、さっきとは比べ物にならないほどのスピードで地面に落ちた。

再び爆音が屋敷を揺らす。屋敷の庭には、悪魔を中心としたクレターが出来上がっていた。

画策どおりにいって安心した様子のゼルスは、地面に落下しながらも、もう一体の悪魔の姿を探す。

その時、背後から攻撃の気配を感じたゼルスは、自分を中心にした突風を起こす。

いや、突風という表現は生温いだろう。ゼルスが神精魔法で起こした風は、風圧だけで大木をへし折るような威力を持つものだった。しかしそのような破壊力を持つ風でも、背後にいた悪魔を吹き飛ばすまでは至らず、悪魔の勢いを止める事しか出来なかった。

ゼルスは空中で悪魔に向き直ると、悪魔の様子を見た。一メートル前に居た悪魔は、左肘を前に突っ張り、後ろで右拳を振りかざしたまま止っている。

おそらく、勢いよく地面から飛び、その勢いのまま肘を使ってゼルスの背を攻撃し、最後は拳で地面にたたき落とそうとしたのだろう。

ゼルスは少し間抜けな格好の悪魔に、人の悪い笑みを浮かべる。

（チャンス！）

多分こいつは魔法が使えない！そう思ったゼルスは、風を操り空中に停止し、悪魔と距離をとった。

そして、直径二メートルの水の玉を、高さ十メートルほどの空中に作り出し、その中に落下していた悪魔を風で投げ入れた。

落下中に下からの突風を受け、抵抗出来ずに水の玉に閉じ込められた悪魔は、何も出来ずにいた。

（あつたりー。こいつは魔法が使えない！絶対！）

地上では強敵であった悪魔も、空中戦になると手も足も出なくなつた。

されるがままの悪魔に向けて、ゼルスは口を開いた。

「凍れ」

キイインという音と共に、水の玉は瞬時に凍り、中に居た悪魔も、必然的に凍ってしまった。

今は、ゼルスが風を使って水の玉、いや、氷の玉を浮かばせているが、ゼルスが魔法を解けば氷の玉は重力に従って落下するだろう。ゼルスは地面にめりこませた悪魔を見下ろす。

指が動き始めている。起き上がるのも時間の問題だ。

ゼルスは少し考えると、氷の玉をクレーターが出来ている地面の上まで移動させる。

クレーターの中央には、地面にめりこんだ悪魔が、今まさに起き上がろうと腕を伸ばしていた。

「わるいなー。もうちょっと寝ててくれ……よ！」

ゼルスは氷の玉を支えていた風を解き、今度は逆に、風を使って氷の玉を地面に勢いよく落下させた。

地面を砕く音が屋敷に響き渡る。氷の玉は先のクレーターより地面をえぐっていた。

下敷きになった悪魔も、きつと再起不能だろう。

ゼルスは地に降りると、氷の玉の中心にいる悪魔を見る。

眼に紅い光が灯ってないことを考えると、もう安心していいだろう。

下敷きになっている悪魔を思うが、あれほどの攻撃をして動けることはないだろう。

ゼルスは悪魔が守護していた屋敷を見上げる。

……………コッ……………チ……………

不意に、ゼルスの頭に声が響いた。

「っ！なんだ？」

辺りを見回すが、庭には誰の姿もない。

先ほどと変わっている点といえば、氷の玉の影響で、霜が漂い始

めているだけだ。

(……これが違和感の正体か。なんか、気配が同じって言うか、そんな感じがする。……この屋敷の中だ)

ゼルスは言い表せない気持ちに戸惑いながら、慎重に未知なる屋敷の扉を開いた。

十四話 屋敷の守護者（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
詳しくは活動報告で。
はくゆ

投稿日時

2010・12・23（Thu）

十五話 封印されしモノ

屋敷の扉を開き、先ず眼に入っただのは、床一面に敷き詰められた青い絨毯。そして、見上げれば、アンティーク調のシャンデリアがその存在を主張している。しかし、奇妙なシャンデリアだ。

普通なら灯火がそれぞれ一定の距離にあるはずだが、このシャンデリアは腕木が好き勝手に延び、灯火がてんでバラバラな位置にある。長くカーブする三十はあるであろう腕木にはそれぞれ、カットされたクリア・クリスタルが幾つも連なり、何百も吊るされている。

ロウソクからの光源を、何千というクリア・クリスタルが反射し、広いエントランスをオレンジ色に明るく照らす。その光が青い絨毯が合わさり、エントランスを幻想的にしている。

（まさに、魔法使いの屋敷って感じだ）

ゼルスが感心していると、またあの声が頭に響いた。ゼルスは気を取り直し、強い波動を感じる場所に行く。強い波動は、入口の真正面にある大階段の脇にある、小さな物置部屋のような所から発せられている。

（こんな所から……）

予想とは違い、貧相な場所から出ている場違いな波動の強さに戸

惑うゼルスは、眉をしかめながら、注意深く物置部屋のドアを開く。

ゼルスは息を飲んだ。其処は物置部屋とは一切関係のない場所であった。空間を広げる魔法を使っているのか、外から見て予想する部屋の広さを大きく上回っている部屋は、異様なまでに真っ白だった。

部屋の中心には、直径一メートルと大きな水晶が緩やかに上下運動を行いながら浮かんでいる。その水晶を囲むように、四つの細長く、すこし上の位置にくびれを造ったスタンドがあり、スタンドの上には小さなクリスタルが浮遊している。

ゼルスが白い部屋に入ると、巨大な水晶がまるでゼルスを待っていたように、輝き始めた。その反応に驚きながら、巨大な水晶に近づく。輝いている水晶に触れてみるが、何も起こらない。

どうしたものか。ゼルスが首をかしげていると、スタンドの上を浮遊するクリスタルが眼に入った。

（あのクリスタル……、凄い魔力が込められている。なんでこんなに……）

真相を確かめるため、ゼルスは風の神霊魔法を使う。風が部屋を流れる。ゼルスは今、風のお陰でこの部屋の状態が眼を瞑っていても分かる。どこに何があるか、部屋を漂う魔力、ゼルスは自分の手足のように風を操り、部屋の状態を把握した。

最早この白い部屋は、ゼルスの支配下といっても過言ではない。

（クリスタルは魔力を供給してるだけか。でも……なぜ床に？）

調べた結果、どうやらクリスタルは、スタンドを通して床に魔力を供給しているようだ。

ゼルスが床を注視していると、あることに気がついた。白い床のせいで見逃していた。床には、スタンドを囲うように、白い円形の紋章が描かれていた。わずかにだが、発光している。

（この紋章は……、何かを封印している？）

風が教えてくれる情報からすると、紋章は何かを封印するために存在しているようだ。そうすると、何かが巨大な水晶の中に封印されているのだろうか。

強大な魔力で封印されている何かは、一体何なのだろう。ゼルスは危険を承知で、封印を解こうと、スタンドの上にあったクリスタルを、一つ、試しに取ってみる。しかし、何も変わらない。

ゼルスは、この封印を解いていいのか、不安に思いながらも、他の三つのクリスタルを取ることにした。

この行動が正解なのか、不正解なのか、ゼルスには分からなかった。

クリスタルを全て取ると、輝いていた水晶が光を失い、床に落ち、鈍い音が部屋に響く。

床をすこし陥没させた水晶に亀裂が入り、それは全体へと広がっていく。

ピキピキと音が鳴り、亀裂が広がり、水晶は砕け散った。

砕け散る瞬間、眩い光が部屋を包み込む。

眩しさに負け、眼を瞑ったゼルスが眼を開くと、白い石が床に転がってあった。

水晶の砕けた破片も残っておらず、あるのはただの石にしか見えない白い石だけだ。

ゼルスは拍子抜けしながら白い石を手取る。

「結局、なにがどうなってるのか」

あの自分と呼ぶ声はなんだったのか。この屋敷は一体何か。

全ての疑問の答えがあると期待していたが、手に入れたのは答えなんかじゃなく、何の変哲もない白い石。

ゼルスが白い石を見ていると、突然、ゼルスの膝がストン。と折れ、床に着いた。

「えっ？」

力が入らない？

ゼルスがそう思っている最中にも、ゼルスの体からどんどん力が抜けて行く。

あっという間に地面にうつ伏せになったゼルスは、何も考える事

が出来ず、気絶してしまった。

ゼルスは、柔らかな感触に包まれている事に気づき、眼が覚めた。そして、すぐさま飛び起きる。明らかに先ほどと環境が違いすぎた。ゼルスがベッドの上で片膝を立て、忙しなく辺りを見渡す。案の定、辺りは様変わりしていた。ゼルスの視界に映るのは、自分がいる天蓋つきベッドに、周囲の高級そうな調度品。

先ほどまでいた白い部屋とは大違いだ。一体、自分が気絶している間に何が起きたというのか。

そして、驚くべきは、天蓋つきベッドや、周囲の調度品など、この部屋の中で魔力が込められていない物はないということだ。全てに、強い魔力が込められている。

（意味が分からない。……誰かがここに連れてきたのか？ それに、なんだよこの馬鹿でかい魔力は）

ダンジョンから出たばかりのゼルスなら部屋に充満している魔力に反応を示さなかっただろうが、この世界の常識を知ってしまったからの、この屋敷との出会いは衝撃だった。

ゼルスは強力な魔力に辟易しながら、天蓋つきベッドから出た。

同時に、部屋のドアが静かに開く。

ほんのりとウェーブがかかったストレートロングの黒髪の女性が、驚きで少し大きくなったゼルスの瞳に映る。

部屋に入ってきた女性はドアを閉じ、慎ましい様子でドア付近に立つ。

慎ましいが、明るく微笑む彼女は、状況が分からず混乱していたゼルスの心を、自然と落ち着かせた。

「貴女は……」

自然とゼルスの口から言葉がこぼれる。

女性は依然として微笑むだけで、それ以外にはなんの反応も起こさない。

怪訝に思うゼルスが女性に近づこうとすると、女性はゼルスを流し眼で見ながら、部屋から出ていった。

その様子が、「ついてきて」と言っているように思えたゼルスは、女性についていくように部屋から出た。

左の方向に女性が歩いている。不思議な事に、つい先程部屋から出たとは思えない距離にいる。

（いつのまに……）

ゼルスは、駆け足で、エントランスと同じ青い絨毯を踏みしめながら進む。

一定間隔に壁に設置してある燭台の灯火は、ゼルスが通りすぎるとゆらゆら揺れる。

女性は、ゼルスが追い付く直前に、大きな曲がり角を左に曲がる。ゼルスは肩をたたこうと、曲がった先に手を伸ばすが、見事に空振りをした。

「え？」

勢いよく伸ばした手は空を裂き、前のめりにバランスを崩したゼルスは曲がり角に肩を強打した。

多少の痛みを感じたが、それよりも、ゼルスは目の前に広がる光景が信じられなかった。

階下に行く大階段があることを考えると、この先はゼルスが入った屋敷の入口があり、あの青とオレンジの幻想的なエントランスが広がっているのだろう。

しかし、問題はそこではなく、すでに女性が階段を降りている最中ということだ。

曲がり角から階段までの距離は近くはなく、十メートルはある。

また、彼女が角を曲がってから一秒と経っていない。ゼルスが混乱している今でも、女性は大階段をどんどん降りて行く。

焦るゼルスは、彼女を見失わないように強化魔法をかけ、追いか
けようとする。

が、ここで異常に気付いた。

（は？嘘だろ？……魔法が使えない？）

何度強化魔法をしようとしても、自分の魔力がまったくいう事を
聞かない。

まるで魔力が封印されているようだ。

だが今はそんなことに気をかけている余裕はない。ゼルスは女性
を見失わないよう、大階段に向かう。女性の姿が見えなくなって、
すでに十秒は経っている。

ゼルスは逸る気持ちを抑え彼女を追うが、頭の片隅では、彼女が
遠くに行っていないと思っていた。

何の根拠もない勘であるが、ほぼ間違いないと思っている。

きっと、彼女は自分に何かを見せたいんだ。と、確信めいたもの
を感じていた。

そうでなければ、彼女がゼルスの前に姿を現すはずがない。
ゼルスはエントランスに着き、辺りを見渡す。

視界に映るのは、相変わらず幻想的な雰囲気醸し出す、絨毯とシャンデリアだけで、女性の姿はない。

（いやいや、そりゃねーよ）

女性がいなくなるはずがない。と、決めつけていたゼルスは、この現実が信じられなかった。

が、同時に、あることに気づき、冷や汗を流す。それは、ゼルスがこの屋敷、いや、バージリン森林に来る原因となったものだ。

ゼルスは右手付近に小さな闇の口を出現させ、急いで中に手を突っ込み、一枚の紙を取り出した。

「あー……、完璧忘れてた」

ゼルスが取り出した紙は、冒険者協会の依頼書である。クラウドロンの依頼主であるこの依頼の事を、ゼルスは完全に忘れていた。

女性の事は気になるが、依頼を無視して女性を追いかけるわけにはいかない。

この屋敷がバージリン森林の何処に位置するか分からないが、早く依頼の薬草を採取してクラウドロンに渡そうと考えたゼルスは、屋敷の出口へと向かう。

エントランスの中ほどまで来た時、ゼルスの後方から、ドアが開く音がした。

その音はやけに甲高かった。まるで、屋敷の外へ出ようとするゼルスを引き止めようとするように。

音に反応したゼルスは、走るのを止め、反射的に振り返る。

一つの部屋のドアが開いている。その部屋は、ゼルスが気絶した部屋であった。

そして、気のせいかもしれないが、ゼルスの瞳に、一瞬だが、あの女性が部屋に入っていく様子が映った。

ドアがゼルスを誘うように、甲高い音を鳴らしながら揺れる。

理性と本能が天秤にかかった。

依頼を速やかに遂行しなければならないと、理性は囁くが、本能は、あの女性の後を追えと、訴えている。

ゼルスは、心でクラウロンに謝ると、ゆっくり、部屋へと進む。

歩く速さとは裏腹に、心音はかなりの速さだ。

クラウロンに対する後ろめたさはあるが、ここで帰ったら、一生後悔すると感じていた。

ゼルスは白い部屋に入る。気絶する前と違い、陥没していた床がなぜか修復されていた。

四つの細長いスタンドは、封印していた対象が無くなったせいか、どこか色あせている。

ゼルスが目線を下にやると、白い石が転がっていた。

そして、その事を認識したと同時に、白い石の横に、あの黒髪の女性が、突然現れた。

唐突だが、まるで地から湧いて出てきたように現れたせいで、ゼルスは最初からそこに居たのではないかと思ってしまうた。

「あ、あの、貴女は？」

どもりながら、ゼルスが目覚めた時と同様に尋ねるが、女性は相変わらず柔らかく微笑むだけで、声に出さない。その代わりに、女性目は視線を横にある白い石に移した。

ゼルスもつられて視線を白い石に移す。ゼルスが、拾えということか？と思うと、ゼルスの視界の隅にいた女性が、今度は唐突に姿を消した。

ゼルスは驚き、すぐさま女性が居たところを見るが、そこには誰もいなかった。

唐突に現れ、消える女性。彼女は何者なのか。ゼルスは思考をこらしたが、当然ながら、考えても答えはでなかった。

ゼルスは深くため息をついた。

この屋敷に着いてから驚きの連続だ。

やけに強い屋敷の門番・ゼルスを気絶させる白い石・異常なほど強力な魔力に満ち満ちた屋敷、そして、気絶前は魔法が使えたのに、気絶後は魔法が使えなくなっていた。

しかし、あの女性は魔法が使えるのだろう。現に、突然現れたり、魔法でしか説明が出来ない事をしているのだから。

今、この現状を破る唯一の物は、床に転がっている白い石しかない。

ゼルスは、奇妙な事が起きるのではないかと不安に思いながら、おそろおそろ右手を小さな水晶に近づける。

その時、ゼルスは、自分の頬を伝う液体に気がついた。いつの間にか、汗が頬を伝っている。そして、右手を見れば、小刻みに震えている。

ゼルスは苦笑いした。物を掴むだけのきわめて単純な行動で、緊張しているとは。

自分の常識が通じないモノが相手だと、このように恐れを感じるのか。

ダンジョンで過ごしてきたゼルスが、地上に出てから初めて恐れを感じた瞬間であった。

（……レイヴェルたちはすごいな。俺が、レイヴェルたちの立場で、ダンジョンで俺に会ったら、絶対俺は、俺に対してあんな風に優しく出来なかった。早く自分から遠ざけたくて、即行国に報告してただろうな）

ゼルスの頭に、レイヴェル・クラニカ・アルリノ・カルマの姿が浮かぶ。感謝してもしきれない、四人の恩人だ。

助けて。

不意に、頭に女性の声が響いたが、ゼルスは、この白い石が言ったような気がした。

その声が、昔の、ダンジョンで暮らしていた幼き自分と重なった。

「今度は、俺が助ける番だな」

右手の震えも収まり、汗も引いた。

ゼルスは暖かい笑みを浮かべると、白い石に触れる前で止まっていた右手を勢いよく伸ばし、その手に掴んだ。

途端に、ゼルスは、片膝を床につけ、苦しみに耐えるように顔を歪める。

左手で胸を握りしめる。外からは分からないが、黒のシャツが、血で滲みはじめている。胸を締めつける痛み of せいで声をもらし、苦しみながらも、白い石を決して手放さなかった。

助けを求めた白い石は、右手に吸いついているように離れなかった。白い石は喜ぶように光を放っているが、どこか悲しげだった。

光が強力になればなるほど、ゼルスの苦悶の表情は鮮烈さを増す。

（そうか……！ これは、魔力が……吸い取られている……！）

何故自分が気絶してしまったか、ようやく理解したゼルスだが、一体どれほどの魔力が吸い取られてしまったのだろうか。

もうゼルスの視界はぼやけ始めていた。気付けば、頬に堅いもの

が触れている。

ゼルスは床に横になっていた。右手は眼前にあり、白い石が放つ光がまぶしい。

光の強さに耐えられなくなり、ゼルスは瞼を閉じる。

ゼルスの息はどんどん荒く、乱れていく。

ゼルスの限界が近づこうとした時、微かに、亀裂が入る音が鳴った。

おぼろげな意識の中、ゼルスは右手に掴む白い石の感触が、滑らかな感触から、所々ざらざらとした感触に変わったように感じた。それを感じ取った時、ゼルスの意識は、再び闇に落ちた。

ゼルスが意識を失った後も、白い石は亀裂が広がっていた。今にも砕けそうなほどだ。

突然、白い石が一際眩しい輝きを放ち、砕け散る。そして、中から光り輝く球体が出てきた。

その球体は人間の形をとり、その光が収まると、ゼルスが追っていた黒髪の女性が現れた。

ストレートロングの髪に、若干ウェーブをかけている。カジジュアルな白のドレスを身に付けた女性の瞳は慈愛に満ちており、口元は優しくそうに弧を描いている。

彼女がゼルスを見ると、すでに気絶しており、苦しそうな表情だった。

「あんなに魔力を吸い取って、ごめんなさい。そして、私を解放してくれて、ありがとうございます」

彼女はそう言うと、ゼルスの体の上で、手を緩やかに横に振った。すると、金色の粉末のような光が、ゼルスの体に降っていく。

その光を体に浴びたゼルスは、心地よさそうな表情に変わった。

「私は、一生あなたに仕えます」

彼女がゼルスの手の甲に口づけをすると、ゼルスの手の甲に紋章が浮かび上がった。

彼女はゼルスを、壊れ物を扱うように丁寧に抱えると、白い部屋
封印の間を出て行った。

彼女の名は、ルーチエ。

古の時を生きた、精霊である。

十五話 封印されしモノ（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
詳しくは活動報告で。

はくゆ

十六話 ルーチェの話？

バージリン森林に存在する、唯一の屋敷。

何千年という時を過ごしているにも関わらず、朽ちずに威風堂々と建つその屋敷は、不可視の結界を始めとした、様々な強力な魔法によって守られている。

例え、その強力な魔法を破り、邸内に侵入出来た強者がいたとしても、屋敷の守護者である二体の悪魔を模した石造が、すぐさま排除するだろう。

何人の侵入も許さず、誰にも気付かれず、最早ただ存在するだけのこの屋敷も、昔は人のものだった。

その人の名は、マロノス・イノーセクト。

古代に名を馳せただけでなく、何千年と経った現代にさえその名を轟かせている、最強と謳われた魔法使いだ。

最強と謳われた魔法使いがこの屋敷を去り、何千年という、人々がその屋敷の存在を忘れるには十分な時が流れた。

しかし、ある青年が、導かれるように屋敷を訪れ、屋敷の静寂を打ち破った。

二体の悪魔を撃退した青年は、屋敷に封印されていた精霊を解放し、力尽き気絶している。

充分な広さをもつ部屋があった。湖を描いた美しい絵画が壁に掛けられ、華々しすぎず、みすばらしすぎず、地味な大きな壺が部屋の隅の一つに置いてあった。玄人好みされそうな壺だ。

床に敷かれている絨毯はやはり青で、この部屋も幻想的な雰囲気を醸し出している。

本棚が多く、中には難解そうな本が数多く並べられている。部屋の主が、知的だったことがうかがえる。

その部屋に置かれている、3人は寝ることができるであろう天蓋つきベッドに、気絶した青年の姿はあった。

穏やかに眠る青年の寝顔は、二体の悪魔を撃退したとは思えないほど、幼げで、まだまだ子どもであった。

見た全員がそう思うかは定かではないが、少なくとも、その寝顔を見つめている女性は、そう思った。

天蓋つきベッドの傍らに立っている女性は、白のカジュアルドレスを纏い、それが清廉そうな彼女の顔と合っていた。

艶やかな黒の髪は、胸元まで伸び、髪先にいくにつれ、柔らかなウェーブがかかっている。

ふと、女性は思いついたように後ろを向くと、そのまま部屋の出口へと歩いていく。心なしか、その足取りは軽い。

青年が寝ている部屋は、元は、この屋敷の主人であったマロノス・イノーセクトの部屋だ。

よって、他の部屋よりも豪華かという点、実はそうでもない。客間や、使用人の部屋と同等である。

そのようになっているのは、マロノスの差別嫌いな性格の影響だろう。

マロノスは、差別が原因でおきたある事件のせいで、家族と、マロノス一族と距離をおいていたのだ。

女性が部屋を出て数十分後、女性が戻ってきた。

両手に大きなお盆を抱え、そのお盆からは、湯気が出ていた。香ばしい香りがする料理が乗っている。

そして、その香りに誘われるようにして、青年の ゼルスの
の瞼が開く。

「ここは……」

以前と同じく天蓋つきベッドで目覚めたゼルスの、静かな声が出た。

横から、食欲を刺激する良い匂いと一緒に、声が返ってきた。

「おはようございます。ここは、屋敷の主人の部屋です」

鈴の音のように澄んだ綺麗な声だった。

ゼルスは、返事を期待していなかった、というよりは、この部屋に居るのは自分一人だと勝手に思っていたので、すこし驚いた。

「屋敷の……？ 貴女は確か……」

ゼルスが、寝たまま声の主に顔を向けると、見知った顔があった。あの、不思議な女性だ。ゼルスは上半身だけ起こそうと、腹筋に

力を入れる。

けれども、体が全くいうことを聞かない。

それどころか、腹筋に力を入れられているかさえ分からない。

おかしく思ったゼルスは、試しに手を動かしてみる。

しかし、案の定全く反応はない。先ほどと同じく、反応しているかどうかさえ分からない。

「申し訳ありません」

「え？」

戸惑うゼルスに向けて、女性が突然謝った。

頭を垂れた彼女の顔には、食器から出る湯気があたっているが、彼女はお構いなしに頭を下げている。

ゼルスは、微かにだが、彼女の華奢な体が震えているように見えた。

「……あの、どうしたんですか？」

ゼルスは湯気に当たる彼女が不憫に思えたし、震えているように見える彼女が何かに恐怖しているのもわかっていたが、それよりも

一体全体なぜ、自分に謝っているのか理解できなかった。
起きて早々、わけのわからないことばかりだ。

確か、この女性を追って、部屋に入って、気絶して　と、ゼルスが頭の中を整理していると、

「全部、私のせいなのです。ゼルス様がこの屋敷に来たことも、すべて」

と、女性が言い、頭をあげると、ゼルスを見る。

「まず、どこから始めましょうか……。結論から言つと、簡単なのですが……」

女性が均整のとれた眉を潜めていると、グウ。という音が部屋に響いた。

女性の前にあるベッドから鳴ったようだ。

ベッドに寝ているゼルスが、苦笑しつつ、うつすらと頬を赤に染めている。

女性は音にきょとんとしていたが、ゼルスを見るとクスリと口元を笑わせた。

「先にご飯にしましょうか」

「……はい」

穴があつたら入りたい……。ゼルスは自分の正直な食欲を恨んだ。

静かな部屋の中で、食器の音だけが響く。

女性から運ばれる流動食を、ゼルスは口をすこし開けて待っているだけだ。

始めのうちは恥ずかしがっていたゼルスは、何回も繰り返しているうちに慣れ、今では開き直っていた。

まるで雛鳥が親鳥に餌を貰っているような光景だ。親鳥が、雛鳥に餌を与えながら言った。

「ルーチエです」

ゼルスは何を言っているのか分からなかったが、すぐに思い当たった。

流動食を胃に押し込み、口を開く。

「ルーチエっていうんですか。美味しいです」

体があまりいうことをきかないので、心では笑顔でも、外見では口角がわずかに上がるだけだ。

それに対し女性は、困ったように首を傾げると、

「私、食べられてないのですが……」

と、ゼルスに返した。

部屋に五秒ほど沈黙が続き、ようやく合点がいったゼルスが、赤面しながら慌てて言い直す。

「す、すいません。このご飯がルーチェって名前だと思ってました。えーっと……ルーチェさん？」

いつものゼルスなら、ご飯ではなく、女性の名前がルーチェということに気がついていただろう。

しかし、今のゼルスは体が不自由だけでなく、目覚めたばかりのせいか思考能力も格段に落ちていた。

ゼルスは自分自身に違和感を感じながら、念のため、彼女の名前がルーチェであるかを確認する。

「はい。ゼルス様」

ルーチェは柔らかく笑い、肯定する。

「……ここは、何処ですか？」

「先ほど申しましたとおり、屋敷の主人の部屋です。封印の間で気絶したゼルス様を、私がこちらまで運びました」

あそこは封印の間というのか。そうゼルスが考えると同時に、ゼルスに違和感が生じた。

（なんだ、何かおかしいような……。今思ってみると、さっきも何か変だった。……あ）

思案顔のゼルスを心配そうに見つめていたルーチェに、ゼルスは尋ねた。

「俺の名前、言いましたっけ」

「いいえ。言っていないせん」

迷わず即答するルーチェに面食らいながらも、「じゃあなぜ」と言おうとする。が、先に、ルーチェが口を開いた。

「それを話すには、先に昔の話をした方が良くかもしれません。…
…すこし長くなりますが、よろしいでしょうか」

そう言う彼女の瞳は、若々しい外見に反して、とても昔の情景を
思い出しているようだった。

ゼルスは雰囲気が変わったルーチエに驚くが、無言で頷く。
体が不自由なせいで顎が僅かに揺れただけだったが、ルーチエに
はそれで十分だったようだ。

ルーチエが語りだす。

今では想像が付かない世界の過去を。
遠い遠い、昔の話を。

何千年も昔、世界は魔法の最盛期だった。

現代では考えられない魔法が多々あり、魔力が無い者でさえ道具により、魔法が使えた。

大小色々な国があり、その全てが平和に暮らし、国家間の武力衝突　いわゆる戦争などは全くなかった。

なぜ多くの国が存在するのに戦争がおきないのか。それは、世界中の種族が平和主義だから　といった、あり得ない夢物語ではなく、戦争を起こそうとする彼らを抑制する存在があったからだ。

それは、世界中の者から崇められ、畏れられる。

その名は、精霊国ハルレイン。

人口五百人と、国としてはかなりの小国だが、魔法に関しては他の国の追隨を許さなかった。

精霊国という名のとおり、国に住まうは精霊であり、人間だけでなく他の種族も一切住んでいない。

他の種族というのは、現代に生存している獣人や魔人、妖精等だけでなく、現代に存在していない龍族、幻獣族といったすでに滅びた種族も含めてだ。

古代には現代より数多くの種族が存在し、人間より遥かに力を持った種族がたくさんいた。

それにもかかわらず、人間の国は他の国と対等に渡り合っていた。

理由はただ一つ。精霊の加護があったからだ。

なぜ精霊が人間に肩入れするかは分からないが、精霊は、人間から魔力を貰い、様々な現象を引き起こした。

極端な例だと、嵐を呼び起こしたり、灼熱の炎を出現させたり、落雷を発生させたり、とても人間が起こせるはずのない自然現象などを、魔力と引き換えにして精霊は発現させていた。

人間はこの力のおかげで他の種族に対抗でき、古代で生き残ってきた。

精霊国ハルレインは、このように他種族に干渉することで世界のバランスを保ち、世界の平和を守っていたのだ。

「……なんか、すごい」

ルーチェの語りが一息ついたタイミングで、ゼルスの口から言葉がついて出た。特に発言するつもりはなかったのだが、口を動かすより先に、言葉が口を突いて出たかのようにだった。ゼルスはそう感じ、そのようになったことに自身でも驚いた。

「どこが、でしょうか」

ルーチェの澄んだ瞳は、その答えを知っているように見えたが、

改めて何かを見極めようとしているようにも見えた。

それがゼルス自身を見極めようとしているのかは、わからない。

ゼルスは自分が試されているように思い、すこし居心地の悪さを感じたが、率直な意見を、思ったままに述べた。

「全部、です。大昔なのに今より魔法が発展していたこと、多くの種族がいたこと、そして、戦争がなかったことです」

いつの間にか、思考能力はいつもと変わらなくなっていた。

先ほど思考が鈍かったのは、やはり、目覚めたばかりだったことが原因だったのだろう。

だが、体の自由はまだきかない。今も、無表情のままだ。

無表情で言うゼルスの答えが、自分の予想とは違ったのか、ルーチエの瞳が揺らぐ。

「他の事は、何も思いませんでしたか？例えば、精霊の事とか」

「特には……、あ、精霊国があったってことには驚きましたけど」

「では、精霊の現実離れしすぎた強さなどには……、何も思わなかったのですか？」

「俺もその現実離れした精霊の力に助けられてますし……思った事といえば、古代では精霊のことを皆が知ってたんだな。って思った

くらいです。それと、精霊って皆良い人なんだな。とも思いました」

ゼルスが言い終えた後、自らの失言に気がついた。

精霊の事を他人に話してしまったのだ。ゼルスが魔法を使用する際、何かに魔力を与えて魔法を発動している。

その何かの正体は分からなかったのだが、ルーチェの話を聞く限り、精霊で間違いないだろう。

自分が思っていたことが正しかったという事と、ルーチェがその存在を知っていたという事の二つの理由で安心してしまい、つい口が滑ってしまった。

しくじった。ゼルスは奥歯を噛み締めるが、いや。と、考え直す。

そもそもゼルスが自身の魔法の発動の仕方を秘密にしていたのは、その桁外れの威力と、効率の良さに加え、ゼルスしかその魔法の発動の方法を知らず、国に知られたらゼルスも含め、周囲の人にも危険が及ぶからだ。

だが、ルーチェはその魔法の発動の方法を知っているだろう。精霊の存在を知っているのだから。彼女もまた。ゼルスと同じように精霊に頼んで魔法を発動しているのではないだろうか。

だから、今まで彼女しか知らなかった精霊の存在をゼルスが知っていた事におどろいているのだ。

そうに違いない！安易に結論付けたゼルスは、他の可能性を考えもしなかった。

「まだ、私たちを知る人がいたなんて……」

最初は口を開き驚いた様子を見せたが、すぐ微笑み、どこか安心した様子のルーチェ。

反対に、ゼルスはルーチェの言葉に顔をしかめた。といっても、体の自由が聞かないせいで、外見では無表情のままだ。聞き間違いか？ゼルスはそう思った。

ゼルスの聞こえたとおりだったら、まるで彼女自身が精霊のようではないか。

きつと、「まだ私みたいに知る人がいるなんて……」と言ったのだ。

ゼルスは自分の考えが合っている事を祈りながら、おそろおそろ尋ねた。

「……私たち？」

ゼルスの問いに、ルーチェは満面の笑みで返す。

「はい。私は、精霊なので」

清々しい笑みだったが、ゼルスはその言葉に愕然とした。

（ 精霊？ どう見ても、人間じゃないか ）

愕然とするゼルスだが、彼もまだ精霊がどのような存在か知らない。

彼の精霊への認識は、自分を魔法で助けてくれる、目では見えな
いが、心強い存在。といった、とても曖昧な認識だ。

それでも彼は、その認識であっていると、ルーチェの話を聞く前
までは思っていた。

現代には精霊は実体で存在しておらず、それどころか、精霊はお
伽嘶の中でしか存在しないのだから。

ルーチェから古代の話を聞いても、精霊国があることには驚いた
が、その強大さには全く驚かなかった。彼にとって、精霊が強いこ
とは常識であり、むしろ、なぜ精霊が他人のためではなく、自身の
ためその強大な力を振るわないのか不思議でならなかった。

実体のない精霊がどのように精霊国を機能させていたのか不思議に
思っていたが、きつと何らかの方法でうまく機能させていたのだろ
う。と、ゼルスは樂觀視していた。

そこで、ルーチェの精霊発言だ。

確かに人間と同じような存在なら、国を機能させることの問題は全
くないだろう。一つの疑問は解決されたが、ゼルスはその代わりに
混乱してしまった。

ルーチェの話を聞いている最中にも思っていたことだが、古代で

世界を管理していたと言ってもいいほどの強国だった精霊国が、なぜ現代に存在しないのか。そして、精霊国の民である精霊も、なぜその存在すら知られていないのか。

そして、精霊が人と同じような姿をしているのなら、今までゼルスを手助けしてくれていた見えない精霊は一体何なのか。

精霊が人の姿をしているというのなら、ゼルスにも見えたはずだ。レイヴェルやクラニカ、いや、世界中の人にも見え、精霊のことを知らないはずがない。それとも、精霊は秘境で暮らし、そこから、ゼルスが魔法を起こすときに力を貸してくれているのか。

だが、ゼルスは自分の魔力を精霊に与えるとき、すぐ傍に精霊がいる感覚がするのだ。

それは、ただの思い違いだったのだろうか。

思い悩むゼルスを見て、ルーチェが不安そうにか細い声を出す。

「やっぱり、精霊はいやですか？」

ゼルスの瞳に、先ほどの明るい笑みは消え、代わりにすこし瞳をうるわせ、伏し目がちになっている悲しげな顔をしているルーチェが映った。

女の子には、優しくしなさい。

ゼルスの脳裏に、ある言葉が蘇った。

数日前、ある出来事の後、クラニカに言われた言葉だ。

ゼルスは心の中で微笑むと、クラニカに怒られるな。と苦笑し、
できるだけ明るいように、おそらく嫌われていると誤解しているル
ーチェに話しかけた。

「いや、精霊のことは嫌いじゃなくて、むしろ大好きです。ただ、
いろいろ考えて混乱してまして……。なぜ、今精霊がないのか。
本当に貴女が精霊なのか……。とか。いろいろ。俺は今まで精霊は実
体のないものだと思っていたので」

こんなときに限って表情が作れないなんて……。と、悔やむゼル
ス。

ゼルスはまだ体の自由がきかず、無表情で、しかも、淡々とした
口調でしかしゃべれなかった。

しかし、ルーチェにゼルスの思いは届いたようで、声には出さな
いが、さっきと打って変わって明るい雰囲気になっている。

「そうだったのですか……。では、その疑問に答えるために、急
ですが話を元に戻しましょう。今までの話は、古代の大雑把な情勢
でした。今からの話は、精霊のこと。そして、古代に起きた、起き
るはずのなかった戦争のことです」

ゼルスは普通にうなずいたが、このとき徐々におかしな感覚にと

られ始めていた。

その感覚は、ルーチエの話がおかしいとか、そういったものではない。

なぜか、あり得ないが、ルーチエの話す古代について、強い既視感を覚えるのだ。まるで、自分がその時代を過ごしたような。

そのようなゼルスの心境を知るはずもないルーチエは、止まっていた話を続ける。

古代を、懐かしく思いながら。

十六話 ルーチェの話？（後書き）

投稿が遅くなり申し訳ありません。

読んでいただきありがとうございます。

詳しくは活動報告で。

2011.3.21 (Mon)

十七話 ルーチェの話？ 赤の魔法使い

話は変わるが、魔力は何から構成されているのだろうか。

現代では、魔力は血液と同じようなもので、体内を流れていると、考えられている。

なんと抽象的なものだ。さらに、その考えの基となる確定的な根拠もないため、それが事実か甚だ疑わしいが、この見解が現代の常識となっている。

一方、現代より魔法文化が進んでいた古代では、魔力は魔素の集合体だ。という見解が出されていた。

ではその魔素とは一体何なのか。という疑問も出るだろうが、詳しい説明は割愛させていただく。魔力は魔素が集まって出来る、と理解さえすればいいだろう。

現代と古代。魔力の見解に関して、どちらが正しいか。それは後者である。

さて、なぜ魔力の話をしたかという点、これからする精霊の話と関係があるからだ。

精霊とは魔力の集合体だ。言い換えれば、魔素の集合体ということにもなる。

その魔素というのは、生物の肉体を構成するものでもあるが、それだけでなく、空気中や、海水など、この世界ルルカに存在するモノすべてに含まれている。

しかしそれならば、世界中に精霊が存在するということ事になる

が、実際には、現代に精霊が存在しておらず、おかしいことになる。

だがその答えは簡単だ。

単純明快なもの。精霊は存在しているが、単に見ることができないだけである。

ある程度魔力が集まると、精霊は誕生する。

誕生するとはいつでも不可視であり、精霊の存在をあらかじめ知っていた古代の者ならまだしも、精霊の存在を知らない現代の者がその存在に気づくことはない。

精霊が可視化するのは、精霊が成長して保有する魔力が一定以上になったときである。

古代の学者たちは、精霊たちが可視化することを“実体化”と呼んでいた。

実体化した精霊たちが住まう国が、ハルレインであり、ルーチェもその国に属していた。

ルーチェは自身が意識をもったとき、つまり、実体化したとき、空に浮かんでいた。

見上げれば満天の星空が、ルーチェの生誕を祝うように瞬いていた。

ルーチェは本能から、自分がどこに行って何をすればいいのか自動的に理解できた。

精霊は実体化する前の記憶はなく、実体化してから自分がどこへ行き、何をすべきか本能で理解しているようだ。

このことを古代の学者は解明しようとしていたが、謎のまま終わってしまった。

ルーチエが実体化し、はや百年。

ルーチエはハルレインで平和に過ごしていた。

世界の情勢を監視し、平和のバランスを乱す因子があれば、あるときは排除し、あるときは不利な側に力を与えたりして、世界の平和のバランスを調整していた。

仲間の精霊も、ルーチエが初めてハルレインに着いた時より三人増えていた。

今では合計五百人。

国としては少ないにもほどがあるが、それだけ実体化できる精霊の数が少ないということである。

だが、この少ない人数でも世界最強の国だ。
精霊一人一人の強さがうかがえる。

今までハルレインを国と表現してきたが、それは実質的には違いかもしれない。

確かに、ハルレインという国は古代の地図に存在しているが、ただそれだけなのだ。

存在するだけの国、それがハルレインである。

政治的な面では積極的に他国と関わるが、他国と貿易するわけもなく、経済面では全く手を出さない。

国ではなく、“世界を監視する機関”と表現するのが一番正しい

だろう。

ルーチエは暇を持て余していた。

基本、精霊は世界の平和のバランスを乱すものが現れない限り、何もすることがない。

精霊の支配下に置かれた古代では、精霊が現れる原因となる平和のバランスを崩すものなど現れなくなっていた。

この百年、ルーチエが働いたことといえば、ただ一回だけ。

時間にしてもたったの一週間であり、長きを生きる精霊にしたらほんの一瞬である。

それ以外は、世界中を観光したり、他の精霊と話をしたりして過ごしてきた。

そんな時、一人の男と出会ったのである。

いつものように、ルーチエは空を飛んでいた。

そしていつもどおり、白のカジュアルドレスをはためかせながら、

何か面白いものはないかと地上を眺めていた。

ルーチェの眼下に広がるのは、美しい自然だった。

緑豊かな森は、日光を浴び燦々と輝いているように見える。一陣の風が吹けば、葉がさわさわと揺れ、それが葉同士で挨拶を交わしているようだった。

ルーチェはすこし羨ましそうな顔をするが、ある情報を感知し、顔を驚きに変える。

（魔力……？ しかも大きな魔力……、でも一瞬で消えた。まさか、結界？）

ルーチェが魔力を感じた方角を見ても、何かの魔法を発生させた形跡も何もない。

さらに、その魔力の波動も一瞬で消えた。

それらのことから考えると、一番辻褄があうものは結界の存在だ。

ルーチェは魔力を感じた地点に向けて降りようとする。

そして、ルーチェの足が木の先端の葉に触れようとしたとき、それは起こった。

まるで、体が水のような液体に入るときの感覚だ。

ルーチェはすぐさま足を引くと、通常の空間と結界の境目と思わ

れる場所を探るような眼で見る。

そして、空中で態勢を整え手探りで結界の表面に手を置き、目をつむった。

十秒たっただろうか、ルーチエは恐れをひとかけらも抱かずに、結界内に侵入した。

男は書斎で本を開いていた。読むのではなく、ただ本を開いていた。

どうやら、ある考え事があるせいで読書に集中できないようだ。気を紛らわすために書斎を訪れ本を読もうとしたというのに、これでは全く意味がないではないか。と、男は苦笑し、改めて不器用な人間なのだと自覚させられた。

溜息をつきながら本を元の本棚に戻し、気晴らしに森を散策しようと思ったとき、一つの出来事が起こった。

男の住む屋敷の周囲に張った結界を通り、何かが侵入してきたのだ。

驚きのあまり、男は叫ぶ。

「馬鹿な！！ あれは人間には突破できないはず！」

男は屋敷を囲む結界には十分すぎるほど用心していたと自負している。

不可視の結界をはじめとし、幾重にも魔法をかけ、人間はもちろん、龍人族などの他種族も入り込むすぎが生じないようにしていたはずだ。

さらにおかしなことに、結界を破ることなく侵入してきている。結界が教えてくれた情報によると、その何かの体型は明らかに人間のものだった。

ただ、その身に宿す魔力はあまりに強大だったが。

これほどの魔力を人間が保有できるのだろうか。

答えは否だ。

しかし、結界からの情報だと、侵入者は明らかに人間のようだ。

人間の形をし、強大な魔力をもち、結界を通り抜けるといふ離れ業をしでかした者は、一体何者なのか。

男は、思考のうえある答えに至った。

「まさか、精霊……？」

精霊はこの世界を支配しているといっても過言ではない存在であるが、その実体は多くの謎に包まれている。

この男が精霊について知っている点といえば、戦争を企てる者には容赦なく制裁をくだす点だけであり、精霊がどのような思考を持っているか知らないだけでなく、それどころか、精霊の姿形さえ知らない。

もつとも、客観的に考えても精霊が異常に平和に固執している事は明らかであるので、なぜ平和に固執しているのか理由は不明だが、その異様な平和主義については男は理解したつもりでいる。

精霊の姿形を知らないのは、この男が人里離れた森の中の、かつ、多種多用の強固な結界を施した中に建つ屋敷に住んでいるからではない。

精霊の姿形を知らないことが、普通なのだ。

もし精霊の姿形を知っている者がいるのなら、過去に戦争を企て、運良く制裁を受けずに生き残った者くらいだろう。

もつとも、実際にはそんな者は存在しないので、精霊の姿形を知っている者はいないということになる。

それでも、男が自身の自慢の結界を看破したモノを精霊と予想した訳は、そのモノの保有する魔力があまりにも膨大すぎたからだ。

「行ってみないとわからないな」

男はつぶやくと、急いで書斎から出て行った。

ルーチェが結界内に侵入すると、其処には立派な屋敷が建っていた。

ちょうど屋敷の真上からから見ているため屋敷の全容は見えないが、その屋敷が常に強力な魔力を放っていることはわかる。

ゆっくりと、屋敷の全容を眺めるようにして屋敷の敷地へと降り

る。

周囲の状況を確認するところ、この屋敷の敷地はこどもが十分に走りまわれるほど広く、緑濃い芝生は綺麗に整えられていた。その敷地を高さ三メートルほどの塀が囲み、その塀の外側から結界を張っているようだ。

この場所はあまりにも静かすぎた。結界の効果だろうが、風の一つも吹かなければ、森の中だというのに小鳥のさえずりも聞こえない。さらに、自然の臭いさえ感じず、屋敷は異様な雰囲気包まれていた。

沈黙の中心に建つ屋敷は、場所が場所なら一流の芸術としてもてはやされただろうが、今はただ不安感を煽る不気味な屋敷にすぎなかった。

ただ、ルーチェは一切そのようなことを思わなかった。
彼女は感心していた。

ここまで外界の様々な情報をシャットダウンする結界を施すことは、並大抵の者ができる所業ではない。このようなことができる種族といえば、魔法に特化している魔族、精霊を除いては種族最強と言われる龍族くらいだろうか。

他の種族の者でも出来る者はいるかもしれないが、できる者はその種族の中でも三本の指に入る強者だろう。

そう考えたとき、ルーチェの心にある不安がよぎった。

（なぜ、こんな森の中でわざわざ強力な結界を創る必要があるのでしょうか？……悪だくみをするには格好の場所ですね）

彼女の心によぎったのは、この場所が精霊に勘づかれないようにするためにつかわれているのではないかというものだった。

現に、精霊である彼女もこの屋敷の存在はこの結界内にいる何者かの放出する魔力がなければ気付かなかったのだから。

だが、彼女は自分の考えが馬鹿らしいと嘲るように笑った。

（私は精霊といえど、光の精霊。私がいま気付いたのなら、おそらく結界の精霊である彼女も気付いたはず。いえ、最初から気付いているはずでしょう。それならば、あの方の耳にも届いている。

となれば、私が不要な心配をする必要はないようですね）

不安がなくなったところで、ルーチェは改めて屋敷を見渡した。敵かで、彼女が精霊でなければ屋敷の前に居ることすらためらわせるほど、肌に突き刺さるような魔力を放つ屋敷だ。

これほどの魔力が屋敷という巨大なモノに染み込んでいるとは、ルーチェは素直に感嘆した。

さて、ルーチェはこの結界内に侵入した原因の者を待つことにした。この一流の結界が耐えきれないような、あれほど強力な魔力を放った者は一体どんな種族でどんな変わり者なのだろうか。

ルーチェがここまで好奇心をもったのは、実体化して初めてのことであった。

男は屋敷のエントランスの中心で立っていた。

地には青い絨毯が敷かれ、空にはエントランスを幻想的に見せるように、シャンデリアがオレンジ色の光を放っている。そのとおりに、エントランスは幻想的な雰囲気が漂っていた。

その中心に立つ男は、なんとも難しい顔でいた。

その表情があやしく微笑んでいたのならば、その様子を見た誰もが、まるで芸術品の絵画の光景のように思えたのかもしれないが、男の表情には余裕がなかった。

（確かに、結界を通り抜けられた時から強い魔力は感じていた。ま、そうでなければ結界を通り抜けるなんて離れ業は出来ないだろうからな。……だが、この魔力はあり得ないだろう）

軽々しく考えたものの、男の頬に一筋の汗が流れる。

男はもともと、侵入者と会うために屋敷の外に出ようとここまで来ていた。男の、目測七メートル先には、この屋敷唯一の出入り口である扉がある。

しかし、侵入者の並はずれすぎる強い魔力が男の決心を鈍らせていた。

男は種族の中で一、二を争うほどの強さをもっていると自負していた。

だが、それ故に理解できるのだ。己と侵入者の力の差が。

（……負ける）

男が戦う前から戦意を喪失しかけるのは初めてだった。

己との葛藤は十分ほど続いただろうか。いや、まだ続くかもしれない。

相手は何のためにここに来た？外界とほぼつながりを断った俺を引き戻しに？侵入者は一体何者だ？まさか、本当に精霊なのか？

男の脳裏に浮かんでは消えるのは、エントランス中央にとどまるだけでは得られるはずのない疑問ばかりだった。

不意に男は、あることに気付いた。

エントランスに来てからすでに十分は経っているというのに、侵入者が動く気配が全くないのだ。

屋敷の庭の中心から、全く動こうとしていない。

そして、男はある事実に気がついた。

（こいつは、俺が出てくるのを待っている）

どういう意図だ？男は混乱する。

男は侵入者がきてから初めて冷静になり、侵入者の気配をうかがってみた。

冷静になるよう努めてはいるが、自分の心臓が飛び跳ねていると感じるほど、男は緊張していた。

その結果、驚くことに、侵入者から敵意が全く感じられなかった。侵入者の魔力は確かに並はずれて強力だが、注意深く感じてみれば、その魔力はどこまでも温かく、どこまでも優しいものだった。

そのことに油断してはいけな。と思う男だったが、そのことが一步を踏み出すきっかけとなった。

男はようやくエントランス中央から外へつながる扉に向かい、慎重にその扉を開いた。

ルーチェがゆっくり開かれる扉を見て、ようやくか、と安堵した。彼女は屋敷の扉からそうはなれていない位置に誰かがいることに気づいていたのだ。

彼女はようやくか。と思ってはいたが、可能性の一つとして、その誰かが自害しないか心配していた。

精霊が保有する魔力にあてられ、自害するという例は決して少なくはないのだ。どうやら種族にかかわらず生物は、強大すぎる魔力を目の前にすると、絶望し、発狂し、最後には死を選ぶ習性があるらしい。

実際に、ルーチェが以前会った人間は、ルーチェが何もしないにも関わらず、急に自害した。

よって、精霊たちは他種族の前に現れるときは、自分の魔力を抑

制して現れなければならない。

いまルーチエは、その魔力を全くといっていいほど抑制していなかった。

ルーチエが感じた魔力の強さから推測して、多分抑制しなくても耐えきれぬ相手だろう。と考えたからだ。

そして、ルーチエの期待通りに耐え、その人物は現れた。

扉がすべて開き、そこからでてきたのは一人の男。

まず目を引いたのは鮮やかな赤の髪だった。適度に伸ばした赤の髪は、男の雰囲気と合っていないようだった。どこかちぐはぐな感じがする。

そしてすこし垂れ目な目もそのちぐはぐ感に拍車をかけているようだ。

ぱっと見、陽気な性格に見えるが、男が発する雰囲気とても冷静沈着で鋭い人のように思える。だが、その垂れ目のおかげでどうしてもおっとりしたような印象も持つてしまう。

実にちぐはぐな容姿だった。

「……人間、でしたか」

正直いうと、ルーチエは驚いていた。

これほどの結界を施し、あれほど強い魔力を放った者が人間とは考えていなかったのだ。

だが、まだこの男がこの結界を創り、あの魔力を放ったと決まっていたわけではない。

ルーチェは見極めようと、すこし眼光を鋭くした。

男は居心地の悪さを感じていた。

決心して屋敷の外に出たはいいものの、其処に居た侵入者は女性で、その女性があれば強力な魔力を保有しているとは思えなかった。

彼女の外見は、一言でいえば儚い。

貴族の令嬢で、病気がちで、屋敷から出られない。驚くほど白く綺麗な肌は、そのせいだろう。と、男が彼女をみて一瞬で想像してしまうほどだ。

髪が白だったら、白のカジュアルドレスを着ているせいで、彼女自身が白の化身のように見えたかもしれない。

生憎、というのはおかしいが、彼女の胸あたりまで伸ばした髪は毛先に行くに連れ、自然にウェーブがかかっている黒髪だったせい

で、白の化身にはなれずにいた。

そんな彼女からは、儚げな容姿とは裏腹にすさまじい魔力が感じられる。

そして一つ疑問に思うのが彼女は男のことを人間と呼んでいた事だ。

ということは、彼女は人間ではないのか？と、男は考えた。

「……俺は人間だ。あなたは、違うのか？」

「ええ。私は精霊ですから」

即答だった。

男はあまりにすんなりと女性が答えたせいで、信じられなかった。しかし、彼女の眼はまっすぐ男を貫き、男はその瞳が嘘についている者の瞳だとは思えなかった。

頭を整理しようとしている男を無視しながら、彼女は言った。

「私は、光の精霊のルーチェと申します。ただの、ルーチェです。あなたは？」

男は、いきなりの自己紹介に驚きながらも、冷静に答えた。

「人間の……マロノスだ。マロノス・イノーセクトだ」

これが、光の精霊ルーチェと、古代で最強の魔法使いと謳われたマロノス・イノーセクトの、邂逅だった。

十七話 ルーチェの話？ 赤の魔法使い（後書き）

お待たせしました。

読んでいただきありがとうございます。

2011.4.23 (Sat)

はくゆ

十八話 ルーチェの話？ はじまりは語られず

マロノスは白のウッド・ソファに座り、落ち着かない様子で対面の同じ白のウッド・ファに座っている女性をちらちらと盗み見ていた。

女性が紅茶を啜る姿は優雅で様になっており、驚くほど白い女性の肌のせいかな、とても儚く見えた。

女性はマロノスの視線が気になったのか、一度口につけたカップをマロノスと女性の間を陣取る長テーブルにある受け皿に置くと、

「貴方は飲まないのですか？ 客人である私が言うのもなんですが」

と、長テーブルに置かれたマロノスの分であろう紅茶が入ったカップに手を向け、無表情のまま勧めた。

マロノスは引きつった笑みを浮かべると、「ああ、いい」と言葉を濁し、曖昧な返事をする。

内心、勝手に屋敷に侵入してきて客人とはどういう事だ。と思っていたが、そのことを言ってもこのルーチェという女性には無意味な気がしたし、彼女が本当に精霊なら迂闊な言動は慎むべきだと考えた。

精霊という種族は全員目の前にいるルーチェのようにマイペースなのか。と、マロノスは悲観してしまう。

彼らがいる場所は屋敷の一室であり、部屋の用途で言うならば客

人用の応接室だ。

ルーチェと出会ってから、まだそう時間はたっていない。

（しかし、あの自己紹介のあと、いきなり「ここではなんですから、中にも入りますか？」なんて言うとはな……。まるで自分の屋敷みたいに。ま、いきなり戦闘とかならなくてよかったけど）

と、すこし余裕があるような思考をするマロノスだが、背中はず常に冷や汗をかき続けている。

マロノスは、まだルーチェが精霊なのか完全に信用できていなかった。

ただ、ルーチェが保有する魔力が尋常でないことも事実。しかし、だからといって平和を脅かす者に制裁を加えるときにだけしか姿を現さない精霊が、平和を脅かすどころか、人里離れた森で隠居し、外界とほぼ接触を断っているマロノスの前に姿を見せるだろうか。

それに魔力量が尋常でないといっても、ルーチェが精霊であることの確定的な証拠にはならない。マロノスは、ルーチェの言葉を信じるか計りかねていた。

力チャ。顔が俯き気味になっていたマロノスが金属音に反応して顔を上げると、再び紅茶を飲んでいたルーチェが、受け皿カップを受け皿に戻したところだった。

「さて、本題に入りましょうか」

ルーチェは清廉な顔に似合わず、妖艶に微笑んだ。

マロノスはゾクリと悪寒を感じたが、ルーチェに気取られないように、動揺を隠しながらルーチェの言葉を待った。

さあ、あんたは何故ここに来たんだ？

「あの異常な魔力を放ったのは、貴方ですか？ マロノス」

「……異常な魔力？」

「ええ。私がこの屋敷付近の上空を散策中、この屋敷から異常に強い魔力が感じられましたから。こんなに強固な結界があるにもかかわらずに、です」

マロノスは、思ったよりルーチェがここに来た理由は単純そうだと思い、肩の力を抜いた。

（イノーセクト家が俺を家に連れて帰るために寄越したわけでも、俺を殺しに来たわけでもなさそうだ。……まだ、油断はできないが）

最初のうちより緊張がとかれたが、まだルーチェは得体のしれない相手。

マロノスは気を引き締める

「それについて答える前に、あんたが精霊という証明をしてくれないか？ 正直言って、俺はあんたという存在を信じていいのか分からない」

マロノスが真剣な表情で、すこし挑戦的な口調でルーチェに臨むと、ルーチェはスツと立ちあがり、一言。

「ごめんなさい」

マロノスが眉をひそめるより早く、自分が屋内にいるとは思えないほどの突風がマロノスを、部屋を内から襲った。

ルーチェを中心にして放たれるその突風は、部屋にあるありとあらゆる調度品を吹き飛ばす。長テーブルは壁に激突し、窓ガラスは、やがてその風圧に耐えきれずに無残に割れる。

まるで部屋の中で嵐が起きているようだ。

その真っ只中にいるマロノスはたまったものではない。腰かけていたソファごと吹き飛ばされ、壁に激突する。もともと、ソファがクッション代わりになったおかげで、マロノス自身はソファが壁に激突した衝撃でせき込む程度で済んだが。

まだルーチェを中心とした突風は収まらず、どんどん窓ガラスが割れていく。このまま続けば、いずれはこの部屋の壁も無残に破壊されるのではないかと思われた。

マロノスは風圧に負けじと、自分の前方に床と天井をつなぐ縦長の結界を創る。

結果が風除けとなり、風圧のため壁に抑えつけられていたソファごと床に落ちる。

ようやく息ができるようになったマロノスは、乱れた息を整えながらルーチェを見て、啞然とする。

ルーチェはただ、自然体で立っているだけだった。

風の魔法を行使した形跡もなく、それどころか、何かの魔法を行使した形跡もない。

ルーチェはただ、自身の魔力を解放しただけだった。

(で、でたらめすぎる……)

通常、魔力を解放したからといって今回のような現象が起きることはない。

魔力を解放して起きることといえば、魔力の強さによるが、その場にいる者がプレッシャーを受けるくらいであり、決して、今回のように魔力を解放してその場にあるものが吹き飛ばされたりすることはない。

マロノスが啞然としていると、ルーチェが徐々に魔力の解放を抑える。

風圧で壁に押し付けられていた調度品が一斉に落下し、痛々しい音を響かせる。

ルーチェは完全に魔力の解放を抑えると、満面の笑みで、

「これで、いいでしょうか」

あまりにも清々しい笑みを前にして、マロノスは、

「じゅうぶん……です……」

と、弱々しく言い返すしかなく、改めて周囲を見渡し、魔力を解放する前にルーチエが謝った理由を理解した。理解しても、全く嬉しくなかったが。

「……さすが、精霊」

マロノスは茫然と立ち尽くし、言った。
ルーチェが魔力を解放し、部屋をめちゃくちゃにしてから、まだ一分も経っていない。

それなのに、なぜか部屋は元通りに戻っていた。傷ついた調度品は一つもなく、窓ガラスも綺麗に直っている。むしろ、今の方が前の部屋より綺麗になったようだ。

「私は光の精霊ですから。これくらいは当たり前です」

マロノスがソファに視線を移すと、誇らしげな顔をしているルーチェが座っていた。

どうやら、マロノスの中で彼女が精霊だということは確定事項になったらしい。

魔力解放だけであれほどの事をした彼女が精霊ではないというのは、一体何だというのか、と。

マロノスは多くの聞きたいことがあったが、グツと飲み込み、最初の質問に答えることにした。

ルーチェの向かいのソファに座る。

「俺が、魔力を放ったか。だったな」

ルーチェはかすかに眼を輝かし、

「どうやら、私が精霊だと信じてくれたようですね」

「あれだけのことでおいて、信じるなっていうほうが無理だ」

マロノスが、すこし睨むような眼をすると、ルーチェは悪戯っぽく微笑んだ。

その様子を見てマロノスは溜息を吐くと、言葉をつづけた。

「この屋敷はルーチェが知っているとおり、何重にも結界を施している。精霊がどうかは知らないが、人間にとつて魔法を永久的に継続させることは不可能だ。その魔法を発動させている源の魔力が消費されれば、その魔法も自動的に効力を失ってしまう。今回でいうならば、屋敷の結界が効力を失い、いつか屋敷の存在を知られてしまう。だから」

「今回私が感じた魔力は、結界の魔力の補給ということですか」

「ああ、そういうことになるな」

マロノスはルーチェの態度に眉をひそめた。

（こいつ、初めから知っていたんじゃないか？）

マロノスがそう疑うのも仕方ないだろう。

マロノスが発言している最中にも新たな発見をした様子もなく、まるで、自分の考えが合っているかの確認をしているようだった。

「人間にしては、やけに魔力量が多いんですね。人間の中でも、かなりの強さになるのでしょうかね」

蔑むわけでもなく、称えるわけでもなく、言葉の端にわずかな好奇心をのぞかせるだけの感想を、ルーチエは淡々と述べた。

対するマロノスは、その言葉に微かに垂れ目をピクリと、一度だけ動かしただけ。

「まあ、な。……精霊さんは、種族の中で誰が強いとかはチエツクしてないのか？ 俺は世界の管理とやらのためにすべて調べ上げていると思っていたんだが」

マロノスはトゲのある言い方で返すが、ルーチエはそれを気にすることはしない。

「調べている精霊もいるかもしれませんが、大半の精霊は知らないでしょうね。たとえ種族の中で最強といえど、所詮は井の中の蛙。精霊とは比べモノになりません」

絶対的な自信。

マロノスはあまりの豪語にルーチェに驚きの眼差しを送るが、さらに驚くことになった。

ルーチェはまるで $1 + 1 = 2$ のように、当然の答えを言っているかのようなからだ。

マロノスは理解した。

ルーチェは決して自己的に絶対的な自信を持って言ったわけではなく、あくまで客観的に考えての常識として言ったのだ、と。

同時に、マロノスは自分とルーチェの間に決してたどり着くことのできない距離があることを本能で知り、生まれて初めて身震いした。

そのようなマロノスの心境を知るはずのないルーチェは、呑気に口を開いた。

「では、私は魔力の謎が解けたことですし、これで失礼します」

ルーチェは立ち上がりお辞儀をすると、呆氣にとられるマロノスを残し、部屋から退出した。

そして、あつという間に屋敷を出、結界からも出て行った。

「あいつ……なんだったんだ」

部屋に残ったマロノスの眩きが、答えを求めるかのように部屋を漂った。

「当時の私は、若かったせい、あまりに常識知らずでした。お恥ずかしい限りです」

照れくさそうに笑うルーチェに、ゼルスは苦笑し、マロノスを不憫に思えた。

事情は知らないが、人と関わりを持たないように、おそらく平穩に過ごしてきたマロノス。そんな彼が、突如としてやってきたルーチェに対し無駄な気苦労をし、部屋を破壊された。かと思えばすぐに直され、自分の好奇心がおさまればあつという間に帰られた。

要するに、マロノスはルーチェの好奇心に振り回されただけなのだ。

今のルーチェの淑女のような態度を見る限り、そのような過去があったことは信じられないが、ゼルスはこの話のせいですこしルー

チエを警戒するようになった。

今回の話でゼルスに新たに生まれた疑問。今回の話で解決された疑問と言え、この屋敷に対するほんの一部の疑問のみだ。

ルーチエが封印されていたことや、なぜゼルスがここに呼ばれたのか、なぜ精霊が現代でその存在を知られていないのかなど、ゼルスが本当に知りたいことは何一つ語られていない。

「……ようやく、表情が作れるようになりましたね」

情報を必死に整理しているゼルスだが、その表情はいつの間にか、無表情ではなく、思考を巡らしているような表情になっていた。

そう言われ、自然と手で顔に触れようとするが、手はまだ動かないようで、ゼルスの意識に反してベッドから離れない。

ゼルスは一瞬顔に影を落とすが、それ以上に表情が戻ったことに喜んだ。

やはり、感情が表現できないことが一番つらいのだ。

「そう、ですね。そういえば、俺の体の自由が利かないのって……」

ルーチエは先ほどのゼルスより顔に影を落とし、

「……私の封印を解くとき、ゼルス様から膨大な量の魔力を吸収した影響です。申し訳ありません」

と、述べる。

見事な影を落としているルーチェに、ゼルスは話題を変えようと。

「いえ。……それより、話の続きを良いですか？ 戦争の話とかもまだですし」

「……そう、ですね。では続きを話しましょうか」

ルーチェは影を落しながら話を続ける。ゼルスはネガティブな雰囲気が終わるよう、願う事しかできなかった。

ルーチェがマロノスの屋敷を出て行っただけから、ルーチェは度々マロノスの屋敷を訪れていた。

最初のうちは戸惑っていたマロノスも、次第にルーチェに慣れ、気軽に話す間柄になっていた。

そんな平凡なある日、世界を大きく揺るがす出来事が起きた。

それは、マロノスとルーチェが応接室で世間話をしているときだった。

ルーチェがカップを取りそこない、長テーブルからカップが床に落ちていく。中に注がれていた紅茶はこぼれ、青の絨毯に大きな染みを作った。

「どうしたんだ？　ルーチェ」

マロノスは長テーブルからカップを落としてしまった、らしくない失敗をしたルーチェをからかおうとルーチェの顔に眼をやったが、そこで更にならしくないルーチェを見ることになった。

ルーチェの手は長テーブルにあったカップを取ろうとした状態のまま宙に浮かび、わずかに震えている。

そしてルーチェはいつもの冷静な表情を崩し、眼を大きく見開き、口は落ち着かずに閉じたり開いたりを繰り返している。

これはただ事ではない。

そう思ったマロノスは真剣な表情になる。

「どうしたんだ」

しかしルーチェは、マロノスの声に気付かず、取り乱した。

「そ、そんな！ な、なぜ！？ ありえない……。あ……。ああ……」

うつむき、手で髪をかき上げるルーチェ。

そこにはいつもの冷静沈着で、無表情な姿の精霊はいなかった。
マロノスはルーチェの前に立ち、ルーチェの両肩をつかむ。

「落ち着け！ ルーチェ！！」

マロノスの声ですこし冷静さを取り戻したのか、ルーチェは顔を上げ、マロノスに懇願するように言った。

「……マロノス。どうしましょう……。こんなことが起きるなんて」

マロノスはこんなにも弱気なルーチェを初めてみた。

いつもどんな物事に対しても冷静でいた彼女。

精霊なのだから、怖いものなどないのだろうと考えていたが、どうやらそうでもないらしい。

一体何が、彼女をここまで追い詰めているのだろうか。

「なにが起きたんだ？ 言ってくれないか」

マロノスはできるだけ優しい口調でたずねる。
自分でも柄じゃないと思ったが、弱っているルーチェに対し、いつもの口調でたずねるのは憚られた。

ルーチェは頷くと、口を開くが、すぐに閉じる。
それを何回か繰り返す。

ルーチェが口を閉じるたび、マロノスは事の重大さをひしひしと感じ、気付けば掌はぐっしりと汗でぬれていた。

ついに、ルーチェが言葉を発した。

「……精霊が、死んだ」

マロノスは、呆気にとられた。

生きている者はどんなものでもいずれは死が来る。

以前ルーチェに精霊は不死身なのかと、聞いたことがあった。

その時のルーチェの態度は、こちらを馬鹿にした様子だったが。

「精霊とはいえ、私たちも生きているんですよ。死が来るのは当たり前でしょう。もっとも、貴方^{にんげん}たちの死とは、すこし違います」

こちらをすこし見下したような表情は今も忘れられないから、間違いないだろう。とマロノスは自分の記憶に確信を持っていた。

「……当たり前じゃないか？ 精霊も生きているんだから」

なにを当然のことを言っているのだろうか。というより、精霊も死ぬと言ったのはルーチェ自身である。

もしかしたら、死んだ精霊がルーチェと特別親しかったのだろうか。

それなら納得がいくが、ルーチェは死んだ精霊のことを名前では呼ばず、精霊と呼んでいた。普通、特別親しい者を種族名で呼ぶはずがない。

マロノスはルーチェが何を言いたいのか分からなかった。

ルーチェはマロノスの言葉に首を横に振ると、戸惑いの表情で言う。

「人間に、殺されたの」

精霊には、勝てない。古代での常識が、覆った瞬間だった。

初めての精霊殺しは、一国の王でもなく、有名な騎士でもなく、辺鄙な村に住む農家の青年であった。

それまで無名であった青年だが、精霊を殺したという事実はあつたという間に全世界に広まり、世界中の国がその精霊殺しの青年を欲した。

青年さえいれば精霊を恐れずに済む。青年さえいれば領地を広げられる。青年さえいれば。

精霊は殺せるという事実のおかげで、人々に対する抑止力がなくなり、世界は欲望のままに動く。

だが、いくら青年が精霊を殺したからといって、まだ精霊は何百と残っている。

しかも、偶然青年が殺した精霊が特別弱い精霊だった可能性もある。

精霊が、精霊国ハルレインが敗北するはずがない。

多くの国はそう考え、欲望のまま動いた国はごくわずかだった。

多くの国は、欲望に身を任し、浅い考えの国を馬鹿だとあざけ笑った。

しかし、三日過ぎ、一週間過ぎ、一か月過ぎても、その欲望に身を任した国が滅びる様子はない。

むしろ、国土を拡大し強国になっていった。

多くの国は、思った。

おかしい、と。今までの精霊は、戦争を仕掛けようとする者がいれば、すぐにその者を、必要なら国をも排除するほど徹底した制裁を加えてきた。

それなのに、今回に限って何の行動も起こしてこない。

まさか、精霊になにかの都合があり、手を出すことができないのではないか？

そう考える国が増え、やがて、欲望のままに動かなかった国も、少しずつ欲望に身を任せていく。

戦争を望まない国も、他国から戦争を仕掛けられたせいで、嫌でも戦争に参加しなければならなくなり。

そして、初めて精霊が殺された日から半年も過ぎれば、世界中で戦争が起きていた。

種族に関係なく、一日で数え切れないほどの者が息絶えた。

血で血を洗う地獄絵図。

精霊という抑止力がなくなった世界は、修羅と化していた。

「お前、こんなとこにいていいのか？」

マロノスが、屋敷の敷地の中央に立つルーチェに近づく。

「もうここがばれるのも時間の問題だ。……隣国のパラノヴェイルも堕ちたし、新たな精霊殺しも生まれた。なあ」

マロノスはルーチェの隣に立ち、

「なんか、話せよ」

悲しそうに、呟いた。

ルーチェの心は、すでに壊れていた。

初めて精霊が殺されたあの日から半年経ってなお、ルーチェが回復する兆しはみえない。

ルーチェにとってどれほどショックを与えたか、他人でも、他種族でもあるマロノスが想像することはできなかった。

（今日も、だんまりか……）

肩を落とし、屋敷に戻ろうと踵を返すと、マロノスを呼びとめる声があった。

「マロノス……」

マロノスは急いで振り向き、今の声が幻でなかったか確認する。間違いない。今の声の主はルーチェだ。半年ぶりの、ルーチェの声だ。

綻ぶ表情を抑えられないまま、再びルーチェの下に行くマロノス。しかし、その表情は、すぐに絶望へと変わった。

「私を　殺して」

「……馬鹿を言っな」

このとき、マロノスが言った言葉だ。
その日はその後、何も起きずに終わったが、翌日。

「ねえ。マロノス、私を殺して」

次の日も、また次の日も、ルーチェはマロノスに殺してくれと頼んだ。

初めはルーチェを説得していたマロノスだが、日に日に弱り、狂気を孕むようになったルーチェに耐えきれず、ある日、ついに

「わかった。ルーチェ、俺が、殺すよ」

ルーチェにその準備が必要と言い、数週間経った。

マロノスはルーチェを真つ白な部屋に連れてきていた。

その真つ白な部屋には巨大な水晶が宙に浮かび、その真下の床には大きな紋章が描かれている。

そして、その紋章を囲うように、先端にひし形のクリスタルが浮かぶスタンドが四つ立っていた。

マロノスは暗い表情で、巨大な水晶を指差した。

「あれに触れてくれ」

ルーチェは戸惑いもせず巨大な水晶に近付き、手を触れた。

すると、ルーチェは一瞬にして水晶の外から内に移動し、水晶の内側に姿を現した。

おかしくなる前のルーチェならば、この魔法はこうこうこうやって起こしている、などこの魔法に対しての推察をすこし得意げにしていただろうが、今のルーチェは死を乞い、ただ時が過ぎるのを待っているようだった。

マロノスは、そんなルーチェを見ることが耐えきれないかのように、水晶、もといルーチェから顔を背けた。

そして、床に座り込み、両手を紋章の上に置き、紋章にありったけの魔力を注いだ。

激しい魔力の奔流に、風が吹き荒れ、マロノスの衣服を激しくはためかす。

紋章に魔力を注いで三分経っただろうか、ルーチェに変化が起きた。

「ぐう……………ああああああああっ！！」

ルーチェの声でも十分感じられる、「苦しい」という生ぬるい言葉では表現できない苦痛。

ルーチェは苦悶の表情を浮かべ、息も絶え絶えに水晶を内側から叩き出した。

話が違っじゃない。ルーチェの最後を見届けようと、顔を上げたマロノスは、ルーチェの動く口が、そう言っているように思えた。

今マロノスが行使している魔法を名づけるなら、封印魔法。殺してくれ。と、ルーチェから懇願されたマロノスだったが、結

局、マロノスにはルーチエを殺すという選択はできなかった。
始めの出会いが破天荒だからといって、彼女との関係はすでに知り合い以上のものになっている。

殺すことはできないし、冷静を欠き狂気を孕みだした彼女を説得することは不可能。

結論としてマロノスが出した答えが、「封印」だった。

もしルーチエを殺しも、封印もせずに放置したならば、決して良くない方向にいくのは目に見えている。

ならば、どれくらいの時が必要なのか分からないが、ルーチエを封印して落ち着かせ、戦争が終結して何年か経ったら封印を解こう。

そして、また生意気な声を聞かしてくれ。
マロノスはそう考えていたのだろう。

水晶が輝きだし、それと同時にルーチエが内から叩く音もおさま
り、輝きが止むと、水晶の中にルーチエはいなくなっていた。

封印魔法は成功した。しかし、マロノスの表情が晴れることはなかった。

封印されたルーチエはこの後、何百年も意識さえ取り戻すことなかった。

何百年も経ち意識を取り戻したルーチエは、あの狂気を孕んでいた時のことを余り覚えていなかった。

いや、正確には、自分の記憶には狂っていた自分が残っているのだが、どうも本当にあれが自分なのか信じられなかった。

ルーチェも自分の性格くらい理解している。

精霊が人間に殺されたくらいで、自分があそこまで狂うだろうか。すこしくらい驚きはするだろうが、果たして、あれは本当に自分なのか。

可能性としては、マロノスが記憶も封印していることだ。

ルーチェがあそこまで狂った原因が他にあり、その記憶を封印しているなら、あそこまで狂うとは思えないが、可能性はある。

そして、ルーチェが記憶を封印していると考察した一番の理由が、自分の記憶にとびとびな場面が幾つもあるという事だ。

マロノスがルーチェの記憶を封印したことは、すでにルーチェの中で確定事項になっていた。

ルーチェは自分の封印された記憶を知りたかったが、それよりも、最重要課題があった。

外に出るためには、マロノスの施した封印魔法を破らなければならなかった。

しかし、ルーチェができることは思考することだけであり、魔力も未だ封印されているように扱うことができない。

途方に暮れるルーチェだが、一つの予想をした。

（今まで思考することさえできなかった自分が、今では思考することができるようになっている。まさか、封印魔法が弱まっているの

では？)

いくらマロノスが施した封印魔法とはいえ、その対象は強大な力を持つ精霊である。そう簡単に抑えられる存在ではないはずだ。

その上、きっとマロノスはルーチエに冷静さを取り戻させるために封印したと考えられる。完全に封印されるような魔法を施すだろうか。

その他にも、封印魔法を維持するには魔力の問題などがあり、完全に封印することは人間の身では不可能だ。

そう考えたルーチエは封印魔法の弱体化をまつことにし、途方もない長期戦を挑むことになった。

途方もない長期戦を挑み、気付けば封印されたところから千年以上

経っただろうか。

ルーチェはすこしだが魔力の行使が可能になり、外の精霊たちから情報をもらうことができるところまで来ていた。

だが、行使できる魔法は自分の念を魔力として飛ばすことと、この屋敷がある森の中限定の魔力感知だけで、自ら封印を破ることは到底不可能だった。

森の中限定とはいえ、魔力感知のおかげでこの森には普段住むモンスターだけでなく、度々人間が訪れることも知った。

外の精霊たちに聞くと、たびたび訪れる人間は冒険者という者であり、この森に生息する植物を採取したりモンスターを退治したりしているらしい。

腕に覚えがある者たちなのかと期待していたルーチェだが、魔力感知の結果、自分の封印を破れるほどの魔力の持ち主は全くおらず、それでも毎日訪れる冒険者に淡い期待を抱き魔力感知を行い、そのたびに落胆するルーチェだった。

中には人間にしてはなかなかの魔力を持つものもいたが、それでもルーチェの封印を破るには足りなかった。

ルーチェを封印している封印魔法は、皮肉なことに常時ルーチェの魔力を吸収してその効果を維持している。

実体化した精霊は無意識のうちに魔力を自ら生成しており、そのせいでルーチェを封印している封印魔法はおそらく千年以上もその効果を継続しているのだ。

封印魔法が弱体化しているのは、ルーチェが生成し、保有する魔力が封印魔法を維持するのに必要な魔力量のキャパシティを超え、

その魔力を吸収しきれいていないからだ。

月日がたてばその吸収しきれない魔力が増加し、いずれは自ら封印を破るくらいまでいくのではないかと、ルーチェが考えたこともあったが、それはできなかった。

厄介なことに、十年に一度くらいだろうか。この屋敷を囲う結界の効果を維持するための魔力も、なんと封印されているルーチェの魔力から吸収しているようだ。

結界を維持するための魔力を吸収されたルーチェは、もちろん魔力がほぼなくなり、その結果、封印魔法の弱体化もなくなり、外の精霊たちから情報をもらう事や、魔力感知を行う事さえできなくなる。

この事実を知ったときのルーチェは、このときほどマロノスを恨んだことはなかった。

封印魔法を破るためには、外からの協力を得ることしかなかったのだ。

しかし、ついにルーチェに幸運が舞い降りてきた。

ルーチェの魔力が順調に増加し、封印の弱体化が進んでいたある日のこと、この森の中に膨大な魔力を保有する者がいることを感知した。

この機会を逃すわけにはいかない。そう思ったルーチェは、必死にその者に対して念を送った。

ルーチェが封印されている屋敷へ行くための魔道具があるところまで導くのに成功したが、屋敷まで来ることはできなかった。

原因として、ルーチェが逸り魔力を無駄に使ってしまい、魔道具

がある位置を示せなかったからだ。

自らのミスに落胆するルーチェだが、次のチャンスに備え魔力を生成することに集中した。

意識することで生成できる魔力が増えるかは分からなかったが、何もせず待つことはできなかった。

一日経ち、三日経ち、ルーチェを救うことができるかもしれない者が現れてから一週間がたった。

永い時を生きたルーチェだったが、この時ほど時間が長く感じたことはなかった。

ついに、再び、待ち望んだ者が現れた。

ルーチェ必死にその者に念を送った。

外の精霊を通じて、その者がどんな言動をしているか、そしてその者が人間の男で、ゼルスという名であると知った。

他人に興味を持つことがすくない精霊が、人の名を知っていることを疑問に思ったが、そのことを考える余裕が彼女にはなかった。

やがて、彼は屋敷につき、ルーチェが封印されている部屋まで来た。

ルーチェの心が高鳴る。

(ついに、ついに……)

しかし、これから彼に行くことに対し、ルーチェは心が痛んだ。

これから彼に行う事は、彼の魔力を吸収することだ。それによって封印魔法の魔力量の限界容量を突破し、封印魔法を破る。

ルーチェは封印の中で表情を曇らせる。

もしかしたら、魔力を吸収しすぎて彼を殺してしまうかもしれない。

そう思ったが、ルーチェは自身を抑えることはできなかった。

千年以上の孤独は、精霊である彼女でも最上級にきついものだったのだ。

（一人は……いやです）

そう思うと同時に、ゼルスに何度も何度も謝罪の言葉を述べる。

幸いに、ゼルスに念を送らなくても、ゼルスはルーチェが封印されている巨大な水晶を囲むスタンドの上に浮遊するクリスタルを四つ、順に取っていった。

巨大な水晶が床に落ち、鈍い音が部屋に響く。

床に落ちた水晶はまばゆい光とともに砕け散り、代わりにルーチェが封印されている小さな石が転がっている。

封印はほぼ解けた。後は、ゼルスがルーチェが封印されている小さな石に触れ、小さな石がゼルスから魔力を吸収すれば終わりだ。ルーチェを直接封印している小さな石は、どうやら触れている者の魔力を吸収する魔道具のようだ。

小さな石が吸収する魔力量は桁外れに多く、急激にゼルスの魔力を奪ってしまっていたようで、ゼルスは石をつかんですこしたら倒れてしまった。

ルーチエはゼルスが倒れると、弱まった封印を利用し、ゼルスを死なせないために、急いで自らが封印されている小さな石をゼルスから離す。

だが、ゼルスが気絶するほどの魔力を吸収しても、まだルーチエの封印を解くには至らなかった。

（ごめんなさい。……でも、もう少しですから……お願いします）

せめてこれだけは……と、ルーチエは再び弱まった封印を利用し、魔法を使ってゼルスを寝室へと移動させる。

「それから後はゼルス様もご存じのとおりだと思います。私はゼルス様が封印の間に来るよう導き、再び魔力を吸収して、完全に復活することができたのです」

「……全部は理解しきれいていませんが、すこしはわかりました」

ルーチェの言った衝撃的な話を頭の中で反芻しながら、ゼルスはゆっくりと言う。

「でも、まだ理解できていないことがたくさんあるんですけど……聞いても？」

ルーチェは微笑み、

「どうぞ」

とゼルスを促した。

「まず、なんで俺は屋敷の中で魔法が使えないんですか？」

「それは、ゼルス様が屋敷に認められていないからです」

「屋敷に？」

「はい。マロノスが仕掛けた魔法なのですが、この屋敷で魔法を使うには許可がいります。私はすでに許可を得ていたので魔法を使えますが、ゼルス様はまだ許可を得ていないので魔法を使うことができないのです」

（……もうだめだ。俺の頭ではこれ以上詰め込むことはできない）

長かったルーチェの過去話でさえ頭が整理できていなかったのに、新たな情報を詰め込めるわけがなく、ゼルスは知恵熱を起こしそうだった。

「ちょっと、頭を整理する時間をもらってもいいですか？」

「申し訳ありません。唐突に話しすぎましたね……。では私は席をはずしておきますので」

ルーチェがそう言って部屋から出ようとすると、ゼルスから声が上がった。

「あ、一つだけ教えてください！　俺がこの屋敷に来てから、どれくらい経っていますか？」

「……実は、すでに六日経っています」

「え？」

「申し訳ありません。ゼルス様が、その、冒険者というのでしょうか。その仕事でこの森に入ってきたことは精霊を通じて知っていたのですが、なにぶん今ゼルス様は動くことができない状態にあるので、無駄に焦らせるよりは黙っていたほうがいいと思ひまして……」

申し訳なさそうに眉を下げるルーチェにゼルスは何も言えなかった。

冒険者協会で受けたクラウロンの依頼をどうするか、レイヴェル達にどう説明すればいいのか。

目の前に山積みの問題があるが動くことさえできないゼルスは、あまりのショックに無意識に「あー」と、声を出し、どう謝ろうかと、謝罪の言葉を考えることしかできなかった。

十八話 ルーチェの話？ はじまりは語られず（後書き）

お待たせしました。

読んでいただきありがとうございます。

2011.6.5（Sun）

はくゆ

十九話 外道

グアロス城に並列して造られているグアロス騎士団の団舎の敷地内には、十六存在する隊それぞれに一つずつ、修練場が設けられている。日頃から団員達の修練に使われている修練場だが、現在、一つの修練場の様子がおかしかった。

七、八人に観戦されながら、戦い合う男と女の姿がある。その男と女の表情は対極。男はうすら笑いを浮かべ、どこか人を見下しているようなかのように剣を取り、女は、自らの怒りを抑え、無表情に、冷徹に剣を振るっていた。

二人の決闘を観戦する人間も様々で、他人事のように気味が悪い薄ら笑いをしている者もいれば、二人の決闘を真剣に観戦している者、不安そうに事の成り行きを見ている者もいた。同じところと言えば、理由はどうであれ、彼らはこの決闘を止めるつもりはないという事と、当然のことだが、決闘をしている二人を含めて、全員が黒と金を基調にした、この国、グアロスの騎士団員にしか身につける事ができない鎧を着ているという事だ。

二人が何度目かの剣を交え、離れ、地面に生える芝生の目が乱れ始めたとき、男が口を動かした。それに対し女は片眉を上げ、一瞬だが、顔を怒りに変える。それに気を良くしたのか、男は口元を緩め、得意げに剣の切っ先を女の顔に向けて言葉を発そうとする。が、それは女によって妨げられた。

女は男が目視できない速さで、剣を鋭く左下から右上へと振り切

り、自分の眼前に在った男の剣を、男の手から弾いた。甲高い金属音とともに宙を舞った剣は、男の後方の芝生に刺さり、同時に、この場の雰囲気を引き締めた。

周囲の人間はこの瞬間、男が言った言葉は、この女にとって禁忌であることを知ったが、すでに遅かった。無表情を止めた女を、止める力も、止める権利がある者も、この場にはいなかった。

「取り消せ」

女は、冷たい蒼い眼光を鋭くし、相対する男を睨みつけていた。手に握るは真剣。いつの間にか、切っ先を男の喉元に突き付けている。先ほどまで余裕の表情していた男はいない。先ほどが嘘かのように目前となった死の恐怖で顔を引きつらせ、口を半開きにし、情けない表情で女を見る。女は男の間抜けな表情を見ても、氷のように冷たい瞳を崩さなかった。

「お、おいおい……。何も、そこまでキレる事はないんじゃないの？」

男は、女が喉元にある剣を動かさないことを祈りながら言う。本音を言えば、すぐさま謝り剣を喉元から退けてもらいたかった。しかし、男のプライドが、女に弱いところを見せる事を許さなかった。その男のプライドのせいで、謝るところか、余計なことまで言うてしまう。

そもそも、男は女がこれほどまでに取り乱すとは思ってもいなかった。

った。大の男嫌いということで、騎士団の中でかなり有名だった女。それが普通の女ならば、王国騎士団全員が知るほど有名にはならなかっただろうが、生憎、彼女は普通ではなかった。彼女は、輝いているかのような金髪に、意思の強い蒼い瞳、そして、男の目を奪う豊麗な見事な肢体を持っていた。まるで、神から創られたと思ってしまうほどの、美貌の持ち主だった。

そんな彼女を、大の男嫌いだからといって世の中の男が放っておくだろうか。少なくとも、この男は彼女を放っておくことなどできなかった。男は自分に自信があった。エリートしか入団できない王国騎士団の中でも、一般の団員にはほぼ負けなしで、それに加えて綺麗に整った端正な顔立ちをしている。実力と甘いマスクで何人もの女を落としてきた自分なら、大の男嫌いと言われる女も自分のモノになる。男は、信じて疑わなかった。この瞬間までは。

「取り消してください。彼は」

女は、続く言葉を言うことを止めた。喉元まで来た言葉を、グツと飲み込んだ。女の冷たい瞳が、悲しげに揺れる。その瞳を間近で見た男は、喉元に剣を突き付けられている事すら忘れ、魅入った。男にとって、初めてみる女の表情だった。今まで付き合った女は何人もいたが、これほどまでに魅かれたのは初めてで、男は、男嫌いの女に好かれる噂の男にひどく嫉妬した。その瞳が向けられるのが何故自分ではなく、噂の男なのか、と。

「貴方たちは、何をやっているのですか？」

突如かかる声に初めに反応したのは、決闘している男と女を観戦している者たち。修練場の入り口から微笑みながら歩いてきた男に對し、観戦していた者たちは一斉に礼をした。その礼をされる中、男は歩く。黒と金を基調にしたグアロス騎士団の鎧を着込み、赤のマントをはおっている。体の線が細ければ、目も細く、微笑んでいるからかもしれないが、まるで一本の線のようだ。糸目の男は黒の髪と赤のマントを靡かせながら歩を進め、決闘している男と女の前に立つ。

「オネスト。剣を下げなさい」

男の喉元に剣を向けたままにしている女　レイヴェル・オネストに對し、糸目の男は微笑みを絶やさぬまま、まるで幼子をたしなめるように言った。

それに対しレイヴェルは、なかなか剣を下げず、未だに冷たい瞳で男を睨み続ける。その様子を見た糸目の男は、軽く息を吐く。

「オネスト。僕は君が理由もなくこのようなことしている訳ではないと分かっています。おそらく、システイアートがよほど無礼な事をしたのでしょう。ですが、どうか僕の笑顔に免じて、許していただませんか？」

レイヴェルはゆっくりと糸目の男へと顔を向けると、

「……副隊長が笑っていない顔は、見たことがないのですが」

と、言いながらも、大人しく剣を腰へとなおした。

レイヴェルから剣を喉元に突き付けられていた男、システイア―トが隣で安堵の表情を浮かべる中、レイヴェルは糸目の男に対し、深々と礼をした。

「大変申し訳ありませんでした。どのような罰も、お受けします」

「ん……？ 罰？ 君が、何か悪いことをしていましたかねえ……」

肩を組み、とぼけたように首をかしげる細目の男。常に頬笑みを浮かべているこの男は、レイヴェルが所属する一番隊の副隊長であり、名をヴォルテ・フィンランという。副隊長でありながら隊長クラス以上の実力を持っているのは、騎士団の中では有名な話だ。本来なら隊長になっておかしくない、いや、隊長になるべき実力を持っているのだが、あることが原因で、隊長になることが叶わずにいた。

レイヴェルは顔を上げると、姿勢を正す。

「私は、同じ騎士団の一員である者に、私情で剣を突き付けました。騎士団の規則では」

「そのことですか……何か問題でも？」

ヴォルテの切り返しに、言葉を失い、啞然とヴォルテを見返すレイヴェル。そして、ヴォルテはまるで当然のことを話すかのように、言葉をつづける。

「騎士団の規則でいうと、確かに君は罰さなくてはなりませんね。ですが、それが何だというのでしょうか？　ここにいるのは僕です。規則ではありません。なぜ僕が薄っぺらい紙に記された文字に従わなくてはならないのですか？　いいですか　」

話しているヴォルテを見て、レイヴェルは思いだした。隊長クラス以上の實力を持ちながら、ヴォルテが副隊長の地位にいる所以を。それは、彼の性格があまりにも

「僕の言う事が、すべてなのです」

自己中心のだったからだ。

清々しいまでに言いきったヴォルテに、レイヴェルだけでなく、システイアートも、周囲の人間も茫然としていた。

ヴォルテはいつも笑みを浮かべ穏やかな顔をしているが、その顔から予想される協調性は全くなく、逆に凄まじく自己中心のだった。實力でいえば隊長でさえ凌駕するのではないかと騎士団では噂されているが、その實力を考慮しても、あまりにひどすぎる自己中心的な性格のせいで隊長になれず、副隊長におさめられていた。

「オネスト。今日はもう帰りなさい」

茫然としていたレイヴェルに、ヴォルテが帰るように促す。真面目なレイヴェルは反論しようとしたが、ヴォルテの無言の圧力に耐え切れずに口を閉じ、「失礼します」と礼をし、素直にその場を後にした。

「さて、と」

去っていくレイヴェルの背中が見えなくなると、ヴォルテは残った団員達を見渡す。団員達は肩を竦め、ヴォルテが何を言い出すのかと戦々恐々と待っていた。

「君と君と……それと君たちは帰っていいよ。お疲れ様」

ヴォルテは次々と団員達を指差す。指を差された団員達は、ヴォルテに礼をして帰り、残ったのはシステイアートと、二名の団員。レイヴェルとシステイアートの決闘を気味の悪い薄ら笑いを浮かべながら見ていた二人だ。

三名とも神妙な顔で立ち、背中を冷や汗でグツシヨリと濡らしていた。

「何故、君たちが残されたか分かりますか？ …… まあ、分からないでもいいのですが。どうせ、やることは同じですし」

声のトーンも微笑んでいる顔も、いつもと全く同じなのに、残された三名はこの時のヴォルテが人間の顔を被った別のナニカにしか見えなかった。

「シ、システイアートはともかく、何故私たち二人も残されているのでしょうか」

残された団員の内、決闘を傍観していた男の片割れが勇気を振り絞って言った。もう一方の片割れも、その言葉に同意するように激しく同意する。

「そうです。私たち二人は見てただけで、オネストと決闘などしていません」

この二人が騎士団に入団したばかりの新人でなければ、決してヴォルテにこのような口の聞き方をしなかっただろう。騎士団の先輩からヴォルテについて聞いてはいたが、実際にその实力を見たわけでもないし、ヴォルテを外見から判断すると、体の線の細さから、とても騎士団の副隊長を務めているとは思えないからだ。簡単に言う、この二人は完璧にヴォルテを賞めていた。ヴォルテは二人の言葉を鼻で笑うと、

「何故か？ そんなもの決まっているじゃないですか。僕は君たちがム力つくんですよ。それが、理由です」

「な……！ そんなことで納得するわけ」

「いいんですよ。納得しなくて。ただ君たちは、僕に蹂躪されればいいんです。……システイアート？ 元気がないですね、どうしたのですか？ 僕が君たちを蹂躪する前に、何か言いたいことはないですか？ どうぞ、三人を代表して言っつていいですよ」

突如ヴォルテから指名され、心臓が飛び上がるほど驚いたシステイアートだが、震える体を無理やり抑え、勇気を振り絞って口を開く。

その瞬間、強烈な黒の衝撃波が、三人を襲った。

システイアートの勇気を嘲笑うかのように、強烈な黒の衝撃波はシステイアートを始めとした三人を、鈍い音とともに紙きれのよう

に吹き飛ばす。吹き飛ばされた三人は後方にある塀に突撃し、地に伏した。三人がうめき声を上げつつ、必死に立ち上がるうとしていると、いつもどおりの微笑みを浮かべたヴォルテがやってきた。

「申し訳ないですね。システイアートがあまりにも言うタイミングが遅かったもので、すっかり魔法を使ってしまった。いやいや、本当に申し訳ないです」

「ふ、副隊長……」

システイアートがヴォルテを弱々しく、許しを請うように見上げると、ヴォルテは心底驚いたような反応で。

「おや、強化魔法を使っていなかったのにまだ気絶していませんでしたか。騎士団の方々はやはり優秀ですね」

ヴォルテは三人が気絶しない威力に調整した魔法を使ったくせに、平然と嘘をつく。最早三人の目の前にいるヴォルテは、三人にとつて悪魔にしか見えなかった。それも、とびきり残酷な。

「……そういえば、なぜオネストがあそこまで激昂したか聞いていませんでしたね。君は、一体なにをしたのでしょうか」

オネストが修練場を去る時、まだ随分と怒っていましたよ？ と、ふと思いついたかのように、ヴォルテは三人に向かつて尋ねる。吹き飛ばされた衝撃のせいで、システイアートは苦しそうに答える。

「……オネストが、ここ最近、必死に探してる……男がいて……」

「オネストが、ですか」

ヴォルテは、単純に驚いた。大の男嫌いであるレイヴェルが一人の男を探している姿など、考えられなかった。

「それで……探し始めて二週間経っているみたいだったから、もう死んでるんじゃないか……って俺が決闘中に言ったら」

「なるほど。剣を喉元に突き付けられたと」

システイアートが頷くと、ヴォルテは右手を口元に当てる。

（あのオネストが執着する男性、ですか。……これは興味がありますね。）

考え出したヴォルテに、三人はこのままヴォルテが自分たちを蹂

躡せずに修練場を去るのではないかと、飛びつきたいほどに甘い考えが脳裏に浮かんた。そう思ってしまうほど、三人に対するヴォルテの興味がなくなっていくさまが見て取れたからだ。

「名前は？」

「は、はい。確か、ゼ……ゼルスです！」

「ゼルス……」

システイアートは、助かりたい一心でゼルスの名を言った。ヴォルテのゼルスに対する興味も上々で、もしかしたら、本当に自分たちへの蹂躪はなくなるのではないか、という甘い考えも現実味を帯びてきた。

三人は、次にヴォルテが発する言葉を、うるさい心臓の鼓動を感じながら待つ。

「君たち、ありがとうございます。お礼と言っではなんですが」

三人の顔が徐々に喜色に染まると、そのタイミングを狙っていたかのように、ヴォルテは優しく囁いた。

優しく落としてあげます。

三人の顔が絶望に染まるより早く、頭上からの黒の衝撃波が三人を襲い、三人は意識を失った。

意識を失った三人の前には、相変わらずの微笑みを浮かべ続けているヴォルテ。

「あのオネストが探している男　ゼルス、ですか。うーん。何か、
においますね。もしや、最近オネストが不調なものも、その男が原因
？　……確か、オネストの班長はラディオオーゾでしたね」

ヴォルテは、探ってみますか。と呟くと、気絶した三人を放置して、修練場を後にした。

十九話 外道（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

2011・6・23（Thu）はくゆ

二十話 夜の森にて藍色と

レイヴェルが修練場から退出し、王国騎士団の団舎を背に向け家路へと向かうところ、その姿を王国騎士団の団舎の入口付近で二つの影が見ていた。レイヴェルの姿が完全に見えなくなると、二つの影の内小さな影の方が、大きな影を見上げ、心配そうに尋ねた。

「カルマ、ゼルスは……？」

大きな影　カルマは、その問いに対し力なく顔を横に振る。期待していなかったとはいえ、面と向かって言われ現実のものとなると、やはり少なからずショックを受けてしまう。大きな影に尋ねた小さな影　アルリノは、髪と同じ緑の瞳を沈ませる。落胆した上司を慰めるため、カルマは、ものぐさな黒の瞳を普段よりましにさせて　それでもまだ生気が少ないように思われる　声をかけた。

「俺ができることはゼルスを探すことだけだが、お前は違うだろ？　いつもの有り余ったガキみたいな元氣と馴れ馴れしさを、いま使わなくてどうするんだよ。班長」

「……ねえ、ずっと思ってたんだけどさ、カルマって私の事絶対馬鹿にしてるよね」

「まさか。そういえば」

カルマが会話をつづけようとしていると、カルマとアルリノが突然、修練場の方向に注意を向けた。

「副隊長はまだ暴れてないな　　って言おうとした矢先にこれか。副隊長、使ったな」

「そうつばいね。黒衝波……よね、この魔力の感じは。いい気味」

アルリノは黒衝波の被害を受けたであろうシステイアートの事を想像し、嘲笑う。副隊長のおしおきが一度で終わるはずがなく、きつとこの後もいろいろとおしおきを受けることはわかっていたが、それでもシステイアートに同情することはなかった。実際にそのおしおきを受けているのはシステイアートのほかにも二人いるのだが、そのことをアルリノが知るはずもなく、また、知ったとしても同情はしなかっただろう。

アルリノの怒りに気付いたカルマは、言いにくそうに口を開いた。

「……さつきは、悪かった」

「ん？　ああ、私がレイヴェルとナルシスト馬鹿システイアートの決闘を止めようとしたのを、誰かさんが止めた事かしら？　いいわよ、ぜんっぜん気にしてないから」

思いつきり気にしてるじゃないか。カルマがそう思い、どう窘めるか考えていると、

「気づいてたんでしょ？ あの時も副隊長が近くにいたって」

と、アルリノが言った。その言葉に、カルマはすこし面喰った。アルリノはそんなカルマを見て悪戯っぽく笑い、ところどころカルマの真似をしながら話したず。

「どうせ、あの時私が止めに入ってたら、私が苦手にしてる副隊長とかち合せになるし、班長として（外見のせいで）嘗められてるアルリノが注意するより、おっそろしい副隊長がおしおきた方が後々都合が良いだろう。とか考えたんでしょ？ さっすが我が十八班の副班長！ 私が苦手な副隊長と会わせず、かつ、レイヴェルが今後ナルシスト馬鹿に付きまとわれないようにする最善の案をあの瞬間に考えつくなんて。頭が上がんないわ、パチパチパチー」

アルリノが「パチパチパチー」と棒読みの声と揃えた拍手を終えると、急に真面目な表情に変える。「過大評価だ」と苦笑していたカルマは、今度は何だ？ とコロコロ表情を変えるアルリノを警戒する。

「ゼルス、本当に何処に行ったのかしらね」

「分かっていると思うが」

「ゼルスを探すな。でしょ？ それくらい、私もわかってるわよ」

アルリノは言葉とは裏腹に、納得できないように言った。ゼルスを探すことをしてはならない。これは、カルマ、アルリノの二人が決めたことであり、レイヴェルとその母クラニカにも伝えている事だ。

ゼルスは現在、クラニカの親戚という立場にしている。レイヴェルの家に居候しているゼルスをカルマとアルリノが探すことは、十八班の仲間意識から考えると、特に不自然ではないだろう。しかし、ゼルスをグアロス王国騎士団の班長と副班長が探しているとなれば、すこしばかり噂が立ってしまう。そのことは、ゼルスを目立たせたくないアルリノ達にとって好ましくない。ゼルスという存在を、あまり知られるわけにはいかないのだ。

「でもさあ、最近、私たちのゼルスを知られないようにする努力が、まったく意味がないように思うのー。っていうか、無駄？」

「無駄……にはなっていないだろう？」

「いーえ！ なってるわよ。だって、レイヴェルが辺り構わずゼルスのこと聞いてるんだもん。あのレイヴェルが男のこと聞いてるんだから、きっと私たちが探すよりすっごい噂になってるわよ」

「それは……知らなかった」

カルマは両目をつむり、思い悩むように指で瞼を撫でる。カルマにとって、レイヴェルのゼルスに対する執着心が其処まで強いのは予想外だった。

「ねえ、だから、私たちもゼルスを探して、早くレイヴェルを落착かせた方がいいと思うの。そうしない？」

(……俺達が処罰を受けるのも、そう遠くないかもな)

副班長は、遠くない未来にゼルスの事が発覚し、その件で処罰を受けるカルマ、アルリノ、レイヴェル、クラニカの姿がありありと想像でき、期待するように緑の瞳を輝かせる班長に、深く息を吐いた。

カルマとアルリノに見られていたとは露も知らず、レイヴェルは家へと向かっていた。王国騎士団の鎧はもう着ていない。黒のズボンに、白のシャツを着た思いっきりラフな格好をしている。

ゼルスは、死んでるんじゃないのか

ヴィゴリーレの住宅街を歩くレイヴェルの脳裏に、システイア
トが決闘中に言ったふざけた言葉がよみがえる。

「ふざけるな……」

レイヴェルは歯をかみしめ、独り呟く。しかし、心の何処かで、
その悪夢を可能性として考え始めている事も事実だった。レイヴェ
ルはそのことを考える自分に心底嫌気がさし、自分自身に苛立つて
いた。そう、レイヴェルが修練場で怒っていたのは実は自分自身に
だった。確かにシステイアトから言われた言葉がきっかけでキレ
たのは事実だが、レイヴェルにとってシステイアトなど道端の石
ころと同意であり、つまるところどうでもいい存在だ。そのような
存在に何を言われても、痛くも痒くもない。

ただ、そのシステイアトの言葉により、自身がゼルスが死んで
いるのではないか。という思いを心の片隅にでも抱いていた事実を
気付かされたことに、レイヴェルは自身に激しい怒りを感じていた
のだ。修練場でシステイアトに剣を突き付けたのは、八つ当たり
に近い。レイヴェルは自分の情けなさに深くため息をついた。

二週間前、ゼルスが初めて一人で冒険者協会の依頼を受け、それ
以来帰ってきていない。レイヴェルは信じる事ができなかった。

聞くところによると、ゼルスが受けた依頼はバージリン森林での薬草採取の依頼であり、どう考えてもゼルスがてこずるような依頼ではない。

依頼主であるクラウロンに依頼達成の報告にも来ていないことから、単純に考えるとバージリン森林で命を落としたか、途中で依頼を放棄して何処かへ行ったか、何かアクシデントがあり、帰ることができないかのどれかだろうか。

（ゼルスが死ぬことは考えられないし、途中で依頼を放棄するような無責任な人でもない。そう考えたら、何か問題があって帰れなくなった……くらいしかないけど）

果たして、ゼルスが対処できない問題などあるのだろうか。戦闘に関してはそんな問題は万が一にもないだろう。と、レイヴェルは思っている。だが同時に、万が一にもない、ということはあり得ない、ということも彼女は知っていた。故に、考えてしまう。ゼルスの死を。

気付けば、レイヴェルは立ち止り、一軒のパン屋に眼を向けていた。

なあなあ、レイ。あの良い匂いがする店ってなんだ？

初めてゼルスとヴィゴリーレを訪れたときを思い出し、ズキン、と、レイヴェルは胸の奥が痛み、瞳に涙がたまる。ゼルスの事を思い出すだけで、彼女は底のない悲しみを感じてしまう。自分の事を一欠けらの下心を持たずに接してくれた、初めての男性。あの純粹

な瞳をこちらに向け、無邪気に笑ってくれた。

一週間同じ屋根の下で暮らし、世間一般の常識を覚え、敬語も覚えたゼルス。敬語を覚えての頃、レイヴェルにも敬語を使い、彼女は急にゼルスとの距離が遠く感じ、ひどく傷ついた。他の人ならば、たとえばアルリノでさえ彼女に敬語で接するようになって、彼女はすこしも傷つかなかっただろう。

彼女は、泣きそうになりながら、ゼルスに敬語を使うのを止めてくれと頼んだのを覚えている。ゼルスがレイヴェルに敬語を使うように指示したのが自らの母であるクラニカであると知った時は、途轍もない怒りを感じたことも覚えている。

ふと、レイヴェルは自分が笑っている事に気付いた。今までの人生で思い出で笑えたことが片手で足りる彼女にとって、とても珍しいことだった。きっと、ゼルスと出会わなければ、彼女は今のようには笑えていなかっただろう。幼き頃の環境のせいで、彼女は非常に喜怒哀楽の表現に乏しかったのだ。

ゼルスが居なくなっってから、彼女は弱くなったことを自覚していた。仕事でもそれが如実に表れていたし、何より、ゼルスのことを心配するあまり体が思うように動かなくなったからだ。ゼルスと出会わなければ、こんなに弱くなることはなかっただろうが、彼女はゼルスとの出会いを後悔することは絶対になく、逆に、彼女はゼルスを失うことを最も恐れていた。ゼルスがいなければ生きている価値がない。そう思うほど、彼女はゼルスに依存していた。

実を言うと、レイヴェルはゼルスがいるときは今ほどゼルスに依存していなかった。ダンジョンでゼルスと出会ったときこそ、ゼルスと、いわゆる良い感じになっていたが、ゼルスと一緒に暮らすようになって、当時のようになったことは一度もなかった。

レイヴェルは本音を言えば、ゼルスと一日中一緒に居たかったし、恥ずかしいが、当時のような雰囲気になりたかった。しかし、ゼルスは冒険者協会に行つてほぼ家に居なかったり、家に居てもクラニカも居るせいで、恥ずかしくて思うようにゼルスに甘えることができない。それに、ゼルスを自分の我儘で家に縛りたくなかったのだ。

レイヴェルはパン屋から眼を離すと、一つの事を心に決めた。

（ゼルスが戻ってきたら、前の分も含めて、今度こそ精一杯甘える！）

そう決意したレイヴェルは、駆け足で我が家へと向かった。

「お母さん！」

レイヴェルは家のリビングに駆け込むと、第一声にそう言った。テーブルに着き、物思いに耽っていたクラニカは、眉尻を下げた期待と悲しみが混じった不安な表情でこちらを見るレイヴェルに、無

言で首を横に振る。

とたんに、レイヴェルは深くため息をついたが、次に、決意するような表情に変えた。

「お母さん、私、ゼルスを探してくる」

レイヴェルが仕事が終わった後、ゼルスを探しに行くのは日常となっているが、今日のレイヴェルはいつものレイヴェルと違う。そう敏感に感じ取ったクラニカは、最愛の娘に問う。

「探しに行くって、何処に？」

「……もう一度、始めからゼルスの足取りを確認しようと思って」

すこしの間があったが、ゼルスが居たころ以来かもしれない久しぶりの笑顔で返すレイヴェル。これが普段のレイヴェルだったらよかったが、生憎、いまのレイヴェルは普段とは違うように感じる。だが

「そう。気をつけて行ってくるのよ」

残念ながら、クラニカはそのことに気付かなかった。いや、すこしおかしいと感じていたが、自分が疲れているせいだろうと思って

しまった。普段のクラニカならすぐさま気付いただろうが、ゼルスの探索での疲労とゼルスへの心配のせいで、ストレスが積み重なったためか。

「うん。じゃあ、行ってくるね」

レイヴェルはそういうと、すぐさま玄関へと翻り、「いつてらっしゃい」というクラニカの呟きを背に、外へ出て行った。再び静けさを取り戻した家の中で、クラニカはこの家で育てている唯一の花に眼をやった。丸みを帯びた柔らかい赤の花弁は、重力に従うことなく上へ上へと咲き誇り、おれそうなほど細い茎は、その細さとは裏腹にとてもかたく、どっしりと花を支えている。

この花、クラニカみたいに綺麗だ

(どこの女つたらしよ)

クラニカはゼルスが言った事を思い出し、呆れた。呆れてしまうが、頬が緩み思わず、微笑んでしまう。ゼルスが嘘をつけないことは、ここ一週間共に暮らしてよくわかった。自分の思いをごまかして伝えることが上手くなく、そう伝えようものなら、百人中百人が、ゼルスが嘘をついていることが分かるだろう。

だが、そのゼルスだからこそ、言ったことが本当に想って言ったことということが分かる。クラニカは当時は適当に流したけれど、実は嬉しくてたまらなかった。誰しも、自分が好きなものと同じだ

と、そのうえ綺麗だと心の底から言われて、嬉しくならないわけがないだろう（例外はあるかもしれないが）。

クラニカは花から視線をそらすと、レイヴェルが出て行った扉の方向に目を向け、ようやく笑顔をつくったレイヴェルを思い、柔らかに笑った。

（娘が元気になろうとしてるんだから、私がウジウジしてちゃダメよね）

クラニカは両手で頬を叩いて気合を入れた。だが、結局レイヴェルの嘘に気付くことはなかった。

日が落ち空が黒に塗りつぶされる時間。俗に言う夜、バージリン森林の中の道なき道を突き進むレイヴェルの姿があった。彼女はクラニカに言ったとおりの、ゼルスの足取りを始めから辿る。という気は始めから一切なかった。彼女は始めからこのバージリン森林に来ることが目的だった。最終目的地はバージリン森林の中央部。バージリン森林の中央部にゼルスが居るとは限らない。だが、ヴィゴリーレの近辺で探していないのはもうここしかないのだ。

しかし、ここで一つ問題がある。目的地であるバージリン森林の

中央部は、レイヴェルの強さで到達できる場所ではない。一人で行くとクラニカに言えば、確実に止められていただろう。まあ、それがレイヴェルがクラニに事実を告げなかった理由の一つなのだが。もう一つの理由は、クラニカに事実を告げると、クラニカも一緒についてこようとする場合がある（こちらの方が確率は高いだろう）。単純に考えれば、冒険者ランクAのクラニカがついてきてくれた方が、はるかに安全だろう。しかし、レイヴェルの感情が、クラニカとともにゼルスを探すことを邪魔していた。

馬鹿なことかも知れないが、レイヴェルはクラニカにゼルスを見つけて欲しくなかった。レイヴェルは、ゼルスに関してただが、クラニカを母としてではなく、敵だとみなしていた。レイヴェルは、クラニカがゼルスと良い雰囲気になっているのを何回も目撃していたからだ。レイヴェルは、自分でも馬鹿だと思っていたが、ゼルスの事を思い出したからか、どうしても今日だけは我慢できなかった。

レイヴェルが足元に茂る雑草、地面を突き出る木の根に上手く対応しながら進む姿は、流石は王国騎士団員といえた。道中に出現するモンスターを危うげなく倒し、今も、Dランクモンスターのバイグル　ネギのような外見で植物に擬態し、しびれ毒を持つ　の擬態にすぐさま気づき、走りながら一閃のもとに沈めていた。

（バイグルは確かDランク……中央部はまだ先ね）

バージリン森林は中央部に進むほど敵が強くなる傾向があり、遭

遇するモンスターによって、どれほど中央部に進んだのか的確に知ることができる。おおまかにいうと、森の入り口から中央部までの距離を四分割して、入口からEランク、Dランク、Cランク、Bランクと上がっていく。このことから、レイヴェルは中央部まであと四分の二までの距離に來ていることが分かる。

（すこしスピード上げなきゃ……）

レイヴェルは強化魔法を施し、更に奥地へと入っていく。

バイグルを一閃の下に伏してから、二時間が経った。現在レイヴェルは、バージリン森林の入り口から中央部の四分の三の位置に來ていた。正確に言うと、あと少しで中央部に到達するという所までだ。

それなのに、レイヴェルはいま茫然と立ち尽くしていた。常人なら、疲労でそのようになってても不思議はないが、ゼルスを見つけ出すなら死をも恐れない。という気概になっているレイヴェルがそのようになるのはあり得ない。原因は、レイヴェルが瞳に映すモノにあった。

レイヴェルの瞳に映るは、五体のモンスター。内四体は同じモンスターであり、大型犬ほど大きさの、いうならば巨大サソリが其処に居た。黒光りする甲殻は岩のように固く、六本ある脚のうち、二本の前脚の先にある凶悪なハサミは鋭く、人間などすぐに切り裂いてしまっだろう。さらに、クルリと上に向いた尻尾の先端のトゲは毒針で、大抵の生き物を殺してしまう遅効性の猛毒を持っている。

Cランクモンスター、ヴァルチュア。

ただし、Cランクというのは個体での場合であり、ヴァルチュアは基本個体では行動せず群れで行動し、抜群の連携を見せる。群れでモンスターランクをあらわすなら、ヴァルチュアはAランク。個体ではCランクだが、実質バージリン森林では最も強く、遭遇したくないモンスターとなっている。

その四体のヴァルチュアに囲まれ、数のうえでは圧倒的不利なのに、それをものともしないように存在するモンスターが一体。そのモンスターは通常バージリン森林に生息するはずがないモンスターであつた。

（な、なんでこいつがここに……！ Aランクモンスター、ジルギルスー！！）

藍色の体の、森には不似合いのモンスター。その身には余計な部分は一切なく、すべてが敵を蹂躪するために存在する。細いが全身が強靱な筋肉に包まれ、生半可な攻撃を通さず、四肢を巧みに扱い巨体に似合わず俊敏な動きで敵を翻弄する。体で唯一藍色でない紅の瞳は、敵を射殺してしまうかのように獰猛で、口からのぞく牙はすべてをかみ砕いてしまうかのように凶暴。背から生える翼を大きく広げ、咆哮するその姿は、覇気溢れる、まさしくドラゴンの姿だつた。

ジルギルスの、鼓膜が破れるかと思うほどの凄まじい咆哮に圧され、レイヴェルは後ずさる。しかし、四体のヴァルチュアは咆哮を合図にするように、一斉にジルギルスに襲い掛かった。レイヴェルは不思議に思ったが、実はヴァルチュアは音を判断する器官がなく、代わりに熱や魔力を感じ取る器官が発達しており、それらに加えて視覚ですべてを判断する。それ故に、ジルギルスの咆哮はヴァルチュアに何の効果もなく、ジルギルスはヴァルチュアに襲ってくれと言わんばかりの隙を与えてしまったのだ。

ヴァルチュア達の攻撃は、ハサミはジルギルスの体を傷つけることすらかなわずに、分厚い筋肉の前に止まり、毒針はかろうじて刺さるが、毒だけでなくあらゆる身体異常に抵抗が強いドラゴン系モンスターにとって、その程度の毒の量では何の意味もなかった。

咆哮を終えたジルギルスは体を低くし、四肢をねじるようにして力を溜め、一気に爆発させた。巨体を一秒に何回転も回転させ、体に纏わりついたヴァルチュアたちを、周りの草木とともに一気に四方へと吹き飛ばす。運良く吹き飛ばされなかった一体のヴァルチュアも、回転と同時に広げた大きな翼に当たり、他のヴァルチュアと同じ道をたどった。

レイヴェルはその光景を啞然として見ていた。レイヴェルとジルギルスとの距離は約二十メートル。その距離に居たのに、風圧がレイヴェルの所に訪れ、レイヴェルをよろめかせる。だが、それもそのはず。ジルギルスの周囲は、木々がごっそりなくなっていた。辛うじて、木々の根元がいくつか残っているだけ。ジルギルスがもう一度咆哮をし、空気がビリビリと震える。この咆哮が、ジルギルス

の勝利の咆哮かはわからないが、確かなのは一つ。
ジルギルスの獰猛な紅の瞳が、立ち尽くすレイヴェルに向けられ
た。

二十話 夜の森にて藍色と（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

2011・07・24（Sun）

はくゆ

二十一話 乱舞・雷

レイヴェルは震える足に湯を入れ、剣を抜き、斜に構え、こちらを睨むジルギルスを睨み返す。バージリン森林に生息するはずのないジルギルスが何故ここにいるか分らないが、今はそんなことを考えている場合ではない。と、レイヴェルは乱れる呼吸を落ち着かせる。既に体力が疲弊している自分がジルギルスに勝てるとは思っていないが、ゼルスと会うためにはジルギルスに殺されるわけにはいかない。すでにレイヴェルには勝つという選択肢しか残されていないのだ。

ジルギルスが一步レイヴェルに向けて力強く脚を進めると、レイヴェルの後ろから、カサカサと草を掻き分け、森の中を何かが進む音が聞こえた。

（まさか、ヴァルチュア？）

レイヴェルの予想は見事に的中。ちらりと後ろを見れば、先ほどのジルギルスの回転で吹き飛ばされたヴァルチュアが三体、レイヴェルの後方に。黒の甲殻は、夜も相まってヴァルチュアの姿を視認することを困難にする。ジルギルスを相手取ること自体、不可能に近いのだが、そのうえ環境が味方したヴァルチュアをも相手にしなければいけないのか。と、レイヴェルは分が悪すぎる戦いに、恐怖で剣を持つ手が震える。

しかし、敵が待つてくれるはずもなく、最初に行動に出たのはヴァルチュアだった。前脚のハサミを力チ力チと鳴らしながら、俊敏な動きでレイヴェルへと向かう。

「炎刃……！」

レイヴェルは炎を剣に纏わせると、三体のヴァルチュアを一閃しように構える。が、その時急激な魔力の高まりを感じ取れた。発生元は背後。それが意味することは

（やばいつ！）

思考するよりも早く、レイヴェルはなりふり構わず右の茂みへとダイブした。直後、圧倒的な熱を持った蒼い炎が、レイヴェルが元いた場所を襲い、見事三体のヴァルチュアを飲み込んだ。

蒼炎^{そうえん}。

文字どおりの蒼い炎であり、ジルギルスを象徴する炎である。その炎に飲み込まれたモノは何も残らず、一瞬にしてその存在を消される。現に、蒼炎に飲み込まれたヴァルチュアの姿は、まるでそこに最初から何もなかったように、その存在をなくしていた。

蒼炎 のせいで草木も燃えつくされ、直撃を逃れた草木も、蒼炎 の常識外の高い熱により、蒼の炎で今もメラメラと燃えている。蒼炎が直撃した周囲は蒼の炎に包まれ、これが祭りならば、単純に綺麗だと感じられただろうが、生憎、その綺麗な炎も今は脅威

でしかなかった。

レイヴェルは立ちあがり、炎を纏う剣を構える。

炎の光のおかげで、レイヴェルはようやくジルギルスの全身を見ることができた。

獰猛な藍色のドラゴン。それがレイヴェルがジルギルスを一目見ての感想だった。凶暴そうな牙が生える口からは、涎が出ており、その紅の瞳はレイヴェルを獲物としてとらえていた。

（どうするどうするどうする！）

蒼炎を避けたのはいいが、レイヴェルはジルギルスに攻撃する手段が全く思いつかなかった。せめて魔力に余裕があればすこしは戦えたかもしれないが、ここにくるまで少くない数のモンスターと戦ったレイヴェルは、魔力に余裕がなかった。

パニック状態のレイヴェルが生み出した不注意。レイヴェルがジルギルスから眼をそらした瞬間を、ジルギルスは見逃さなかった。

ジルギルスは力強く地を踏みしめ、右の片翼をレイヴェルに向けて素早く振り抜く。風圧が草をかき分けレイヴェルに襲い掛かり、注意を怠っていたレイヴェルは、風圧に耐え切れず、少しだけよろけてしまう。そして、その隙をつき、ジルギルスが容赦なく追撃した。

強靱な四肢をバネのように扱い、瞬時にレイヴェル向かいとびかかり、振り下ろした右の前脚をレイヴェルの腹部めがけて振り下ろ

す。一欠けらの遠慮も感じられない攻撃に、身体強化を使っていたとはいえ、鎧など着けていない生身の体が耐えきれはるはずがなく、レイヴェルはまるで紙切れのように吹き飛ばされた。

「がつ……」

レイヴェルは吹き飛ばされる途中にあった大木にぶつかり、そのまま地に落ちた。腹部がジルギルスの爪の形にえぐれ、鮮血がほとばしる。

呆気ない。これが私の最後なのか……。

自分の腹部を見て、レイヴェルは死を悟った。

もつと戦いの準備を整えていれば、意地など張らずに母と一緒クラニカに來ていたら、もつと冷静に対処していたら、このようにはならなかったのかもしれない。しかし、それらはすべて過ぎた話。死の間際にいるレイヴェルにとって、後悔しても仕方のないことだった。

(……ゼルス)

流血し、意識が朦朧とし始めたレイヴェルの脳裏に浮かぶのは、騎士団の仲間でもなく、唯一の母でもなく、一人の男の姿だった。

(そっか。私、ゼルスのことが)

ようやく自覚したレイヴェルは、自然と涙を流していた。この気

持ちに気付いても、もう自分はゼルスとは二度と会えない。レイヴェルの涙は悲しすぎるほど儚く、綺麗だった。

意識が朦朧とし、涙で視界が霞む中、レイヴェルの瞳はある輝きをとらえていた。それは蒼の輝き。ジルギルスが蒼炎を吐き出そうとしている、残酷な輝きだった。

時間をおかずに、ジルギルスの口から蒼炎が放出される。レイヴェルはゼルスのことだけを思い、静かに瞼を閉じた。

十秒は経っただろうか、レイヴェルにはまだ意識があった。しかも、朦朧しているが、先ほどより軽いものだ。

そして、おそろおそろ腹部に手を回せば、なんと傷が治っている。驚愕のあまり瞼を開けると、レイヴェルの瞳に映ったのは、自分とジルギルスの間に立つ一つの影だった。

レイヴェルは再び、涙を流した。悲しみの涙ではなく喜びの涙を。

「……ゼルスッ」

レイヴェルは今すぐにも駆け寄りたい衝動に駆られたが、体はそれに従わなかった。傷が治ったとはいえ、レイヴェルは血を流し

すぎた。薄れゆく意識のなか、レイヴェルは穏やかに気を失った。

レイヴェルがバージリン森林の中腹地点にいたところ、そのバージリン森林に存在する、周囲を結界に囲まれた屋敷の門に男と女の姿があった。

「ゼルス様、行つてらっしゃいませ」

女は男に向けて深々と頭を下げる。純白のカジュアルドレスに身を包む清楚な女の名はルーチェ。古の時代に生まれた光の精霊である。ゼルスにより永き封印から解かれた彼女はいま、寂しげに眼を伏せている。

その彼女から頭を下げられたのは、黒のズボンに、黒のシャツを着込み、上から黒の外套を羽織る黒ずくめの男、今まさにレイヴェルが探しているゼルスだった。

「ああ。行つてくる」

頭を上げゼルスに笑いかけるルーチェの顔は、人とのコミュニケーションの経験が少ないゼルスから見ても何かを我慢しているようで、ゼルスは困ったように笑った。原因は分かっている。励ましの言葉をかけることだっただけで簡単だ。

だが、そのような言葉を彼女に掛けること自体が、逆に彼女に気を使わせてしまうことをゼルスはここ数日で学習していた。ルーチエ曰く、自分は仕える主人を心配してもいいが、その逆、つまり主人が侍女を心配するのはいけないらしい。だから。

ゼルスは左手につけていた白のグローブを外し、ルーチエに見えるように手の甲を見せる。ゼルスの行動を不思議に思っていたルーチエも、ゼルスの行動の意味がわかると、瞳に涙を浮かべ両手で顔を覆った。

ゼルスの手の甲には、金に輝く紋章が刻まれていた。この紋章はゼルスとルーチエの主従の契約の証である。現代では失われたものだが、古代ではよく見られたものであり、二人の絆の象徴だ。ゼルスに刻まれた紋章は主従の契約の証しだが古代ではその他にも、結婚の契約、親愛の契約など様々な契約があり、契約魔法と呼ばれ度々使われていた。

ゼルスが示した、自分の意思を持ち、相手に自分の輝く紋章を見せることは、『絶対の誓い』をあらわす。簡単にいうと、二人の中で決めた約束は絶対に破らない、ということだ。この誓いを破れば、死んでしまう。ということはないが、『絶対の誓い』は最高に神聖なものであり、特に主従の契約など、一方が他方より上位の関係となることを前提とした契約などで、上位の者が下位の者に対して『絶対の誓い』を行うことは、下位の者に対して至上の喜びとなることが古代の風習だった。

「うつ……うつ……」

我慢できずに嗚咽を漏らすルーチエを見て、選択を間違えたかと落ち着きなく体を揺らすゼルス。ルーチエから『絶対の誓い』のことを聞いてはいたが、そこは知識として知るだけのゼルスと、風習として体験していたルーチエ。決してゼルスが軽視して『絶対の誓い』を行ったわけではないが、やはりその時代を生きたものと生きていないものとは相違がでるのだろう。だからといって、ゼルスも生半可な気持ちでやったわけではない。

「『絶対の誓い』のとおり、戻ってくるから」

ゼルスは気を取り直して気丈に発言するが、内心選択が間違えていないか不安だった。しかし、ルーチエの顔から寂しさを取り除くには『絶対の誓い』以外の方法は思いつかなかったのだ。

「申し訳ありません、ゼルス様……では、私は、待っています」

泣きやんだルーチエの顔に、寂しさはなかった。あるのは、満面の喜びだけ。不安から解放されたゼルスはルーチエに笑うと、満足げに屋敷の結界から出て行った。

結界から出たゼルスが後ろを向くと、そこには屋敷はなく、周囲と変わらない森の中の景色があった。結界の効果により、屋敷は隠

されているからだ。

ゼルスは再び前を向くと、強化魔法をかけ走り出す。（最初はクラウロンの店行つて、それから家に帰ろう。レイヴェルとクラニカ……怒るだろうな）と、ゼルスは森の中を高速移動しながら、そんなことを考えていた。

数分経てば、森から抜け出していた。どうやら、屋敷は森の入り口から近い所に位置していたようだ。あとはクレスキャン平原を抜け、ヴィゴリーレを目指すだけ。ゼルスは再び駆け出した。

場面は変わり、バージリン森林の中、Aランクモンスタージルギルスの前に、一つの影。ジルギルスの必殺の技、蒼炎を防ぎ、レイヴェルの命を救った者だ。相当な実力者であると思われるその者は、背後で気を失ったレイヴェルを見ると、呆れた風に鼻で笑った。

（ゼルス……か。悪かったわね。ゼルスじゃなくて）

その者は、腰に提げた二つの剣を腕を交差して抜き、「雷刃」と、双剣に雷を纏わせ、構えた。構えたといっても、傍から見ると両腕の力を抜き双剣をぶらりと下げ、脱力している体勢にしか見えないが、これが、彼女の戦闘体勢だった。

（お母さんだけど……勘弁してね、レイヴェル）

レイヴェルを助けた者　クラニカは、レイヴェルを思ってたか気まずそうに苦笑すると、自身を警戒し唸っているジルギルスを眺めた。

藍色の体を持つAランクモンスター、ドラゴンのジルギルス。Aランクモンスターの中でトップクラスの実力を持つと言われ、冒険者の中で呼び名は、『ベテラン殺し』。数多くのAランク冒険者が殺され、この呼び名がつけられた。ジルギルスの強さの所以は、蒼炎ではない。もちろん、蒼炎もジルギルスの強さを証明するものだが、もっと厄介なものがある。それは、単純な　スピードだ。

唸り声を上げると、ジルギルスはその巨体に似合わない素早さでクラニカに飛び掛かる。普通ならクラニカは避けるという選択をしていただろうが、生憎、背後には愛娘レイヴェルがいた。正面からジルギルスを迎え撃つという危険な状況の中、クラニカはかすかに微笑んだ。

ジルギルスの太く凶暴な右腕がクラニカを上から押しつぶそうと迫るのに、クラニカは何も行動を起こさず、ただ微笑むだけ。そして、ジルギルスの攻撃がついにクラニカに当たり、クラニカがつぶされる残酷な音が森に響くと思いきや、逆に（・・）、ジルギルスの悲痛な叫び声が響いた。

クラニカは唇を線にして笑うと、片腕がなくなり（・・・）
、痛みに暴れるジルギルスは冷静に見ていた。肘の先から綺麗に
切り落とされたジルギルスの右腕は、クラニカの前に供物のように
置かれ、冷静なクラニカと、痛みのせいで暴れているジルギルスの
両者の力関係を如実にあらわしているようだった。

いつの間に……！　クラニカの左の剣から滴り落ちる己の血。そ
れを見るジルギルスの獰猛な瞳は、まさにその言葉を物語っていた。
驚愕、混乱、激痛。絶対的な強者であったジルギルスは、今まで経
験したことがなかったことに、僅かな時間だが戸惑い、一瞬だけ隙
を見せた。

ほんの一瞬、コンマ一秒という時間だったかもしれない。しかし、
クラニカにとってはその一瞬の隙で十分だった。ジルギルスがわず
かな隙をなくし、クラニカに攻撃を開始しようとした時、すでにク
ラニカはジルギルスの視界から姿を消していた。片腕を切り落とし
た憎き敵を探そうとしたジルギルスだったが、案外に、その憎き敵
の居場所は簡単に分かった。

背後。いち早く獲物の気配を察知したジルギルスは、その獲
物を嘲笑うかのように自慢の尻尾を振りながら勢いよく半回転し、
クラニカに叩きつけようとする。だが、おかしい。尻尾に手ごたえ
が全くない。それに、視界にとらえたクラニカは妙な格好をしてい
た。背をジルギルスに向け、片足を踏み出し双剣を地と水平に伸ば
している。まるで、何か攻撃をし終えた後のように。

先ほどジルギルスが見せた隙より遥かに大きい隙をクラニカが見

せているのに、ジルギルスは何故か動くことができなかった。ジルギルスが動かぬまま、クラニカは片足を戻して佇立すると、双剣を鞘に戻した。カチン、と小気味よい金属音が、静まり返った森に響く。

途端、ジルギルスの体の至る所から大量の血が噴き出し、ジルギルスは力なく地に伏した。敗北を自覚できぬまま、藍色の竜はその一生を終えたのだ。

クラニカは死体となったジルギルスを一瞥すると、地に片膝をつけた。自分の乱れる呼吸と疲弊した体を、文字どおり肉体的に感じると、なんとも無理をしたな。と、クラニカはすこし自分に呆れる。

クラニカがジルギルスを倒すために使った魔法は、畢竟、強化魔法のみだ。最初にジルギルスから叩き潰されそうになった時、自身ができる最大まで身体強化と、これまた最大まで強化した双剣で、ジルギルスの目にも止まらぬ速さで剣を振り抜いて片腕を斬りおとした。

そして、ジルギルスが一瞬の隙を見せたとき、自身最強の技といっても過言ではない 乱舞・雷^{いかづち}を放った。簡単に言ってしまうと、敵に最速で突撃し、至る所を切り刻む技だ。

もつとも、普通の強化魔法を使ってジルギルスを斬るということとは、よほどの強者でなければ無理だろう。クラニカでさえ、無理だ。彼女が何故ジルギルスを斬れたかという点、強化魔法に雷の属性を付けたからだ。属性が付いていない強化魔法は単純に対象の能力を

上げるだけだが、そこに属性をつけると、ある部分が特化して強化される。雷は、速度と鋭さが特化される。

クラニカはジルギルスを倒すため、身体強化・雷 と 雷刃 だけに自身の大部分の魔力を費やし、何とかジルギルスを倒すに至った。クラニカとジルギルスの闘いを見た者がいたならば、クラニカの圧勝かと思ったかもしれないが、決してこの闘いは圧勝と簡単に呼べるようなものではなかった。

ジルギルスは、最後まで全力を出していなかった。蒼炎 を防いだクラニカさえも、嘗めていたのだ。これが、クラニカが勝てた理由だ。もし、ジルギルスが驕りなど持たず最初から全力で挑んでいたら、もし、乱舞・雷 を耐えきっていたら。どちらかが成立していたら、今生きているのはクラニカではなかったかもしれない。

クラニカはよろめきながら立ちあがると、レイヴェルが倒れている所まで行き、穏やかに気を失っているレイヴェルを見て、安堵の息を吐いた。

「まったく」

クラニカは呆れながら笑うと、レイヴェルの金髪を優しく撫でた。クラニカはこのまましばらくゆっくりしていたいが、状況はそれを許さない。当面の危機は去ったといえ、ここは夜のバージリン森林。このままいれば、モンスターが血の臭いに誘われて集まってくるだ

ろう。それに、クラニカの魔力はレイヴェルの大怪我を回復し、最大の強化魔法を使ったせいでほとんど残っていない。体力的にも、限界が近付いている。レイヴェルを背負ってバージリン森林を抜けることは、できなくはないが、厳しいと言っているだろう。故に、立ち止まっている訳にはいかない。無駄な戦いを避けるためにも、一刻も早くバージリン森林を脱出しなければならない。だが、事態はクラニカ達を更に追い込むこととなる。

「……流石に、笑えないわね」

クラニカは、草木をかき分けながらこちらに突き進んでくる音に気がつき、冷や汗を浮かべた。やがて、音はクラニカ達の元に辿りつき、その姿を現した。黒い甲殻を夜の闇に紛らせ、天をつくようなクルリと伸ばした尻尾はゆらゆらと動き、先端の毒針を掲げている。カチカチと前脚のハサミを鳴らすのは、大型のサソリのようなモンスター、ヴァルチュアだった。何体ものヴァルチュアは、見事にクラニカ達を逃がさないよう四方を囲み、その背後にも無数のヴァルチュアが待機している。

（なんでこんな時に！）

焦燥ばかり増すクラニカ。クラニカは知る由もないが、このヴァルチュアは最初にジルギルスと戦っていた四体のうち唯一生き残った一体であり、増援を呼ぶためヴァルチュアの巣に戻っていたのだ。そして、運悪くクラニカがジルギルスを倒したタイミングで増援が到着してしまった。当然、ジルギルスを倒すための増援なので、そ

の数が多い。

そんな中、突然、何かに気づいたようにクラニカは背後を向くと、絶体絶命な状況下には似合わない微笑を浮かべた。同時に、クラニカの顔から絶望の色が消え、安堵の色が広がった。しかしヴァルチュアは、人間の感情の変化など気にもせず、残酷にも一斉にクラニカ達に飛び掛かる。

その時、一陣の風が吹いた。風から感じられる懐かしさに、涙腺が緩むクラニカ。眼前に死が迫っているのに、その表情からは全く死を感じさせない。風は優しくクラニカとレイヴェルを包み、その直後、ヴァルチュアたちの研ぎ澄まされたハサミが、クラニカとレイヴェルの体に届いた。いや、届くはずだった。ヴァルチュアたちのハサミがクラニカ達の体に触れようとした瞬間、すべてのヴァルチュアのハサミは弾かれ、全員仰け反った。

クラニカが目の前に居る仰け反るヴァルチュアを見る中、ヴァルチュアの体長の真ん中程に、横線が一本入った。そして、徐々にヴァルチュアの上半分がずり落ち、地面に落ちる。周囲からも何かが落ちた音が聞こえたので、おそらく、他のヴァルチュア達も同じ末路を辿ったのだろう。

クラニカは周囲を見渡すが、夜のせいもあって見えにくいのが、誰も居ない。それならばと、クラニカは風を感じた方向を向き、待った。クラニカはわかっていた。ヴァルチュアを殺したのはだれか、自分と娘を守ってくれたのはだれか。彼でなければ、姿が見えない

場所から自分たちを守り、敵を殺せるわけがない。

十秒ほど経ったか、暗闇から一人の男が姿を現した。かなり慌てて来た様子で、軽く息を弾ましている。黒のズボンとシャツの上から黒の外套を羽織っている。知らぬものが見たら全身黒ずくめのあやしい男だが、クラニカはこの男をよく知っていた。

「ゼルス……」

二週間ぶりの再会だった。誰よりも会いたがっていたレイヴェルが気絶しているのは残念だったが、クラニカはゼルスに歩み寄った。

「クラニカ……早くこの森をでよう。ちゃんとした場所で休んだ方が、ってひひゃいひひゃい（痛い痛い）！」

クラニカはゼルスの前に立つと、ゼルスの両頬をつねった。つねるのを止め、ゼルスを睨むと、

「今まで何処行ってたの？」

と、鋭い眼光。

「えっと、話すと長くなるんだけど……」

苦笑し、顔を僅かに引きながら言うゼルスに、クラニカは深くため息をついた。

「まあ良いわ。無事だったんだし。レイヴェルが起きたら、全部説明してもらっわよ。都合よくここに現れた理由も……ね」

厳しい口調のクラニカに緊張しつつ、ゼルスは真面目にうなずいた。すると、急にクラニカがバランスを崩し、ゼルスに体を預けた。

「クラニカ？」

ゼルスが怪訝に思い、クラニカの顔を怖々と覗きながら尋ねると、帰ってきたのは微かな呼吸音だけだった。理解したゼルスは、顔を綻ばせ、くすりと笑った。

（何だ……眠ってるのか）

体力的にも精神的にも疲労がたまっていたクラニカは、危機が去り、ゼルスが戻ってきたという安心感で、眠ってしまったのだろう。ゼルスは穏やかに眠るクラニカを抱えると、レイヴェルの元へ行った。

ゼルスは久しぶりにレイヴェルとクラニカの顔を見て、自分が安堵している事に気がついていた。ようやく帰れたと、家族という存在がいなかったゼルスは、自分がそう思えることが何より嬉しかった。だからこそ、これからクラニカ達の家に戻って言う言葉を考えると、胸が痛くなる。しかし、もう決めたのだ。ゼルスは眠っている二人を連れて、力強く歩み出した。

二十一話 乱舞・雷（後書き）

大変お待たせしました。

読んでくださりありがとうございます。

2011.9.18（Sun）

はくゆ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8497n/>

ダンジョン

2011年10月6日19時12分発行